

始



東京高等師範學校附屬小學校內

初等教育研究會編纂

小學綴方教授細目

東京 培風館

特116
459



綴方教學細目

東京高等師範學校附屬小學內

初等教育研究會編纂



大正
12. 5. 16
內交

尋常小學綴方教授細目

初等教育研究會編纂

序言

一 本細目制定の由來

我が初等教育に於ける綴り方教授は、最近數年間に於て著しく進歩したことは何人も認めるところである。そは何よりも兒童の成績が最も雄辯にこれを證明してゐる。これ一に實際教授者の機まざる努力の賜物であらねばならぬ。併しながら、綴り方なる教科は、他の諸教科と甚しく趣を異にし、教科書乃至教授課程案の如きものが文部當局によつて何等示されるところがない。従つて、實際教授者は各自の信する所に據つて兒童を思ふがまゝに指導して來たのである。これ一つには、綴り方の成績をして今日の如く向上せしめた原因でもある。されど、その半面に於ては、綴り方の指導に一定の目標を樹立する能はず、目的論に於ても方法論に於ても甲論乙駁其の趨歸するところを知らざる状態をも招致したことは事實である。

綴り方が既に一教科であり學科課程を示すものである以上、確乎たる目的觀と動かざる指導課程案とを有せずして實際教育に臨むことは、それが教育作業の一つである限り甚しく無謀なことと言はざるを得ない。勿論、綴り方の實際指導者は、自己の信する所に於ては目的觀を有し、指導課程案を有してゐるに相違ない。併しながら、動もすればその其の指導者一個の色づけられる主觀乃至獨斷に陥り易い。これは教育作業に携はる者として大いに反省すべきところであ

らう。

本會はこゝに見る所あり、國語研究部員をして徹底的に綴り方教授に關する各級の研究をなさしめることにした。國語研究部は更に八名の綴り方研究委員を擧げ、日夜これが研究に没頭した次第である。其の間、委員會を開催すること實に四十八回の多きに及んだ。而して、綴り方教授に關する各級の研究中、綴り方教授細目の必要は、全委員のひとしく認むる所となつた。蓋し、綴り方教授が教育作業である以上、ひとり綴り方のみ指導課程案乃至其の細案たる教授細目の必要がないといふ理由を見出すことが出来なかつたからである。否、積極的にいへば、これなくして綴り方の指導に臨むことは殆ど暴虎馮河のたぐひであるとさへ信するものがあつたのである。勿論、我が東京高等師範學校附屬小學校に於ては、從來綴り方教授細目を有してはををつたのであるが、それは既に今日に於ては殆ど全部改廢せらるべきものとなつたのである。かくして、綴り方研究委員は直ちに本細目の編纂にとりかゝることとなつた。

- 一 綴り方は自己の生活を文にあらはし、自己を生長せしめることを目的とする。
- 二 材は主として實際生活から取らせる。
- 三 常に經驗を通して自己を視つめる態度を養ふ。
- 四 發表の態度は外面生活より漸次内面生活に向はせる。
- 五 文體はすべて口語體とする。
- 六 自由選題、課題いづれをも合はせ取る。
- 七 兒童の發達程度に應じて指導する。
- 八 形式の指導は内容に即して行ふ。

目録

東京高等師範學校附屬小學校

九 韻文を作ることは兒童の隨意とする。

次に各學年の發達程度に應じて如何に指導すべきかについて協議し、遂に各學年指導要項の決定を見た。(それは本細目に記載されてあるからこゝには省く)かくして出來上つたものが即ち本細目である。

二 本細目制定の目的

本細目の目的とするところは、兒童の生活内容及びその表現能力の發達程度に應じて、綴り方の指導を如何にすべきかを具體的に明示するにある。故に本細目は東京高等師範學校附屬小學校に於ける兒童の指導目標となるべきものである。一言ふまでもないが、編纂者は單に同校の綴り方指導の目標となるべきことのみを目的として編纂したものである。一般兒童の指導目標に顧慮して、多くの具體的指導例をあげること努めた。故に本細目は都市にも村落にも用ひられるものであり、全國普通の學校に於ける指導上の参考となるべきものであることを何じて疑はない。

三 本細目の内容一斑

本細目は右に述べた制定の目的を顧慮して、先づ各學年の記載形式を左の如く定めた。

尋常小學第何學年

本學年の指導要項

一 取材

二 腹案

三 記述

四 推敲

序 言

五 文話

次に各學期の記載形式は左の如く定めた。

月	第何學期	指導豫定時數	凡何時間
	参考文例及び指導事項		参考文題

指導豫定時數は一學年を三十四週、一週を二時間と見積つて、大體左の如く定めた。

第一學期 十二週 凡二十四時間

第二學期 十三週 凡二十六時間

第三學期 九週 凡十八時間

但し、指導の單位は週を以てせず、月を以てすることに定め、何月(凡何時)と上欄に記入し、一ヶ月を以て大體進度の標準を目當てに指導を進行して行くことにした。

参考文例には、當該學年の標準となるべきもの、鑑賞文の材料となるべきもの、批正乃至推蔽の材料となるべきものをなるべく多方面に亘つて選定したものを掲げること努めた。

指導事項には當該學年の發達程度を顧慮したる指導要項に基き、更に具體的事項の指導を細記することに努めた。尙、鑑賞又は批正の文例に即して、具體的に指導の事項を述べることに努めた。

参考文題には、或は季節的の經驗事項を顧慮し、或は参考文例の内容に類似したるもの等、なるべく多方面の題材を暗示するに足るものを網羅することに努めた。

四 本細目使用上の注意

本細目は右に述べたが如き内容を有し、殆ど教授書の如き性質をも具備してゐる。蓋し、細目は、それが細密であればある程、教授書に接近して來ることは當然のことである。従つて本細目は、如上の意味に於て全國普遍的に指導の標準たらしめんとする編纂者の意圖に沿ふものである。

併しながら、本細目はもとゞ東京高等師範學校附屬小學校に於て使用することが其の制定の根本精神であるが故に地方に於て本細目を使用する場合には、左の諸點について顧慮されたいのである。

(イ)本細目に於ては、尋常小學校第一學年第二學期より毎週二時間づゝの指導時間を設けてあるが、地方の特殊事情によつては、或は第一學年の第三學期からなり第二學年の第一學期からなり指導をはじめてもよし、或は毎週の指導時間を學年によつて或は一時間とし或は二時間とするが如きことは、全く本細目使用者の自由である。

(ロ)参考文例は全く参考のための標準を示すに過ぎない。従つて、それと同一の題を課して綴らせるといふが如きことを決して要求するのではない。又、鑑賞文例にせよ、批正材料の文例にせよ、その文例についてのみ鑑賞批正せしめることを要求するのではない。その指導されつゝある児童の中からあらはれた鑑賞文批正文に即して指導を行ふ場合、指導の事項として標準的参考になるべきものをあげたものである。但し、標準的文例にせよ、鑑賞的文例にせよ、本細目に掲げてあるものが直ちに以て一般の鑑賞的材料にもなり得ることは信じて疑はない。

(ハ)其の他、自由選題と課題との振合ひ、普通文と書翰文との割合ひ、或は童謡又は自由詩の取扱ひ等の明細については、本細目を熟覽の上、地方的事情と児童の發達程度とを顧慮されて實際指導に當られんことを希望するのである。要は、本細目を以て綴り方指導の具體的標準とされて、それに特殊的事情を參酌されたいのである。

今や我が綴り方教授界は、その目的觀に於て、その方法論に於て、又その實際に於て、殆ど群雄割據の如き状態を現

出してゐる。しかも、この渦巻きつゝある現状には、實際家のひとしく不安を感じずにはゐられない所である。かかる時に當つて本會が本細目を制定して綴り方教授の目標をそこに見出さうとする事は、決して徒爾ではないと思ふ。幸にして本細目が全國小學校の綴り方指導に裨益する所があらば本會の光榮である。

尙、高等科の綴り方教授細目は、目下制定準備中に屬するが、我が國の義務教育は早晚八ヶ年に延長さるべきであるから、本會に於ては高等科の細目を以て本細目の延長として、直ちに八ヶ年義務教育の綴り方指導に適用さるゝやうに願慮しつゝ材料其他指導事項の研究を進めてゐる次第である。それも近く完成刊行の運びに到ることと信ずる。

東京高等師範學校附屬小學校内

大正十二年五月

初等教育研究會

目次

尋常小學第一學年.....1

第二學期

九月.....2

十月.....7

十一月.....13

十二月.....19

第三學期

一月.....24

二月.....28

三月.....33

尋常小學第二學年.....39

第一學期

四月.....45

五月.....50

六月.....55

第二學期

七月..... 七
 九月..... 六一
 十月..... 六七
 十一月..... 七三
 十二月..... 八〇

第三學期

一月..... 八五
 二月..... 九〇
 三月..... 九三

尋常小學第三學年

第一學期

四月..... 一〇一
 五月..... 一〇二
 六月..... 一〇三
 七月..... 一〇七
 第二學期
 九月..... 一三四

十月..... 一元
 十一月..... 一三四
 十二月..... 一三八

第三學期

一月..... 一四三
 二月..... 一四八
 三月..... 一五三

尋常小學第四學年

第一學期

四月..... 一六一
 五月..... 一六六
 六月..... 一七一
 七月..... 一七六

尋常小學第五學年

九月..... 一八〇
 十月..... 一八四
 十一月..... 一九〇
 十二月..... 一九五

第三學期

一月.....一九九

二月.....二〇一

三月.....二〇三

尋常小學第五學年

第二學期

四月.....二〇五

五月.....二〇七

六月.....二〇九

七月.....二一一

尋常小學第四學年

九月.....二一三

十月.....二一五

十一月.....二一七

十二月.....二一九

第三學期

一月.....二二一

二月.....二二三

尋常小學第六學年

第一學期

三月.....二二五

四月.....二二七

五月.....二二九

六月.....二三一

七月.....二三三

第二學期

九月.....二三五

十月.....二三七

十一月.....二三九

十二月.....二四一

第三學期

一月.....二四三

二月.....二四五

三月.....二四七

尋常小學校六年級

第一學年

第二學期

一月

二月

三月

四月

五月

六月

七月

八月

九月

十月

十一月

十二月

第一學期

一月

二月

三月

四月

五月

六月

七月

八月

九月

十月

十一月

十二月

尋常小學第一學年 指導要項

一 取材

- 1 經驗を思ひ出す指導をする。
- 2 多方面に取材の暗示を與へる。

二 腹案

- 1 經驗の順序によつて自然に記述の順序を定めさせる。
- 2 特別の場合を除き、嚴格な意味に於ける腹案の指導はしない。
- 3 思ふがまゝに綴らせて想と筆を伸ばさせる。

三 記述

- 1 主として片假名を以て記述させ、片假名の使用に慣れさせる。
- 2 記述の時には、文字や假名遣ひに屈托しないで綴る習慣を養ふ。但し、質問のある時は教へる。
- 3 落つて綴る習慣を養ふ。

四 推敲

左の事項について正させる

正 誤字、脱字、句讀點の誤り（但し、これは嚴格の意味ではない）、假名の混用、發音表記の誤り、意味の不明等。

五 文 話

1 取材の指導を中心として、綴らんとする心を養ふ。

2 参考文を與へて取材の範圍を知らしめ、或は他の文と自己の文とを比較せしめることによつて文章觀の初歩的指導をする。

注 本學年に於ては第二學期から綴り方の時間を特設して指導して行く。

教授細目

第二學期

指導豫定時數 凡二十六時間

月	九	参考文例	指導豫定時數	凡	二十六時間	参考文題
		キノフノコト				キノフ面白カ ツタコト
		ワタクシ ハ キノフ ネボウ ヲ シテ シカラレマシタ。イソイデ カホヲ アラツテ				ウチデアソン ダコト
		ゴハン ヲ タベマシタ。ソレカラ オヒルマヘウチ 本ヲ ヨンダリ エヲ カイタリシテ				トモダチトア ソンドコト
		アソビマシタ。ソノウチニ オヒルゴハン ニ ナリマシタ。カラ ミンナト 一シヨニタ				
		ベマシタ。コンド ハ ソトヘ デテ アソビマシタ。ソレカラ ユフガタ ニ ナリマシタラ				

(時 七 凡)

クワジダ ト イフノデ ビツクリ シマシタ。ソレヲ ネエサン ニ ケイト ヲ アム

ニチエウ日ノ
コト

指導事項

一「さあ、これから綴り方を書いてもらひませう。綴り方は、ちつともむづかしいものではありません。皆さんが毎日見たり、聞いたり、したり、思つたりしたことを何でも書けば立派な綴り方になります。何を書かうかと考へてみて、それが極つたらお書きなさい。」と、取材の範圍の廣く自由であることを話す。

クワジヲ見タ
コト

二此の参考文例はかくして出来上つたもの、中等(女)兒の成績である。全く経験のみの記述である。「ワタクシハ キノフ ネボウ ヲ シテ シカラレマシタ。」と、ありのままを告白するところに綴り方としての價值がある。何でも思つたこと、あつたことを正直に告白せしめるやうに指導すべきである。

三此の文は深刻であるべき経験を極くあつさりとして記述してゐる。「ユフガタ ニ ナリマシタラ」クワジダ ト イフノデ ビツクリシマシタ。唯、それつきりである。どこで火事があつたのか、附近の人々がどうしたのか、それは見てゐる筈だが「ビツクリ シマシタ」の一句で片づけて平氣でゐる。一年生の綴り方としては全く無理のないところであるが、これらから踏込んで経験に對する比較的こまかい想起を促し、それを綴らせる様にすべきことである。

四此の文の様に経験の順序に従つて自然に記述せしめると、「ソレカラ、ソレカラ」といふ接続詞が無暗に出て来る。それは形式上から指導すべき一事項である。

五綴り終つて時間に餘裕のある兒童には、その文に因んだ繪を畫かせることも綴り方を喜ばせる一動機になる。此の文の終りには女兒（作者）の「ゴハンヲタベテキルトコロ」の繪が、文よりも上手に描かれてある。

參考文例

ウチノウサギ

ボクガ六ツノトキハウチニウサギガカツテアリマシタ。アル日、ボクガヨウチエンカラカヘルト、ウサギガドコヘイツタノカキマセンデシタ。ボクハガツカリシテ、「ウサチヤン」トイヒナガラソコヘララサガシテアルキマシタ。ソノトキニハ、ソノシバノトコロニ、白イモノガピヨンピヨントノデキマシタ。ボクハソノソバヘイツテミタラソレハウサギデアリマシタ。

指導事項

一此の文の内容をなす経験は、作者が現在より二三年前になしたものである。そして、かく時間が経過してもそれを想起する力の大きな所以は、その経験が作者にとつては極めて感興の深かつたものであるからである。取材は経験の新鮮何れからでもない。なるべく印象の深く感興の深いものに目をつけさせるやうに導くことは無理ではない。
二此の文は雑然と多くの経験を記述したものではなくして、ある一つの経験を中心にして文をまとめてある。なるべく此の文のやうにするのがいゝ綴り方であることを適當の言葉で説くべきである。

ナクナツタオ
母サンノコト
ヨウチエンノ
ウンドウクワ
イ
ナクナツタオ
ニンギヤウガ
出タコト
キヨネンキナ
カヘイツタコ
ト

三ニハノシバノトコロニ、白イモノガピヨンピヨントンデキマシタ。」は印象的の描寫である。蓋し、かゝるすぐれた描寫の據つて來たる原因は作者の生活にある。作者が愛する兎の見えるのに、小さき胸をいためて血眼で捜し廻つた。漸く庭の向ふの青い芝の上に白いものを見つけた、その歡喜は作者の眼にいつまでも「シバノトコロニ、白イモノガピヨンピヨントンデ」ゐる光景をうつしてゐるのである。経験に對して眞剣であれ、生活に對して眞剣であれといふことを適當の語で説くべきである。「こんなよい文が出来たのは〇〇さんが本當に兎を可愛がつたからです。」位の程度で説き得る。

參考文例

ハチノス

私ノウチニハハチノスガアリマス。コノマヘ、私ガハチノキルヘイノトコロヲタタキマシタラ、ソノ中ノ一ビキノハチガトンデキタノデ、私ハイモウトノ教子チヤント二人デニゲマシタラ、ソノハチガ教子チヤンノカホノトコロヲスレスレニトンデキテ、又向フヘトンデイツテシマヒマシタ。

コノゴロハマイアサマイアサ、オキテミマストハチハ一ビキ一ビキヘツテイキマス。

イツカオトウサマガ、ニハノハウヘイツタノデ、私モツイテイツテミルト、オトウサマガソノハチノスヲトツテシマヒマシタ。
ソシタラ、オカアサマガソノハチノスヲドコカヘオステニナリマシタ。

ウチノ犬トニ
ハトリ
ボクノウエタ
松ノ木
ウチノアカン
ボウ
私ノスキナ本
オモシロイ車
シヤウサン

指導事項

- 一此の文の内容は、或一日の経験でもなく、又一日の中の或経験でもない。即ちある一事實を中心としたる連続的の経験である。斯うした取材の方面のあることを指導出来る。
- 二此の文の如きは、取材といひ表現といひ本學年の程度としては先づ上の部に屬すると思ふ。かかる文を全兒に示し、「どこがよいか、自分の文とくらべてどうか。」といふやうに、鑑賞の初歩的指導をして行く。
- 三文中圈點を附してある部分の如きは描寫として此の學年の程度ではすぐれたものである。かゝる手法の初歩的指導をする。
- 四此の文の作者は、未だ讀本で習はぬ漢字、「私」教の如きを使用し、句讀點も相當に整理され、且つ文に段落らしいものをつけてゐる。かゝる形式的方面は、一般兒童の見つけ得ぬ所であらうから教授者から發見するやうに仕向けてやる。

參考文例

エノシマニイッタコト

ボク ハ ネエサン ト オトヲサン ト ボク ト エノシマ ニ イキマシタ。ソレカラ
 ボク モ ネエサン モ オトヲサン モ ネマシタ。オキルトキニハ ミシナゴハヤク チキ
 マシタ。ソレカラ カハルトキ キシヤ ニ ノツテ カヘリマシタ。

指導事項

- 一此の文は最劣等兒の文である。推敲の材料として参考のために掲げる。かゝる文を推敲する場

日光ヘイツタ
 コト
 ツル見ヘイツ
 タコト
 ヨコハマヘイ
 ツタコト

合、まだ此の學年の程度では一般批評の材料とせぬ方がよい。即ち作者一個について推敲の指導をする。

- 二先づ右の文全體の意味が不明である。作者にその不明なることを自覺せしめなくてはならぬ。「ソレカラ ボク モ ネエサン モ オトウサン モ ネマシタ。」は、文のつゞきからすれば「エノシマ」へ行つてから寝たことになる。それではどこで寝たのか。宿屋へ泊つたのならそれを断らねばならず、又ひるねをしたのならさうと記述しなくてはならぬ。かく全體的に意味不明の箇所を自覺せしめて推敲せしめる。
- 三文中、右傍に線を引いてある部分は重複の箇所である。注意すれば此の學年の程度でも容易に推敲し得る。
- 四但し、如何に二、三の注意を守つて推敲しても、此の文はいゝ文にはならぬ。唯、江の島へ行つて来たといふ文の報告にすぎぬ。歸りには汽車で来たといつても行きにも汽車に相違ないのだ。くだらない報告である。結局、形式の推敲をいくらしても文はいゝ文にならぬ。こゝに生活の指導が入つて来なくてはならぬ。江の島へ行つた、どんなものを見たか、どうして遊んだか、面白かつたか、それらの経験に對する想起から指導してかゝらねば無効である。

參考文例

品川ノコドモクワイ

ボク ハ アシタ ノ コドモクワイ ヲ タノシミニシテキマス。ソノ コドモクワイ ハ

日エウガクカ
 ウ

品川デス。ボクハ、ソレバカリニカンガヘテ キマス。ソノ ウチハ 原 ト イフ ミヤウジ
 デス。ソコニハ、モトチヤント イフ カハイイ コ ガ キマス。ボク ガ イク ト、ボク
 ノ コトヲ アキチヤン ト イヒマス。ダカラ ボク モ カハイラシクテ タマリマセ
 ン。ボク ガ カヘルトキニハ キツト「アキチヤン ヲ オクツテ イクノダ」ト イヒマ
 ス。ボク ガ コノマヘ イツタ トキニハ、ユフガタニ ナツタケレドモ、モトチヤン ハ
 オクツテ イクノダ ト イヒマシタ。ボク ハ サムイカラ オヨシナサイト イヒマシタ。

指導事項

- 一 取材の範圍が段々と廣く深くなつて来る。右の文は、未來の經驗を想像してのよろこびの情を述べたものである。そして、その想像は過去の經驗が基礎となつてゐる。そのことは文の後半に示してある。かくの如く取材は未來のことに對する想像にまで及ぶ。かゝる文を示して取材の範圍を暗示することも一法である。
- 二 文の如何は結局生活の如何にある。右の文の作者の生活は、愛に満ちてゐる。従つて豊富な想像をその愛の對象になげかけてゐる。明日もきつと「もとちやん」はあのかはいゝかほをして僕を待つてゐて呉れるのだと作者は心で信じてゐる。それは文に表はされてはないが、文のトーンは明かにそれを示してゐる。勿論作者の意識的の手法から生れたものでなく、全く生活そのものの表はれである。こゝに生活の指導が十分入つて来るべきである。
- 三 此の頃から、兒童には文を作る上の簡単な目標を二つか三つ位掲げつゝ進ませるがよい。

(イ) 意味のよく分るやうに書きなさい。

アスノ日エウ
 オトウサマノ
 オミヤダハナ
 ンデセウ
 アタラシイト
 クホン
 ウチニアカチ
 ヤンガウマレ
 マス

(ロ) なるべく長く書くやうになさい。

想を明かにし、筆を伸ばすために右の二項を掲げて進む。そして右の参考文の如きはこの目標にやゝ近づいてゐることを意識せしめる。

参考文例

美上ト美下ノマチガヘ

コノアヒダ ツヅリカタ ヲ カヘシテ モラヒマシタカラ ミマス。美上デシタ。ソレカラ
 ラ ウチヘ カヘツテ、オカアサン、オカアサン、今日ハ 美上ヲ モラツテ キマシタカラ
 ミセテ アゲマセウカ。ト私ガイヒマスト、オカアサンガ、「オマヘニ美上ガトレテ タマルモン
 デスカ。」トイヒマシタカラ 私ガ ミセマスト、ソレ ハ 美上デハナクテ 美下デシタ。私ハ
 ビツクリシマシタカラ、「オヤ、ガクカウ デ ミタトキ ニハ 美上デシタリ、ホント ニ フ
 シギ デスワ。」ト オカアサン ニ イヒマシタラ、「オマヘ ハ ウノボレ ガ ツヨイネ。」ト
 オツシヤイマシタ。

指導事項

- 一 綴り方の學習に入つてから一ヶ月、既に一女兒はかゝる文を綴つてゐる。彼等が如何に美・良・可とか甲・乙・丙とかいふ評點に信頼し注意してゐるかを指導者は三思しなくてはならぬ。綴り方の學習動機を盛んにするためには方便として評點をつける際注意すべきである。或兒童には常に美上とか甲上とかのみ與へ或兒童には常に可下とか丙下とかを與ふることはよろしくない。評點は全く方便である、決して文そのものの客觀的評價を示すべきものではない。従つて、同

スキナツヅリ
 カタ
 フヂサンニホ
 メラレタコト
 ヲバサマニア
 ガタオハガキ
 カキトリノキ
 ヤウソウ
 カケアシデー
 トウニナツタ
 コト

一の兒童でも時にぐつとよい評點を與へてよろこばせ、又はぐつと下の評點を附してはげませる等のことをしなければならぬ。

二評點は方便であり効果は相當にあるが決して本質的に文を生長せしめるものではない。吾人は必ず兒童の成績物に評點の外に批評の言葉を附して渡すことを怠つてはならぬ。この批評の言葉こそ眞に文そのものの價値に即したものでなくてはならぬ。この學年の程度で、右の文に例をとつていへば、「今日ノ コソ 美上 デスカラ オカアサン ニ オミセシナサイ。今日ノ 文ハ ホンタウニ スラスラト ヨクカケマシタ。シカシ ウノボレテキルト ヘタ ニ ナリ マスヨ。」といふ具合に書いて渡す。

參考文例

チヨコレイト ヲ モラフ マヘ

「オ父サン、ツヅリ方 ヲ 見テ チヤウダイナ。私ハ サウイヒナガラ ニカイ カラ オリテ 來マシタ。ソノトキ オ父サン ガ「ドレ、見セナサイ。」ト イヒマシタラ、私ハ キユウニ 見テモラフノガ イヤニナリマシタ。ソレハ、オ父サン ガ「美上丸 ダツタラ、チヨコレイト ヲ 一ハコヤル。ソレカラ 美上 ダツタラ オクワシヲ ニツ ヤル。モシ 美ダツタラ オクワシ ヲ 一ツ ヤル。」ト、カウ イフ ヤクソク ヲ シテアルカラデス。デモ私 ハ 思ヒキツテ 見テモラヒマシタ。オ父サン ガ 私ノヲ 見テ イラツシヤルト ネエチヤン ガ ニカイカラ オリテ 來テ、ツヅリ方ヲ出シマシタ。ネエチヤン ト 私 ハ ツギノ ヘヤ デ マツテ キマシタ。オ父サン ガ テン ヲ ツケテ イラツシヤルトキ、

ヨミ方ノジカ
ボクノカイタ
ヅグワ
ボクハ手工ガ
大スキ

オ母サン ガ

「惇子、オマヘノハ 良 デ 道子ノハ 美 ダ。」

トオツシヤイマシタ。私ハ ソノ時 ヒヤツ ト シマシタ。ソレダノニ、オ父サン ガ カヘシタ 紙 ヲ 見ルト、リヤウ方トモ 美上丸 ダツタ ノデ 私ハ ネエチヤンニ スガツテウレシナキ ヲ シマシタ。ソレカラ チヨコレイト ヲ モラヒマシタ。

指導事項

一この文も評點に關した文で、前に掲げたものと精神に於て似通つてゐる。併しながら、その手法に於て、生活に於て前の文から見ると數段上に位すべきものである。此の學年としては全く模範的の參考文としてよい。吾人はかゝる文によつて、兒童が家庭に於て綴り方の學習をなしてゐることを知り、又、父兄の指導振りが如何に自然であるかを知ることが出来る。この父兄は美上丸とチヨコレイトといふ子供の喜ぶものをかけて綴り方の學習慾をそゝつてゐる。それは理屈を抜きにして、自然の愛から出てゐるところを見なくてはならぬ。そして此作者はかゝる父兄の奨励から、かゝるよい文を生み出してゐる。この文は、吾人の指導に對する暗示を可なり豊かに示してゐる。

二この文の書き出しについて注意せしめるがよい。殆ど大家の小説の書き振りに髣髴たるものがある。又、一片の仕組みにもそれが認められる。かゝる文によつて優等兒の文章觀を指導して行くことは有効にして可能である。

三經驗の中には行爲・見聞・思索・感情等凡て自己の過去及び現在の生活に於て經過し又しつゝあ

三るところの生活全體を含めるものと考へ得る。けれども、一年生位では、多く行爲・見聞の報告に止るのが多い。しかるに、右の文等では、「私ハ……イヤニナリマシタ。」デモ私ハ思ヒキツテ……。「私ハ、ソノ時、ヒヤツトシマシタ。」といふやうに行爲・見聞の報告より更に立入つた作者の感情といふやうなものが含まれてゐる。それらも指導によつてそこに進ませなくてはならぬ。

参考文例

ウインドウクワイ

コノアヒダノ ウインドウクワイ デ ボクハ、一トウヲ トリマシタ。カケダス トキハ 七人 ナラビマシタ。ササ木先生 ガ ビストル デ ヨーイドン ヲ ウタウトスルト ビストル ガ ナリマセンデシタ。又ヤルト 又ナリマセン。三ドモシタガ ダメデシタ。ボク ハ ツマラナクナリマシタ。ソシタラ ササ木先生 ガ ロデ「ヨーイドン」トイヒマシタカラ、ボクハ一シヤウケンメイニカケマシタ。山本クン ガ イツモ ボクヨリサキニ オルノデ コマリマシタ。ボク ハ 一シヤウケンメイニ 山本クンヲオヒコシテ ケツシヤウテン ヘ ハイリマシタラ、六年ノ人が 一トウノ ハタ ヲ モタセマシタ。ソレカラ シュジ先生ノマヘヘイツテ 一トウノ メタルヲモラヒマシク。

指導事項

一十月は運動會のある月である。凡ての児童が運動會の經驗を共通に有してゐる。かゝる共通の經驗を有してゐる場合には、吾人はむしろ課題で指導して行くの有効にして便宜であることを

ジャンケンイ
クサ
スキライカン
長
玉オクリデマ
ケタコト
コノアイダノ
エンソク
コノアイダノ
クワジ

主張する。

二「運動會」などといふ文題はやゝもすれば陳腐な月並なものやうに取られる。しかし、一年生や二年生位までは、この運動會がはじめての經驗として可なりに豊富な生活内容となつてゐる。その間に隨意選題で文を作らせてみよう。殆ど全部の児童は「ウインドウクワイ」のことを書くであらう。さうすれば却つて課題で指導する方がいゝのである。

三右の文は、自己の最も忘れがたい場面だけを述べて打切つてゐる。運動會のプログラムの延きのばしのやうな文こそ月並であれ、かゝる文は自己の生活を表現したものであつて、従來の囚はれた課題主義とは雲泥の差を認め得る。凡て課題をなす場合、「何々を何々の順で書け。」といふが如きは慎まねばならぬ。「この間の運動會のことを何でもいゝから書いてごらんね。」「この間水道が止つたでせう、皆さんはよく知つてゐるでせう。その時のことを書いてもらひませう。」といふ具合に課す、即ち彼等の生活を束縛しないやうに課すべきである。

参考文例

ウチノトケイ

アルバン ノ コト、ウチノ トケイ ガ トマリマシタ。ソシテ、ジカン ガ ワカラナクナリマシタノデ、ウチノ ニイサン ガ カウバン マデ ジカン ヲ 見ニ イツテ 來ル人ニハ 五セン アゲルト イツタノデ、私ハ ユウキ ヲ ダシテ カウバン マデ イツテ 中ヲ ノゾイテ見タラ 六ジ十五分デシタ。オマハリサンハ 私 ヲ シツテ キル ノデ

デンキノキエ
タコト
テイデンデコ
マツタコト

(時 七 凡)

ワラツテキマシタ。私ハ ソノトキ、ソトヘデタトキ、チヤウド、ミカヅキ、ニ、ナツテキマシ
タ。ホシモ、ピカピカトヒカツテキマシタ。ソシテ、ウチ、ヘ、カヘツテ、ニイサンカラ、五セ
ン、モラヒマシタ。

參考文例

一かゝる経験事項を直ちに取つて綴り方とするやうになつて來ると、綴り方の材料が無いと訴へ
しめるやうなことはいらない。如何なることでも生活そのままが綴り方になることを説かねば
ならぬ。

二この文に於て、圈點の部分は描寫としてすぐれてゐることを作者自身に自覺せしめる。次に、
傍線の部分は、描寫としては決していけないことはないけれども、經驗の順序からいふとこれ
は不自然である。家を出た時作者は三日月を見、星を見てゐるのである。それは交番に行く前
のことである。勿論歸りにも見てゐようが「私ハ、ソノトキ、ソトヘデタトキ：」とは作者
自身も家を出た時だといつてゐる。かゝる實際經驗の順序によつて記述せしめることを指導して
行ける。

三この文などでは最もよく生活の指導といふことに着眼される。即ち、五錢の錢が欲しくてやつ
たことか、そんなことに頓着なくやつたことか、その貰つた五錢はどう處分するのか等は小さ
いことながら一年生の程度としては注意して指導すべきである。

參考文例

日光(その一)

松ノリヨカウ(一)

ボク、ハ、オトウサン、ト、キナカ、ノ、ニイサン、ト、日光、ヘ、イキマシタ。上ノ、デ、キ
シヤニ、ノツテ、日光エキ、デ、オリマシタ。ソレカラ、デンシヤ、ニ、ノツテ、ウマガヘシデ
オリテ、ソレカラ、山ヲノボリマシタ。ソノ山ハ、ニリ、バカリ、アリマス。山ハ、イロハザカ
ト、イフ、名ガツイテキマス。(ツヅク)

指導事項

一これは續き物である。この作者は日光行の紀行文を作らうとして大いに意氣込んでゐる。そし
て、わざと少し書き出して、餘白に中禪寺湖の景を描いて、今日のをその紀行文第一節としよ
うとしてゐる。

二もうかうなつて來ると、綴り方はひとり手に伸びて來るのだ。吾人は、こゝで大いに作者に期
待するやうに指導しなくてはならぬ。「ハヤク、ツヅキ、ヲ、見、セテクダサイ。」といふ一語が
成績物に書かれてあることによつて、作者の意氣は更に張つて來る。

三この頃からは、そろ／＼續き物が出はじめる。それは全く兒童の自然に出るのを待つてゐてよ
い。こちらから仕向ける必要はないが、出て來たら大いに稱揚してやつていゝ。蓋し、多く綴
りたいといふ内心の要求が表はれ出したのである。

參考文例

日光(その二)

ソレ、ハ、四十八、マガリ、カド、ガ、アルノデス。ソレデ、イロハザカ、ト、イフ、名ガ
ツイタノデス。トチュウ、デ、ケゴンノタキ、ヲ見マシタ。ソレカラ、ツタヤ、ト、イフ、ヤド

尋常第一學年第二學期

白猫ト黒猫(一)

キツネトウサ
ギ(一)

水ノハナシ(一)

サルガダマサ
レタハナシ(一)

コノアイダノ

ジシン

水ドウノトマ

ツタコト

オホシサマ

ヤ、ヘ、トマリマシタ。ヨルニ、ナツテカラ、トウラウヲ、チュウゼンジコニ、ナガシマシタ。キレイ、デシタ。ボク、ハ、アマリ、キレイナノデ、ソトヘ、デテ見マシタ。ソノパン、ハ、クタビレテ、ハヤクネマシタ。(ツツク)

参考文例

日光(その三)

ヨガアケルト、スグニ、フネニ、ノツテ、チュウゼンジノ、コスイヲ、ヒトマハリシマシタ。ソレカラ、ハ、バシヤニノツテ、ユモトヘ、イキマシタ。ボク、ハ、オユニ、ハイリマシタケレドモ、ボク、ハ、ソナニ、スキデ、アリマセン、カラ、二ド、シカ、ハイリマセン。オトウサン、ト、ニイサン、ガ、オユニ、ハイツテ、キル、ウチ、ボク、ハ、ニハ、ヘ、デテ、オモチヤ、ノ、水グルマ、ヲ、イタヅラ、シテ、キマシタ。ソノ、ウチニ、オトウサン、ト、ニイサン、ガ、アガツテ、來タノデ、三人、シテ、オモチ、ヘ、デテ、ハウバウ、ノ、オユヲ、見テ、マハリマシタ。ソコヘ、一パン、トマリマシタ。ツギノアサ、バシヤ、ニ、ノツテ、カヘリマシタ。ツタヤ、ノ、マヘ、ヲ、トホリマシタ。バシヤ、ガ、トマルト、デンシヤ、ニ、ノリマシタ。ソレカラ、キシヤ、デ、上ノ、ニ、ツキマシタ。ボク、ハ、オモシロウ、ゴザイマシタ。

指導事項

一三節に亘つた紀行文、まづ一年生としては此の程度のものであらう。書き物の完成したところで大いに稱揚してやるがよろしい。

(二) 松ノリヨカウ

白猫ト黒猫(二)

キツネトウサギ(二)

水ノハナシ(二)

(三) サルガダマサレタハナシ(二)

二一年生としては如何なる材料が書き物とされるかは指導者に於て大體心得て置かねばならぬ。そは一に豊富な材料といふことに歸する。その一つは右の文の如く旅行である。その二つは彼等が讀みものから來る影響で、童話を自分の頭を通して綴り表はさうとする場合である。これは純粹に創作的ではないが既に自分の中にとり入れたものを自分の頭で自由に表はさうとするもので、必ずしも原作のまゝではない。焼直しといへばそれまでであるが、この頃にはそれを認めてやるがよい。

三下欄に示す参考文題は悉く我が校の一年生が綴つた書き物の文題である。

参考文例

アヤシキ女

ネエサン、ト、教子チヤン、ト、私、ト、三人、で、テジナ、ノ、カンバン、ヲ、見、ニ、イ、ツタトキ、ドツカ、ノ、女、ノ、人、ガ、木、ニ、コシ、ヲ、カケテ、キタカラ、三人、トモ、ソコヘ、コシ、ヲ、カケタ。ソシタラ、ソノ、人、ガ、ソノ、木、ヲ、ウゴカシタ、ノ、デ、私、ハ、ウシロ、ヘ、タホレテ、ハ、イテキタ、ダ、ガ、ヌダ。ソノ、トキ、マク、ガ、アイタノデ、ネエサン、ト、私、ハ、中、ヲ、クゾイタ。マク、ガ、シマツテカラ、教子チヤン、ノ、ハウ、ヲ、見ルト、教子チヤン、ガ、キナイ。オ宮、ノ、ハウ、ヲ、見ルト、ソノ、人、ガ、教子チヤン、ヲ、ツレテ、オ宮ノハウ、ヘ、イツタ。ソノ、人、ハ、ホントウ、ニ、アヤシイ人デアル。

フシギナドエ

ウ日

イタズラツ子

アノ人ハキツ

フリヤウシヤ

ウ年

イヤナ目ツキ

指導事項

一 綴り方の指導は生活の指導に即してなされねばならぬといふ立場から考へても、表現の上から考へても、同一の児童の綴る文の傾向については細心の注意が必要である。此の一女児の文は、一年生としては表現振りからしても生活振りからしても甚だしくマセてゐる。マセてゐるのが必ずしも悪いといふのではない。唯徒らに猜疑の眼を以て凡てを見ろといふことは、人を不幸に導くことを自覚せしめなくてはならぬ。

二 下欄の参考文題は、右の文の作者が一年生中に綴つたもので、その傾向は悉く右の文例に似てゐる。或は「アノ人 ハ キツト スリニニ チガヒナイ。」と電車の中で「アノ子ヨソオ父サンノイフ フリヤウシヤウ年ダラウ。」と登校の途中で思ひ、「イヤナ目ツキデ私ノハウヲ見タノデ ヒヤリドシタ。」と述べる。こゝには指導者の誤らざる人生観から親切な指導が心要である。

三 一年生の文題として何も限定する必要はなからうが、大體敬體の口語文を以て發表してゐるのが自然である。讀本の文などもそこに根基を置いてあるのであらう。ことに女兒の如きは敬體の口語文「アリマス」「デシタ」がよからうと思ふ。この形式から見ても、右の文はマセてゐることに氣づくであらう。但し、右の作者の如きは一般の児童に比して生活程度の深いことは確かであるから、猶更指導上の注意が深くならねばならぬ。

参考文例

サザンクワ ノ ハナ

ワタクシ ハ サザンクワ ノ ハナ ガ スキ デス。
オシイ コト ニハ、サザンクワ ノ ハナ ガ チリハジメマシタ。
キノフ ワタクシ ノ オトモダチ ガ イラツシヤイマシタ。ソシテ、チツタ サザンクワ
ノ ハナビラ ヲ ヒロツテ ママゴトアソビ ヲ シテ アソビマシタ。
ケサ、オトウサマ ガ オニハ ヲ オハキニ ナツタケレドモ マダ ハナビラ ガ 三ツ
四ツ オチテ キマス。

指導事項

一 中等女兒の作であるが確實な記述振りである。文意の明瞭といふ點ではこの學年では模範とするに足るであらう。そして、作者のやさしい感情を伸ばしてやるやうに指導するがよい。

二 美に對する意識乃至うたごゑといふやうなもの發達については多くの議論があらう。併し、事實は一年生でも「オシイ コトニハ サザンクワ ノ ハナ ガ チリハジメマシタ。」と明かにいつてゐる。彼等に美意識乃至うたごゑの可なりにあることを認めた上、その萌芽を伸ばしてやるべきである。

三 但し右の文は量に於て少い憾がある。もつと多く思つたことあつたことを綴らせるやうに仕向けることが大切である。

参考文例

カチヤ ノ ウタ

ニハノ松ノ木
ウチノニハ
キクノハナ
ヒビヤノキク
ノハカ
コクギカンノ
キクニンギヤ
ウ

アラレコンコ

カツチン
 カツチン
 カチヤノ オヤヂ
 イツモ
 カツチン
 カチヤノ オヤヂ
 ソバニ 見テキル
 カチヤノ 子ドモ
 イロ ガ マツクロ
 タロンボウ
 トンボノ ウ
 トントン
 トンボガトンデキル
 アチラニモスウイ
 コチラニモスウイ

シ
 ユキヤコンコ
 チユウチユウ
 スズメ
 カアカアカラ
 ス

トントン
 トンボガトンデキル
 トントン
 トンボガマヨツテキル
 アアカイ
 トンボガマヨツテキル
 イイモノヤルカラ
 コツチヘコイ

指導事項

一 一年生にも立派にうたごゑがあるといふことは右の童謡が示してゐる。これは本校の一年生が實感をうたつたものである。童謡とか自由詩とかは如何にして指導するか。それは本細目の序にも大綱を示してあるやうに、こちらから強ひて作らせるやうなことはしない。唯、表はれて来た場合は、作者個人に即して親切に指導して行くに止める。

二 詩人には詩人タイプがある。一般人に詩的要素が多少づゝでもあるにはある、けれどもそれは

二 詩人ではない。詩人は多く天才である。故にかゝる天才を見出した場合、それを奇に走らしめず、凡に陥らしめずに指導して行くのが小學校に於ける綴り方指導者の取るべき道であらう。これを全學級に強ひるやうなことをすると、「うたをつくるのは易い」「綴り方はむづかしい」と考へるやうになる。即ち、彼等は未だ詩的内容とか詠歎すべき感情とかを意識するには餘りに幼稚である。唯、うたは何ごとでもよい、上と下をウンと明けて、ことばをならべればよい。だから樂に出來上る。しかるに、綴り方は經驗を想起して細密に記述しなくてはならぬ。だからもう綴り方はむづかしくていやだ。うたの方が面白い——といふことになる。これは小學校の綴り方をして不成績ならしめる大原因である。又、日本國民凡てが詩人となる必要がどこにあらうか。よしその必要があつたとて天性だ、駄目のものは駄目なんだ。之に反して、日本國民の凡ては自分の思想感情を文に綴ることは必要なのだから、これに力を注ぐべきである。普通教育といふことを忘れなければいゝのだ。

參考文例

クリスマス

ダンダメ サムクナツテキマシタ。モウジキニ アノ マツ白ナ ユキ ガ フルデセウ。
 ニチエウガクカウデハ ソロソロ クリスマス ノ シタク ヲ ハジメテ キマス。コトシ
 カラ ウチデモ クリスマス ノ オイハヒ ヲ ヤル ト オカアサマ ハ オツシヤイマシ
 タ。私 ハ ホントニ タノシミデス。
 キヨネン ハ ニチエウ ガクカウ デ サンタクローズ ノ ヲヂサン カラ イロイロ ノ

オ正月ガクル
 キヨネンノオ
 年玉
 ハゴ板ヲモラ
 ヲツタコト

ゴホウビ ヲ タクサン イタダイテ 私 ハ オホヨロコビ デ オカアサマ ニ 見セマシ
 タ。
 「オマヘ ガ イイコ ダ カラ コンナニ クダサツタ ノ デセウ。コレカラ モ イイコ
 ニ ナリナサイ」
 ト、オカアサマ ハ オツシヤイマシタ。コトシ ハ ドウカト オモツテ キマス。

サンタークロ
 ーズ
 カルタヲモラ
 ウヤクソク

指導事項

- 一 所謂季節的の文である。けれども、それが作者の心を占領してゐる大きな力なのだから、かかる文が生れるのは當然である。そして、クリスチャン的の氣分が此の文に流れてゐる。その邊から作者の生活指導へ入つて行ける。
- 二 この學年に於ては特に腹案といふ程の指導はしないのであるが、唯、なるべく人に讀んで貰つても分るやうに考へた順序をよく書くこと位を注意して置くのである。右の文の如きは、(1)現在の季節(2)やがて來る季節の想像(3)クリスマス支度(4)クリスマスを想像してのよろこび(5)過去の思ひ出(6)結び——といふ具合に全く自然に運ばれてゐる。斯くの如く記述することによつて人をして明瞭に作者の意を解せしめるものと説くが如き程度で、記述の順序を指導して行く。
- III "First think then write."
 は東西を通じての表現上の原則である。筆を締めさせないことに留意して、「何をどう書かうかよく考へてから書きなさい。」といふことは一年からでも必要なことである。輕卒に筆をとる習慣は決して筆を伸ばせる所以ではない。

第三學期

指導豫定時數 凡十八時間

參考文例及び指導事項

參考文題

參考文例

オ正月

私 ハ オ正月 ニ ナルマヘ ニ ヅシヘ イキマシタ。
 マダ ヅシヘ イカナイ コロ、ウチヘ ウエ木ヤサン ガ カド松ヲ タテニ 來
 マシタ。ケレドモ、ウチノ 女中 ガ「ウチハ キチュウダ カラ カド松ハ タテナ
 イ。」ト、コトハリマシタ。私 ハ ソノトキ、カド松ヲ タテナイノ ハ イヤダ ト オ
 モヒマシタ。

大ミソカ

ススハキ

カド松

タコ

スゴ六

ハネ

(時 六 凡) 月

ソレカラ スコシ タツテ カラ ヅシヘ イツタノデス。キシヤノ 中デ ネエサン
 ニ、「ネエサン ヅシノ ウチニモ カド松ヲ タテナイノ。」ト、キキマシタ。「タテナイ
 デセウ。」ト、ネエサン ハ イヒマシタ。キシヤヲ オリテ スコシ 車デ イクト、ヅシ
 ノ ウチガ ミエマシタ。ヨク 見タラ モンノ トコロニ チヤント カド松ガ タ
 テテ アリマシタ。
 私 ハ ソレヲ 見テ ウレシクテ ウレシクテ ナリマセンデシタ。ヤツト オ正月ガ
 來タ ヤウニ オモヒマシク。
 ヅシノ ウチデハ スゴ六ヤ カルタヲ トツテ オモシロク アソビマシタ。

指導事項

一「オ正月」は課題でやつていゝ。何故なら子供の悉くは「オ正月」を経験してゐる。第三學期の
 はじめに、たとひ隨意に綴らせても多くはお正月を選ぶであらう。普通の経験で、しかも相當に
 綴らうとする感情をそゝるお正月の如きは課題で指導して行くのが有効であり自然である。
 二右の文は課題の成績物である。勿論お正月といつても四十人四十色に経験してゐる。中には平
 穩無事に家庭でお正月をする子供もあらう。中には此の文の如く忌中にあつて田舎へお正月し
 に行く子供もあらう。その四十人四十色の表現を通して各自の生活を指導して行ける。課題も
 隨意もかなれば全く指導上の便宜でどちらにしても指導し易い方をとればよい。
 三右の文は可なりに長くかけてゐるし、子供ながら忌中のさびしみといつたやうなことを文に
 ほはせてゐる。かど松がなくてつまらなく思ふといふ眞情もよく出てゐる。徒らに節約呼ばは
 りをして門松をも廢止しようとするが如きは人間教育上考ふべきことだ。こゝらにも綴り方教
 授者が深く人間教育に關する識見の上に立つて兒童の生活に同情し指導して行かねばならぬ問
 題が暗示されてゐる。

參考文例

オ正月

ボク ハ 大ミソカノ バンニ ヲヂサンニ イハレタコトガ アル。ソレハ、
 「アシタハ グワンジツダ カラ ナイテハ イケマセン。」ト、イフコトデアル。ボク
 ハ キツト ナカナイニシヨウトケツシンシタ。

カゾクアハセ
 イロハガルト

グワンジツ ノ アサ ハヤク オキテ 見ルト、ユキ ガ チラチラ フツテキタ。ボク
 ハ ユキ ガ 大スキ ダ カラ ウレシカッタ。ソレカラ、カホ フ テラヒニイッタ。アタ
 ラシ イ ヒシヤクノエ ニ コンブ フ ムスンデアツタ。カホ フ アラツテカラ、オカア
 サマ ガ、「オク ヘ イラツシヤイ。」ト、オツシヤイマシタカラ、ボク ハ イモウト ト オ
 トウト ト 一シヨ ニ オク ヘ イキマシタ。サウスルト、ゴチソウ ガ キマシタ カ
 ラ、ゴチソウ フ タベ テ ハネ フ ツイ テ アソング。ケフ ハ フヂサン ニ イハ
 レタ トホリ ダレ モ ナイタ人 ハ ナカッタ。

トランブアソ
 ビ
 ユキダルマ
 オミカントカ
 ルタ

指導事項

- 一 この文は同一時に於ける「オ正月」の課題から生れた成績である。唯男子の代表として掲げた
- 二 ものに過ぎぬ。表現上から見て此の位に續けたらいとしないでなくてはならぬ。
- 三 二かゝる文の生活指導としては、よく叔父の言を守つて泣かずに元日を送つた如く、年を一つ取つたのであるから、今年は大いに大人になつて、一年中泣かない位の決心で勉強もやり、運動もやる様にならねばならぬといふ具合に指導して行ける。

参考文例

ゆきのうた
 おには の すみ の
 まつ の 木 が
 おゆき の ぼうし

ただいで
 はなよめさん に
 なりました
 あれ〜
 おには の まつの木が
 きれいな〜
 わたぼうし

けさの つらら
 ひかる ひかる
 つららが ひかる
 びか〜ひかる
 ぎん の ほしびかり
 ひかる ひかる
 つらら が ひかる
 びか〜ひかる
 きん の ほしびかり

おちる おちる
つらら が おちる
竹のはの上の
天から おちる

指導事項

一「ゆきのうた」は女兒、「けさのつらら」は男兒の自由詩である。自由詩についての指導方針は十二月分のところで述べたから参照して貰ひたい。
二文字の上からいふと、右の二つの自由詩は、何れも平假名を使用してゐる。一學年に於ては大體に於て片假名の使用に慣れさせるのであるが、彼等が自由に平假名を使用することは大いに結構なことである。ことに自由詩の如きは平假名で書かなくては作者は満足しない感情を持つてゐる。

参考文例

ニハノ スズメ
キノフ ハ オヤスミ デシタカラ イツモヨリ スコシ オソク オキマシタ。イソイデ
カホヲ アラツテ、ソトヲ 見マスト、スズメ ハ ニハノ 松ノ木 ニ トマツテ、ナ
ニカ オモシロサウ ニ ハナシテキマシタ。
シカシ、私ハ オソク オキタノデ、スズメ ニ ワラハレテ キルヤウ ナ キガシマシ
タ。

月 二

(時 七 凡)

指導事項

一これらがいはいゆる自己を告白した文である。かくて綴ることによつて自己が益々生長して行くのである。作者は眞面目な反省の生活をつづけてゐる。絶えず自分といふものを眺めてゐる。そこがよいのだといつて、この態度を支持せしめるやうに導かねばならぬ。
二「スズメ」が「ハナシテキル」と見、「スズメニワラハレテキルヤウナキガシタ。」といつてゐる。自然の詩人は尊いものである。指導者は是非、北原白秋氏著「雀の生活」を一讀されたい。

参考文例

クワジノ コト
キノフ クワジ デシタ。ボク ハ 見ニ イキマシタ。ズイブン オソロシウゴザイマシ
タ。ボク モ イモウト モ コハガリマシタ。
サカヤ モ ゴイモクヤ モ ヤケマシタ。ソノ クワジ ニ ナツタ ノハ デンキ カラ
火 ガ 出タノデス。ザイガウゲンジン モ ズイブン イキマシタ。ボク ガ 見ニ イツタ
トキ、ザイガウゲンジン ガ ワ ヲ ツクツテ、ソノ ワ ノ 中 ヘ 入レマセンデシタ。
ソノウチ ニ シヤウボウ ガ キマシタ。
ボクハ ハジメテ クワジ ノ ウチヲ 見マシタ。カハイサウ ダ ト オモヒマシタ。
ツレデモ ズイブン タクサン ニモツ ヲ ダシテアリマシタ。ソノ 人 ハ ヨロコソデキ

尋常第一學年第三學期

大カゼノヨル
水ノ出タコト
デンシヤノシ
ヤウトツ
水ノトマツタ
コト
カミナリ

マシタ。ソコニ川ガアリマシタケレドモソレデモスコシシガキエマセンデシ
タ。ソノアトヲシヤウボウガキテケシマシタ。

ボクハモウアンシンヲシテカヘリマシタ。

指導事項

一段々筆が伸びて来るところに注意して指導すべきである。最早、單に火事があつたといふ報告
だけで満足してゐなくなる。その場面を描寫したり自分の感想をまじへたりしようとする。

二描寫の初歩的指導として、「何事でも目に見えるやうに書くのがいいのです。この文などは、在
郷軍人が働いてゐるあたりが目に見えるやうに書いておます。」など、具體的の例を以て話すべ
きである。

三一時間に右の文位書けば量としては相當に多い方である。これらも一般兒童又は特に量の少い
子供に比較せしめて反省せしめるがよい。

參考文例

大チシン

ガタガタトシヤウジモガラスドモミンナナリ出シマシタ。ボクハハジメ
ハカゼガツヨクツイテキルトオモツテトノハウヲ見テネテキマシ
タ。スルトアタマノ上ノデンキモハシラモウゴキマス。ボクハオフネ
ニノツテキルヤウニユスラレマスノデビツクリシテトビオキマシタ。オ母サマハ
ボクラニ「チシンノトキハスグニトヲアケテシヅカニシテイラツシ

キイ。」トイヒマシタ。カエ、トヲアケマシタ。ゾアウチニチシンガダンダン小
クナリマシタ。

ボクノウチデハニハノトウロウガタフレマシタ。オモテデハスイドウ
ガコハレマシタ。

指導事項

一前にも言つてあるやうに、大地震などは兒童の共通の経験であり、同じく可なりに深い感動と
恐怖とを持つてゐる事實である。かゝる事變のあつた間際には課題で共通的に指導して行くの
が妥當である。

二右の文は全體の結構としてはまづい點がある。それらは、共通の経験を有してゐるのだから學
級に示して發見せしめるがよい。それは、まづ時間が記入してないために、いつ頃のことかわ
からぬのがその一つ。最後の行で、庭の燈籠が倒れたり、表で水道が壊れたりしたのも同時に
見てゐたやうに記述してゐるが、それは（夜の出来事なのだから）翌朝になつて分つたのであ
る。それを斷らないのがその二である。結構、右の文では、時の記述がない爲にかゝる不備を
來たしたのである。凡て、かゝる出来事を記述する場合は、大まかでもよい「ゆふべ」とか「き
のふのおひる頃」とかいふ時間の記述を怠らぬやうに指導する。又、同時刻のことを記すので
ない場合には、「それから」とか「つぎのあさ」とかいふ時間の経過を記させねばならぬ。

三但し、部分的の描寫とか心持とかは可なりにすぐれてゐる。それらは鑑賞せしめるがよい。と
かく、低學年の子供は、全體を見通して文のよしあしを定めず、小さな美點や小さな缺點をの

參考文例

みほじくる辭があるから注意すべきである。

メイジジングウ

ボク ハ キゲンセツ ニ ガクカウ ノ シキ カラ カヘツテ、オトウサン ト オカア
 サン ト オトウト ト マン中 ノ ネエサン ト アカチヤン ト ミンナ デ 六人 一
 シヨニ メイジジングウ ヘ イキマシタ。ソコデ 口ヲ 水デ キレイ ニシテ カミサマ
 フ オマヘリ シマシタ。ソレカラ、オベンタウヲ タベマシタ。ソレカラ、ホウモツデン
 ニ イウテ オロイロ ノ モノヲ 見テ、トリキ ノトコロヘ 出マシタ。スコシ イウテ
 オスシヲ タベマシタ。
 一ボク ノ 身ネエサン ト オニイサン ハ ウチデシタ。オニイサン ハ フツトボール
 フ 見ニ イキマシタ。オネエサン ガ「カヘリ ニ オスシヲ タベタラ、キツト オスシ
 フ モツテ コナキヤ イケナイ。」ト、イウタカラ、オミヤゲ ニ モツテ イウテ ナゲマシ
 タ。アカンボウ ハ シジユウ キヤツキヤ ト イウテ ヨロコン デ キマシタ。ソレカラ
 デンシヤニ ノツテ カヘリマシタ。カヘツテカラ オネエサン ガ オスシヲ タベルト、
 アカンボウ ガ ホシイ ホシイ ト イウタ ノデ ノリマキヲ 一ツ ヤリマシタ。ソレ
 カラ ジョチュウ ニモ ヤリマシタ。

指導事項

一花よりだんごは蓋し此の學年あたりの生活程度として偽らざるところであらう。明治神宮へ参

シヨクブツエ
 ン
 キシモジン
 アサクサ
 ヒビヤコウエ
 ン
 川サキノタイ
 シサマ

參考文例

ヒカウキ

ボク ハ ヒカウキ ガ 大スキ デス。大キク ナツテ ヘイタイ ニ ナツタラ ヒカウ
 キノリ ニ ナルツモリ デス。モシ ヘイタイ ニ ナレナケレバ、ヒカウキヲ ツクル
 人 ニ ナル ツモリ デス。モシ ヘイタイ ニ ナツタラ、センサウ デ タンシヤウヲ
 モラツテ、エライ大シヤウ ニ ナル ツモリデス。キヨネン ノ ウンドウクワイノ トキ
 モ メタルヲ モラヒマシタ。
 ボク ハ ヒカウキ ト ヘイタイ ガ スキデス。

指導事項

一純主観から成立した文が此の頃からそろ／＼出て来る。それは文の量に於ては、客観的記述よ

ヘイタイサン
 コノイキヘイ
 イクサゴツコ
 ヒカウセン
 グンカン

拜したことを書かうとして、殆ど食物のことに終始してゐる。それが自然であり無理のない所である。併し、もつと、明治神宮のあたりの描寫なり感想なりがあるべき筈である。それらのことを指導するがよい。かゝる文材にはそれは共通の指導内容となるべきだ。
 二文の量が多くなるのは経験の量の多いのに原因する。同一の兒童でも経験の量の多い時、長い文を書く。但し、いかに経験を多くしても表現の練習が不足してゐては不可能である。吾人は、経験の量を多くせしめること、それに即した表現の練習をせしめることを以て綴り方の二大標言とする。

一りは少いのが普通である。しかし、自己の主観を表現することには深き内省が伴ふ、従つて自己生長を促す綴り方としては尊いものだ。即ち量は少くとも質に於てすぐれてゐるのだ。大いにその萌芽を捉えて指導して行くべきである。

二此の時代の児童は何といつてもヒロイズムである。否、小學校の児童は多くはヒロイズムだ。それは決して悪い現象ではない。却つて、それあるがために彼等はグン／＼生長して行くのだ。似而非思想家のやうに、「こんな時代から軍國主義を植付けては末恐ろしい。」などいふ考から、右の文の内容に批判を加へて行かうとするが如きは大なる誤謬であらねばならぬ。

参考文例

インコ

コノアヒダ、ヨコハマ ノ ヲバサン ガ イラツシテ、「インコ ヲ アゲル カラ トリ
ニ イラツシヤイ。」ト、イツタ ノ デ、オ母サマト 兄サン ガ ヨコハマ ヘ モラヒ ニ
イキマシタ。オカヘリ ガ アマリ オソカツタモノデ、私ハ ネットシマヒマシタ。ソシテ、
十二ジゴロ、私ガ 目 ヲ サマス ト、ネエサン ヤ オ母サマ ヤ 兄サンガ 大キナ コ
エヲ 出シテ オハナシヲ シテ イラツシヤルカラ スコシ オキアガツテ見ルト「マア
カハイコト、イロモ ミドリデ キレイナコト」ト 私ハ イツテ ネットシマヒマシタ。ソシ
テ、アサオキテ、ネエサン ガ エサヲ ヲ ヤル トコロヘ キテ、エサヲ タベル ノ ヲ見
テ ソレカラ アンビ ニ イツテ シマヒマシタ。

指導事項

ウチノカナリ
ヤ
山ガラガニゲ
タコト
ウチノウサギ
ナンキンネズ
ミ
ウチノボチ

一大體に於て流暢であり達筆であるから、かかる文を一般の鑑賞及び批評の材料として共同的に學習せしめることも、一つの方法である。

二一般的の鑑賞批評の學習に於て考ふべきことは、常に生活の指導とそれに即した表現の指導とである。これを内容の指導と形式の指導といつてもよい。

三先づ第一に文全體を見渡して、意味をとらせる。若し、文意が不明であれば、その文は全體的に於て欠陥のある文となる。右の文は、大體意味はとれる。併し、「スコシ オキアガツテ見ルト、マア カハイコト、イロモ ミドリデ キレイナコト ト私ハイツテ ネットシマヒマシタ。」の所で、一言も「インコ」の描寫がないので、題目を見なければそれが何であるか分らない。その邊を見出し得るだけでも文章眼が開けて来る。

四そこに「インコ」の描寫を作者をして經驗を想起せしめて補はせるがよい。而して補つた上で全般の児童を鑑賞せしめる。

参考文例

森ノムスメ

アル山 ノ フモト ノ 村ニ、花子 ト イフ 子 ガ アリマシタ。ソノ 子 ハ マイ
日 マイ日 山 ヘ イツテ、タキギ ヲ ヒロツテ クルノデシタ。アル日、タキギ ヲ シ
ヨツテ ダンダン イキマスト、オモシロイ ウタ ガ キコエテ キマシタ。ソノ ウタ ハ
森 ノ 中 カラ キコエル ノデ、ヘン ニ オモツテ、森 ノ ハウ ヘ 近ヅキマスト、
フシギデハアリマセンカ。森 ノ 中 ニ キレイ ナ オンガタドウ ガ タツテ キテ、ソ

森ノムスメ
森ノガクタイ
リストハリネ
ズミ

ノ 中 カラ シヤウカ ガ キコエル ノデシタ。花子 ハ ソノ ソバ ニ 近ヨツテ見マ
 スト、ソノ 中 カラ キレイ ナ 女ノ人ガ 出テ キテ、「アナタ モ 一シヨ ニ オウタ
 ヒナサイ」ト、イヒマスカラ、花子 ハ ソコ ヘ 入ツテ ウタヒマスト、花子 ノ コエ
 ハ キレイ ニ ナツテ、フシモ ヨク デキルヤウニ ナリマシタ。ソレカラ 花子 ハ 村
 中 デ 一トウ 上手ナ ウタウタヒ ニ ナリマシタ。
 ソレ ヲ キイタ トナリ村 ノ オジヤウサマ ガ ジブン ノ ヤウニ ウタ ノ 上手
 ナ モノ ハ ナイ ト オモツテ キタノニ、花子 ノ ハウ が 上手 ナ ノデ、フシギ
 ニ、オモツテ 花子 ノ トコロ ヘ キテ、オ金ヲ タクサン ヤルカラ フシヘテ クレ
 ト イヒマシタ。ケレドモ、モリノトコロ デ ダレ ニモ フシヘ テ ハ ナラヌ ト イ
 ハレテキタノデ、フシヘマセンデシタ。ケレドモ、花子 ハ オ金 ガ ホシク ナリマシタ
 ノデ、ツヒ「森デナラヒマシタ」ト イツテ シマヒマシタ。オジヤウサマ ハ ソノ 森 ヘ
 イツテミマス、ソコ ハ クモノス ダラケデ、大ソウ キタナカツタノデ、ビツクリ シマ
 シタ。ソレカラ、花子 ハ シヤウカ ガ ヘタ ニ ナリマシタ。

王子サマトボ

チ

サルトキツネ

指導事項

一こゝに本校の児童(女)によつて綴られた童話をかゝげたのは、一年生の綴り方をはじめから
 二童話がかなり澤山表はれてゐるので、その指導を示さんためである。右の文が必ずしも作者の
 創意のみでないことはいふまでもない。多かれ少なかれ、他の読み物から暗示を得てゐるに相
 違あるまい。けれども、それが自己の創作慾をそゝつて、こゝに右の如きまとまつた童話を生

み出したものである。

二指導の要諦はかゝつて彼等の創作慾の上に存する。凡てが模倣からはじまる。吾人日本人が日
 本語を使ふのも模倣からだ。日本人らしい思想を扼くのも大部分は模倣からだ。たゞ、模倣に
 止つて創意なき國民には發展はない。児童の創作の問題もさうである。はじめは模倣から出發
 する。併し既に童話を綴るといふところに、彼等のやみがたき創作慾が燃えてゐる。そこを指
 導して眞の創作に導くべきである。

三具體的にいへば、「このおはなしは何々の本を見て作つたんでせう。そんなことではいけません
 ん。自分で考へたのでなくては駄目です。」などいふのは誤つた指導である。「このおはなしは
 大そう面白く拜見しました。どこかの本にもこれに似たおはなしがありましたね。いろ／＼の
 本を読むと綴り方がこんなふうになります。澤山本を読んで、それから自分で考へて、本よ
 りももつとうまいお話しをつくるやうに勉強しなさい。」といふやうに指導すべきである。

参考文献

オクビヤウガヘル

ダンダン アタタカク ナツテ キタノデ カヘル ガ 池 ノ 中 カラ 出テ キマシタ。
 ボク ハ イデメナイ デ 見テ キマシタ。サウ スルト、ドコカラカ 小サナムシガ ト
 ンデ キマシタ。カヘル ハ オナカガ スイテ キマスノデ、ソノ ムシ ヲ タベヨウ ト
 シマシタ。スルト ソレ ハ ハチデシタノデ、カヘル ノ 口 ノ アタリヲ チクリ ト
 サシマシタ。カヘル ハ ビツクリ シテ トビマハリマシタ。

梅ノハナ

ウグヒス

サンボ

ヤナギノメ

ソレカラハ、ハイ ガ キテモ ニゲルヤウニ シテキルノデ、ボク ハ オクビヤウ ナ
 カヘルガ オカシクテ タマリマセン。
 ソノ トキ ボク ハ イモウト ト 一シヨ ニ ニハ ノ ササ デ フネ ヲ ツクツ
 テ 池ニ ウカベマシタ。ソノ パン ウタ ヲ ツクリマシタ。

シケンヤスミ

ささぶね

ささぶね こぶね

はつばの おふね

さらさら はしれ

うみまで はしれ

指導事項

一 一年生の指導はいよゝ終りをつける。かへり見て、彼等がどれ丈綴るといふ心が伸びたか、右の文の如きは、殆ど生活即綴り方といふ所へまで行つてゐる。ことに、すぐそれに聯關して童謡をつくつてゐる。綴り方に對する學習慾が豫期通りにつけられてゐることを思ふ時、吾人は其の指導の誤らざるを意識するものである。

二 學年末には、この一學年中の發達を概評して、來學年からはもつとどんどんいゝ綴り方を出して貰ふことを約束し、いゝ綴り方の出来るには、その生活がよくなるはならぬことを適當の語で話すがい。

尋常小學第一學年

指導要項

一 取材

- 1 經驗事項に對してなるべくこまかい所まで想起せしめる。
- 2 多方面に取材の暗示を與へて、自己の生活の凡てが綴り方の内容となることを意識せしめる。
- 3 自ら自由に題材を見出し得るやうに指導する。

二 腹案

- 1 本學年に於ても、特別の場合を除きては、嚴格な意味に於ける腹案の指導はしない。
- 2 思ふまゝに綴らせることによつて、想と筆を自由に伸展せしめる。
- 3 思ふまゝといつても勿論支離滅裂を意味するのではない。大體自ら思ふまゝに記述の順序を定めて、それを思ふまゝに進行して行かせるのである。

三 記述

- 1 本學年に於ては漸次漢字と平假名を以て記述させ、主として平假名の使用に慣れさせる。
- 2 記述の際には、假名づかひや不明の漢字等所謂純形式方面にはあまり拘泥せずに行進せしめる。しひて漢字を使用せしめず、なるべく平假名を使用せしめる。但し、文字・語句等について質問のある場合には教へる。
- 3 記述の際には、専心綴る仕事そのものに没頭せしめるやうに仕向ける。

四 推 敲

左の事項について正させる

誤字、脱字、句讀點の誤り(これは大體に止める)假名の混用、意味の不明、文章の悪いと思つた箇所等。

五 文 話

- 1 取材の指導を中心として綴らんとする心を養ふ。材料に於て、價值の高下につき初歩的指導をする。
- 2 参考文を與へて、材料に對する價值的判斷の萌芽を培ひ、文の鑑賞又は批判の眼を開いてやる。

教授細目

第一學期

指導豫定時數 凡二十四時間

參考文例及び指導事項

參考文題

月	四	參考文例	參考文題
	二年生 ニ ナツテ		
	ボク ハ オヤスマミ ガ スギテ ハジメ テ ガクカウ ヘ 來タトキ、一年生ノ ゲタバ		アキラシ
	コヘクツ ヲ 入レヨウ ト シタ。スルト、ボク ノ ゲタバコノ トコロ ガ ホ		イ讀本
	カノ 人 ノ 名マヘ ニ カハツテキル。ソノ トキ ヒヨツト キガ ツイタ ノ ハ		二年ノキヤウ
二年生	ニ ナツタ コトデ アツタ。ボク ハ カンガヘテ キタガ、オホイソギ デ 二年		シツ
			サクラノ花

(時 五 凡)

ノ ゲタバコ ノ トコロ ヘ イツテ ミタ。ケレドモ、ボク ノ トコロガ ワカラナカ
ツタ。

ソレデ マゴマゴ シテ キルトコロヘ 石川タン ガ キタ。ボク ハ 石川タン ニ
キイタラ、スグ ワカツタ。ボク ハ イソイデ 下グツ ヲ ヌイデ 二年 ノ キヤウシツ
ヘ 入ツタ。

指導事項

- 一 はじめての進級といふ兒童の生活にとつては可なり之感激と緊張とをもつ内容は、直ちに、しかも自然に綴り方の材となる。かゝる材は課題としても指導し得る。が、とかく「二年になつて」とか又「三年生になつて」とかいふ課題は、いふことが紋切形になり易い。「二年になつたからうんとペンきやうしようと思ひます。」といふやうな通り一ぺんの挨拶みたやうなものが綴り方であると思はせたくない。隨意に作らせると、經驗を綴るといふ一年以來の指導によつて、右の如き自然の文が生れる。
- 二 二年になつたからとて直ぐに平假名で綴らせようとすることは一般には無理である。たゞ、一年生中に平假名を全部收得せしめてゐる指導者ならよろしいが、普通はこゝ一二ヶ月位片假名でつゞらせてゐてよからう。
- 三 右の文は口語の常體であるが、とかく、この頃から男兒には自然にさうした形式がとられる。しかし、それは必ずしも全兒に強ひる必要はない。自然にまかせて置いてよい。女兒等には未だ本學年中位は敬體で行かせるがよからう。

花見ニイツタ
コト
タンボボノマ
マゴト

參考文例

ハクランクワイ

ニコノマヘノ、日エウビニ、オ父サマタチト、上ノノ、ハクランクワイヘ、イキマシタ。ドンドン、中ヘ、入ツテ、イキマスト、オドリ、ミタヤウ、ナトコロヘ、キマシタ。オ父サマ、ハ、コ、ヘ、チョウツト、入ツテ、ミヨウト、オウシヤツタノデ、入リマシタ。ニバン、ハジメ、ニハ、女ノ、セイヤウジン、ガ、一人、デ、オドツテキマシタ。ソノ、オドリ、ガ、スムト、モウヒトリ、セイヤウジン、ノ、女、ガ、出テ、二人、デ、オドリマシタ。

ソコヲ、出テカラ、ダイニクワイジヤウヘ、イツテ、タイワンクワン、ヤ、チャウセンクワンヘ、入ツテ、イロイロ、ナ、モノヲ、見テ、カヘリマシタ。

指導事項

一 殆ど経験の報告的記述に止るので、いゝ文とは稱しがたいが、四月の候には地方ならお祭りとか遠足又は花見摘草等などがあり、都會には展覽會だの博覽會だの又は同じく遠足花見等の催しがあるので共通的の材として右の文を掲げる。かゝる内容を綴る際、兒童の陥り易い弊は、徒らに枝葉に亘ることや道行きなどをくどくどと書き立てることである。

二 右の文の如きは、道行きなどを省き、直ちに最も面白かつた場合を中心に寫してゐるので、とにかく平凡ながらも要を得てゐる。唯もう一步進んで、その感想などを文の中に入れるやうになればよいのだ。

白木ヤノ
ヅグワテンラ
ンクワイ
ミツコシヘイ
ツタコト
オマツリ
ツミクサ
エンソク

參考文例

サンボ

私、ハ、キノフ、オ父サン、ヤ、オトウト、タチ、ト、サンボ、ニ、イキマシタ。ハジメ、ハ、クゼ山、ノ、ハラツパ、ニ、イキマシタラ、オトウト、ガ、キユウナ、サカ、カラ、オリルノヨト、イヒマシタカラ、オトウサン、ガ、トメマシタガ、チツトモ、キカナイノデ、シカタガナイカラ、ミンナデ、オリマシタ。申ホド、マデ、來ルト、オトウト、ガ、コハイ、カラ、チガフサカ、カラ、オリマセウ、ト、イフノデ、マタ、モト、ノ、トコロ、マデ、來テ、チガフ、サカ、カラ、オリマシタ。ソレカラ、カグラザカ、ノ、ハウヘ、イキマシタ。ダイブ、人、ガ、タタサ、ン、出テ、キマシタ。マタ、スコシ、イクト、人、ガ、タロ山、ノ、ヤウニ、イツタリ來タリシテキマシタ。女ノ人、モ、男ノ人、モ、子ドモ、モ、オヂイサン、モ、イロンナ、人、ガ、アルイテ、キマシタ。私、ハ、本、ヲ、カツテ、ホシウゴザイマシタ。ガ、サウイヒマセンデシタ。スコシタツト、私、ハ、ホシタテ、タマリマセンカラ、サウ、イヒマスト、オ父サマハ、カツテ、タダサイマシタ。

オトウト、ハ、モウ、ネムタイ、ト、イヒマシタカラ、牛込、ノ、ハウカラ、カヘリマシタ。デンシヤ、ノ、トコマデ、クルト、ヨソノ、人ガ「モウ、花デンシヤガ來マスヨ」トイフノデ、見テキマセウ、ト、イツテ、見テキマシタ。イクラ、マツテモ、コナイ、ノデ、カヘラウ、トシマスト、十ダイ、ソロツテキマシタ。ミンナ、キレイ、ニ、カザツテアリマシタ。ソレカラ、オ父サマ、ガ、カヘリマセウ、ト、イフノデ、アルキ出シマシタ。ウチ、ヘ、カヘツテ、ミマド

小金井ヘ
イツタコト
玉川ヘイツタ
コト
テニスヲ見タ
コト
ヤキユウヲ見
ニイツタコト
オ父サマトケ
イバヲ見ニイ
ツタコト

指導事項

ト モウ九ジハン デシタ。私ハ モウ ネムタイノデ、ネテシマヒマシタ。

二併し、追々材料の取捨についても眼をつけさせねばならぬ。吾人は、此の學年頃から次の様に話して材についての指導をする。「散歩のことを書くにしても、朝起きて顔を洗つてそれから着物を着替へてといふ具合にあまりつまらないことまでみんな書くことは感心しない。それは下手な寫眞屋さんだ。上手の寫眞屋さんは、あゝこれはいゝ景色だと思ふとそこを見計つて寫す。下手の寫眞屋さんはどんなところでもみんな寫してしまふ。」といった調子で指導する。動運會の記事にせよ、凡てさうである。

三右の文に於ては、さして冗漫な記述といふわけではないが、ぬきさしの出来ない文といふわけにもいかぬ。かゝる文は、時に全體に示して、其の量の多いことを知らせ、又は又キツシするなら如何なる點をするか等の共同研究をせしめて、文章眼を肥やしてやる。

參考文例

テフテフトリ

ボク ハ キノフ アサカラ オヒルマデ テフテフトリ ヲ シマシタ。一リ ハ 竹ヲ
モツテ、アト ハ ミンナ ボウ デ トリマシタ。
一トウ ハジメ ニハ 金ヲサン ト 正チヤン ガ 四ハ トリマシタ。アト デ ハ 八

ハ
カヘル
カナヘビ

ハ トリマシタ。ソレデ イクハ キルカト 思ツテ、ハコ ヲ アケルト、二ハニダテ イツ
テシマヒマシタノデ、十一ハシカ キマセンデシタ。ソノ ハコ ヲ 上ニ ホウツテ ヤリマ
シタ。オチルト ハコ ガヒライデ テフテフ ガ ニゲテシマヒマシタ。マダ ヨハツテ キ
ナイ ノ ハ ニゲマシタガ ヨハツテ キルノハ トバナイデ、オチテ シマヒマシタ。ソレ
カラ トンデ イクノヲ 又 ツカマヘテ、又 ニガシテヤリマシタ。

トンボツリ

指導事項

一綴り方が單に表現法又は手法の指導に終るものでなく、生活の指導にまで入らねばならぬといふ吾人の主張からすれば、右の文の如きについて如何なる態度で行くべきか。竹や棒をもつて蝶をたゝきおとす、それを箱に入れて上へほうり上げる、落ちて箱から逃げる、逃げるのを又つかまへて……といふなぶり方である。情操の陶冶に缺けた、そして無知な、極めて野生的である。かゝる内容に對しては指導者の人生觀から作者の生活を指導して行くことは教育の綴り方として必ず要求さるべきだ。

二傍線で示してある如く、この文は表現法の欠陥も少くない。文の書き出しからすれば、一人蝶々取りをしたやうになつてゐる。然るに實際は多くの友だちとしたことだ。それならそれと書かねばならぬ。又、「金ヲサント正チヤン」だけで四羽とり又二人だけで八羽とり、他の子供や作者は一羽もとらぬやうな記述ぶりである。これらは作者が生活を如實に表現する手法に欠陥があるからである。それは作者に生活を想起せしめて推敲せしめるやうにしなくてはならぬ。

すみれの はな

この間のことでした。佐々木さんと二人でかくかうのかへりに、せんしゆんえんであそんでみました。佐々木さんが、「すみれをとらない」といひますから、「どこにあつて」とききますと、「あの下の方にあります」といひますので、それではすこし取つて行きませうといつて佐々木さんと一しよに行つてみました。すこし行くとすみれの花がそこへら中にさいてゐました。私は、ちちゆうになつて、一しやうけんめいに取つてゐました。すこしたつと、川島さんたちが来て、「あたしもとるわ」といつて、一しよにとりました。それから、「もうかへりませうよ」といつてうら門から一しよにかへりました。うちへかへると、すぐ土をほつていれとききましたねえさんが、「そんなに取つてもしかれないの」とききますから、「佐々木さんだつて取つたのよ。」といひました。二三日たつと、うえといたすみれのつぼみが、だん／＼と大きくなりました。また二三日たつとききれいな花がさきました。ねえさんは、けふすみれをお茶の水のがくかうへもつて行くといつてゐましたが、雨がふるのでよしました。

指導事項

一もう四月の中頃からポツ／＼平假名の文が出て来る。五月に入つてからは殆ど全部の兒童が平假名で綴るやうになる。但しそれには自然にさうなるやうに仕向ける必要がある。本校に於ては綴り方は平假名を本體としてゐるのである。片假名は電報だとかお上の人の書くものには使ふが文章には使はぬ方がいゝのです。」と教へて行く。

おそさくら
つゝじの花
かめむどのふ
ち
たんぼぼのま
まごと
にはのきりし
ま

二右の文は生活としていかにも少女らしいやさしみがあふれてゐる。かゝる生活はますます助長してやるやうに指導する。

參考文例

金魚

ぼくは此の間のおまつりによみせに行きました。さうして金魚を三びき買つて来ました。その中のあかいのはぼくのおにいさんの金魚で、ちやいろのはぼくの金魚で、白いのはおとうとのです。それから、金魚ばちに日がてるので、すねれんを買つて来て、金魚ばちの中へ入れてやりました。そのあくる日、學校からかへつてみると、水がにごつてゐるので、ぼくとおにいさんと弟と水をとるかへてやりました。さうして中をのぞいてみると、金魚ばちがきれいになつて、すきとほつて、金魚がはつきり見えます。

それからぼくがささ舟をうかべますと、舟がひつくりかへつてしまへました。それから、ぼくがゆびを金魚ばちの中へ入れると、つつつきます。その中で一とう大きな金魚は弟のです。金魚のえさは、おさかなのいたのをちぎつてやるとよくたべます。

指導事項

一初夏のすが／＼しさが金魚の描寫から自然に讀者の心に迫るのも面白い。この文の如きは單なる記述に止らないで描寫の域に喰込んでゐる。指導者は、こゝを捉へて描寫の手法に入らしむべきである。

二此の頃から所謂材に對しての價值判斷らしいものを兒童に見出し得る。どんなことでも自己の

よみせ
ささ舟
池のひこひ
ふな

二 経験なら凡てが綴り方だと説いて来たのは一年生の想の發展と筆の伸展とを企圖した方便であつた。二年に入つてからは、「あまりつまらないことをごた／＼並べるのはよくないことだ。」と説出してゐる。兒童はかくて、材に對して取捨を行ふやうになる。

三 右の文は、まつりの夜、夜店に出かけた際の人出の多かつたことや、いろ／＼の見聞は凡て顧みず、直ちに中心材たる金魚に突入してゐる。そして、金魚に即したる諸々の傍材によつて金魚をはつきりと描き出してゐるのである。

參考文例

うんどろくわい

ようい どん と

びすとる が、

せいとは 一どに

かけ出した。

一とう 二とう は

だれだらう。

ようい どん で

つなひき が

おうえす おうえす

やり出した。

どつち が ほうびを

取るだらう。

こんどは りれいだ

おもしろい、

白かて 赤かて

おほえんだん

どつちが勝つても

けんくわ が ない。

今日は どつち が

ゆうしやうき

白か 赤か

わからない、

うんどろくわい は

おもしろい。

指導事項

一 内容は必ずしも強い詠歌に價するものとはいへないが、全然詠歌すべき感情の伴はないものではない。故に、児童がかゝる材をとつて韻文にしたことを批難する必要はない。よくまとめて詠歌してゐるところを見てやらなくてはならない。

二 但し、近頃のやうに、唯、天と地を多くあけて、文字をすこしづゝ横に長く並べれば凡てが童謡だといふやうな傾向には吾人は反對する。例へば

二に三を

たせば

五となる

といつたやうな、内容に何ら詠歌すべき感情の伴はないものを韻文のやうに書くことを拒否するのである。故にこの學年あたりからは、「非常に面白かつたこととか非常に悲しなかつたこととか又は非常にうれしかつたこと、非常にうつくしかつたことといつたやうなもので、それをうたにしようと思ふのはいゝが、なるべく、委しく綴り方にした方がよいのである」ことを説く。

參考文例

運動會

さあ、いよ／＼先生方のきやうそうだと言ふので、運動場はわきかへるやうなさわぎだ。先生方はにこ／＼なさつて、上衣をおぬぎになり、赤と白のぼうしをおかぶりになつて、左右にお並

デッドボール
せんしゆきや
うそ

びになつた。

かうして、赤や白のぼうしをおかぶりになつた所を見ると、どの先生もまるで子供の様で、おひげは生えてゐるけれども、小學生としか見えない。中でも後藤先生は全くさう見えた。黒沼先生も丸山先生も佐々木先生も赤である。體操の佐々木先生の號令でいよいよきやうぎが始まつた。

一番先きにお出でになつたのは赤の方では一部の先生、白の方では後藤先生である。後藤先生は元氣よくまきをおけりになつた。餘りいきほひがよすぎたので、まきは旗の先の見物人にあつて、ほんとはねかへつた。後藤先生はすかさず追ひかけていらつしやつて、そのまきを足であつかひながら白の旗をおまはりになつて出發點の方へまきをおけりになつた。すると、まきは出發點の方へ行かずに二部の二年生のゐる方へ入つて来て、僕のひざの所へほん／＼とあたつて大ぜいの人込みへ入つてしまつた。後藤先生はあはて、次の番の佐々木先生の所までしづかにけつていらつしやつた。

體操の佐々木先生はけり方が實にお上手だ。先づボールを旗をめがけておけりになつたかと思ふと、先生はボールより先に旗の所へ行つて、ころけて来たボールを足でとめておしまひになつた。歸りもさういふ様になつたので、白はすいぶん早くなつた。僕は白なので始めは白が勝てばよいと思つたが、阿部先生の時には阿部先生が、黒沼先生の時には黒沼先生が、丸山先生の時には丸山先生が、お勝ちになればよいと思つて應援した。

指導事項

中學の運動會
僕等のきやう
そ
三等になつて

一この文は表現といひ内容といひ二年生としての標準をぐつと抜いてゐる。これは本校の二年生中最優等の文である。一には素質もあるが、指導によつては二年生でもこれ文が書き得られるのであることを吾人は知つてゐなくてはならぬ。この作者の一年の時の文にくらべても非常の進歩である。

二かゝる文によつて、運動會といふやうな文を作るにも、着眼の仕方を指導し得る。この作者は職員との競争のみを捉へて綴つてゐる。「何時にはじまつて、第一番には何があつて、それから何のレースがあつて……」といったやうなのは單なる記録にしか過ぎない、綴り方とはいへないのである。

三綴り方の指導には生活の指導が其の基礎をなすものであることは常に主張してゐるが、この文章で、それがはつきりと分る。吾人は事物の觀察や、經驗に對する内省や、課外讀物の提供等を（單に綴り方教育としての立場のみではないが）怠らない。右の文を單に使用文字や語句の方法から眺めても、吾人の指導が決して誤つてゐないことを確信出来るのである。

參考文例

ぼくをほえる犬

ぼくが此のあひだ學校へくるとき、かきねの中から一びきの白い犬が出て來ました。そしてぼくがあるいてゐるあとから自てん車が來て、ぼくを追ひこして行きました。その自てん車がその白い犬をひきかかりました。さうしたら、犬はおこつて自てん車にのつてゐる人をほえました。

のら犬

どら猫

にはとりをねらふ猫

自てん車はどんどん向ふへ行きました。ぼくが犬のそばまであるいて行きますと、犬はぼくなんかほえなくつてもいゝのに、ほえておひかれました。その時には父兄會で父をりしました。二人ではしりますと、犬は出て來たかきねとはんたいがはの左のかきねへ入つて行きました。その犬はすて犬でせう。くびわがありませんでした。

指導事項

- 一可なりに複雑した場面であるが、それをはつきり描寫してゐる手法を見るべきである。
- 二傍線の部分を修正材料として作者に示し、何故修正を要するかを反省せしめるが如きも初歩的修正指導では適當なことである。右の文でいへば、はじめは作者一人で歩いてゐるやうに見えるが途中で「その時には父兄會で父をりしました。」と思ひ出したやうに附加してゐる。はじめから大人と二人であれば此の事件も餘程讀者をして安堵せしめつゝ讀ませて行ける。むしろ一人の方が面白いのだが、文は事實に即して綴るといふ低學年の指導では矢張り事實を綴らせる方がいいのだから、それならはじめから「父と二人で……」と書き出すのが自然だ。それを反省せしめるのであ。

參考文例

きつとあの人は

ある日、私がついて車ばへ妹をつれてあそびに行きますと、へんな男の人が來て、「あなたはどこの學校へいつていらつしやるの。」といつたので、私は

どろぼう猫

あばれ馬

いやな男の子

えん目で見やな人を見た

「かうとうしはん。」

「はいました。それからその人は、私の年や名前をきいたので、私はとうとういつてしまひました。」

その人は、私の姉さんのことも知つてゐました。そして姉さんのことを道子をばさんなどといつてしやうがありませんでした。

私は、きみがわるくなりましたから、妹と一しよに早くうちへかへりました。そして、そのことをお父さんに話すとおとうさんは、

「淳子、その人はもしかしたら不良少年かもしれないからなだけお話をしないやうにしなさい。」

といつたので、私はきをつけてゐましたが、それから何べんもあひました。あふとつひその人に何かきかれるので、はなしてしまひます。ですから、私は學校へ行くとき、ちがふ道から行くやうにしましたけれどもどうしてもあつてしまひます。

ほんたうに其の人は不良少年でなければよいと思つてゐます。

指導事項

一かゝる文こそ所謂生活指導といふことを大分考へさせられる内容を有つてゐる。都會地に住む女性は子供の頃から常にかうした恐怖に驅られなくてはならぬかと思ふと、つくづく社會が呪はしくなる。が、女性は常にかゝる警戒の眼ばかり光らせてゐることによつて益々女性の美をこはして行く。かゝる女性が相當の年頃になつて、一寸男の人から冗談らしいことでもいはれると、

「何です!! 女だと思つて馬鹿にして、もう一度いつてごらんさい!!」

といつたやうな態度で進むが最期、前早女らしさやゆかしさを失つて、殆ど男性化してしまふ。

「男を見たら敵と思へ」といふやうな心を少女の中から持たせたくないものだ。

二「あんまりしんばいしない方がいゝでせう。さうわるい人はつかりゐるわけでもないから、ですが、知らない人から話しかけられたら、あまり深く立ち入らないで、いゝかげんにあいさつしてゐるのがおりこうの人です。」位の程度で指導して行く。但し、かゝる傾向の文を書く個性を有してゐる女兒には絶えざる注意が必要である。かう考へて來ると、綴り方は大きな役目をも果たしてゐる教育作業であることが考へられる。

參考文例

とく本の中のおはなさん

おはなさんは、私と同じ年くらゐです。おはなさんは、ほんたうにりこうの子です。それはお母さんのお手つだひをしたり、あかちゃんのおもりをしたりするからです。私にはとてもおはなさんのやうに、あかちゃんのおもりがよく出来ません。私はお母さんのおしごとをなさるそばですこしはお手つだひをしますが、おはなさんのやうにはたくさんお手つだひが出来ません。おはなさんもきつと二年生だと思ひます。きつと、べんやきうもよくおできになることと思ひます。

指導事項

私をねらふ少年
ふしぎな女の人
きみのわるいちやうせん人

僕のつくつた
かんがへもの
よみかたのじ
かん
うちの竹の子
讀本の中のき
やうだい

一取材の方面が益々多くなつて来て、自然に讀本の中から材を取る児童さへあらはれて来るのも面白い。綴り方は讀み方と最も深い關係を有つてゐる丈に、指導者は讀み方と綴り方との交渉について考へて置かねばならぬ。併し、昔のやうに讀本の文章を以て綴り方のモデルの如く考へることは出来ない。従つて、讀本中の文章に範をとつて、それと内容を似せた文などを作らせる傾向は大禁物である。

二併しながら、右の文の如く讀本中の内容に對しての感想を綴るといふが如きはよい傾向である。これは讀本中に材を見出したのであつて、形式の模倣でなく、生活の表現であるからである。

參考文例

お父さんのおねぼう

内のお父さんはねぼうでこまります。いくらよんでもおきません。又、ごぜんの十じごろやつとおきます。内のお父さんに、ぼくが、「おやくしよがおくれませんか。」とききますと、「おやくしよはごぜんの十一じからはじまります。」とおつしやいました。ぼくはびつくりしましたから、「お父さん、そんなにおそくはじまるのですか。」とききますと、お母さんが「元哉は、はやくがくかうにおいでなさい。」とおつしやつたので、ぼくははいといつてがくかうへゆきました。がくかうのかねがなると、ぼくはちやうくわいにならびました。

指導事項

一 批正文の材料としてあげて置く。この文は一寸讀むと分つてゐるやうな文であるが、少し注意して讀むと分らない文である。それは、作者の頭がはつきりしてゐないためから來るのである

おもしろい五
一ぢいさん
おちいさまの
朝おき
お母さまの朝
おき
うちのあさこ
はん
兄さんのおね
ぼう
ぼくのねぼう

參考文例

かやの中のお家

が、経験の時間的關係をごちやにしてゐる。どこがいけないか作者に見出させるやうに指導するがよい。

二この文は、大體からいへば、ある朝、作者の登校前の會話が中心である。登校前といへば午前の六七時のことではなくてはならぬ。その時、この文の申程では父がもう起きて作者と會話してゐる。それなら文のはじめの「ごぜんの十じごろやつとおきます。」といふところと、申程の「おやくしよがおくれませんか」とが、事實から見ると矛盾して來る。父が寢床の中で眼は覺ましてゐるが、起きずに會話したものとすれば讀めないこともないが、さうでもなささうだ。そのへんを推察せしめなくてはならぬ。

いふべ 私はおとうとたちと かやをつつて ねました。かやが つれると、おとうとが こゝは ぼくの おうちだと いばつて ぬきました。私は「さわいぢやいけないわよ。」といひましたら、おとうとはわらつて、「さわいでもかまはないよ。」といつて、なほさわぎました。さうすると、兄さんがかやの上にまりをころがしました。すると、おとうとは、そのまゝを とらうと思つて、手でつかみます。けれどもまりはころころとがります。それに つれて、おとうとは、かけめぐります。私はそれを見てゐる中にかしくなつてふき出しさうになりました。

につくい蚊
あかんぼうを
たべる蚊
かやの中です
まふをとつた
かやの中のお
さらひ

そこへお父様がおかへりになりました。さうすると、きゆにおとうとは、ふとんの中へもぐりこみました。兄さんはびつくりしてにげて行きました。お父様が、ちよつとかやをのぞいて、「みんなよくねてゐるね。」とおつしやると、おとうとは、ふとんからかほを出して、「こゝはぼくのお家よ。」といひました。

指導事項

一描寫の初歩的指導はこの頃から手をつけることが出来る。右の文などでは、此の學年として描寫法をのみ送すための参考文となると思ふ。「どんなことでも讀んでみて目に見えるやうに書くのが上手なのです。」「この文のどこがさういふ風に出来てゐますか。」といふ様にして、それを見出させる。

二兒童が如何なる文を出さうが、指導者は常にその表現を通して作者の生活を指導して行くことを忘れてはならぬ。それが綴り方の重大なる任務である。それは特に右の参考文についていふのではない。凡ての場合をいふのである。が、右の文についていへば、茶目の弟に對するやさしい作者の心持を、十分のばしてやるやうに指導すべきである。

參考文例

海 水 ぎ

「ぼくが、水えうの日に學校からかへつてみると、お母さんが、みつこしへつれて行つて上げませうといつたので、ぼくは心の中の虫が、うれしくおどつてゐるやうに思ひました。それから、ぼくとお母さんといもうとと三人でみつこしへ行きました。」

あたらしいか
や
海水よく
うきぶくろ
ほうでうの海

みつこしの中へ、入つてみると、オンガクをやつておりました。だんだんおくの方へ行つてみると、母さんが、ぼくに「海水ぎを買つて上げませう。」といつたので、ぼくは「買つて下さい」といひました。それから海水ぎの小さいのを見て、うつてゐる人に「ちよつと、これを下さい。」とお母さんがいつたらば、うつてゐる人は、「はい」といつて紙につつんでくれました。ぼくはそれをつつんだ紙をもつてかへりました。もうすぐあれをきて小田原の海へはいるのかと思ふとうれしくてたまりません。

指導事項

夏季休業も間近くなつた。本校の兒童の大部分は海に山に暑を避け身體を鍛ふ。この頃になると、心は既に海に山にはせてゐる。従つて、その準備などもいそ／＼とやつてゐるわけだ。それが彼等の生活であるから綴り方に表はれて来るわけである。こゝで生活指導として注意すべきは、彼等の中には、さうしたブル式を發揮し得ない少數の兒童のゐることである。それらの兒童に虚榮心の芽を出させないことが大切である。「海に行くのもいい、山に行くのもいい、しかし、家にゐて、水を庭にまいたり、蟬とりをしたりすることも面白いことです。」「この學年としてはその位の程度で説いておいてよい。

お休中の日記 (綴り方作業を命ず)

一兒童の綴文力は、前に掲げて来た参考文例に於ても分明するやうに、二年になつてからは大いに伸びてゐる。最早彼等には簡単な日誌をつけて行くことは十分可能である。そこで、夏季休業中に日誌をつけることを命ずることは無理ではない。

づしの海
かまくらの海
なつ休

二綴り方は古來いはれてゐる通り、多作がたしかに有力な學習である。多くの經驗に對する内省は勿論綴り方の基礎であるが、それを唯内省するといふことは言葉の上文であつて出來るものではない。その内省を文に綴るといふことが、内省をして深からしめる唯一の方法である。そこで日誌をつけるといふことは、經驗の内省といふこと、それを表現するといふことと兼有してゐる。

三この學年として夏季日誌をつけるについての注意としては、

- (イ)一日の中で、これはと思ふところをつけなさい。朝起きてかほを洗つてごはんを食べた—などといふ毎日することを書くことはいらぬ。
 - (ロ)何にも書くことがなかつたら、その日は何にも書かないでおいてよい。
 - (ハ)短くてもいいから、其の日にあつた面白いことや、かしいことや、何か考へたことなどを記しておきなさい。そして、ところ／＼繪などを書いておくのも面白いことです。
- 位の程度でよい。日誌の形式、例へば天候とか温度とかいふやうなものは教へるに及ばない。要は、苦しまぎれに義務的に毎日日誌をつけねばならぬといふ感を排除しなくてはならぬ。喜んで勇んで綴り方遊戲のやうな氣持で日誌をつけさせねば効果はない。

第二學期

指導豫定時數 凡二十六時間

参考文例及び指導事項

参考文題

九

參考文例

夏休みの日記

七月二十一日 金 豪町小學校になんきんねすみをかひに行きました。私のかつたねすみは三びきで、みんな白い毛に黒いぶちがあります。チョコ／＼と小さなしつぽをふつてあるのは、ほんとははゆらしうございます。これから大じにしませう。

七月二十二日 土 お兄さんにねすみのはこをつくつていただきました。さつそくその中に入れてあわをやりましたらば、うれしさうにたべたりかけまはつたりしてゐました。

七月二十四日 月 はじめて、あさがほがさきました。水色のじよろのやうなうつくしい花でございました。うれしうございました。

八月五日 土 昇ちやんのうちの南京ねすみが子をうみましたので、見せていたどきにゆきましました。小ちやなく／＼まつかなものがウヂヤ／＼居ました。これが子で一生けんめいにお乳をのんでゐました。まだ毛が一つもないので私はきみがわるうございました。

八月七日 月 おとうさまがりよかうにいらつしやいましたので、さびしうございます。晩はみんなでお月さまを見てやすみました。

(時 七 凡) 月

八月九日 水 昇ちやんと昇ちやんのすきな「ブル」と一日中あそびました。すむぶんあつう
ございましたが、すむぶんおもしろうございました。かへつておふろにはいつたらいちばんこ
ろもちがようございました。

八月十六日 水 江戸川の方へあそびにいつてささぶねをつくつてながしました。ブカ／＼う
いてながれてゆくのがおもしろくてたまりません。いくつものながしました。それからうちへ
かへつてすいくわをたべました。つめたくて大そうおいしうございました。

八月二十七日 日 ご門のところにあるすべりのはなが一ぱいさいて居ます。赤いはなでその
したにゆくとかほも手もあかくなつてしまひさうなきがします。

八月二十八日 月 昇ちやんの三りんしやにのつてあそびました。おにはの中をころ／＼はし
らせるのはおもしろくて大すきでございます。三どおちて足をいたくしましたけれどもなかなか
で元きよくあそびました。昇ちやんはしんせつにうしろからおして下さいましたから大へんはや
くはしれてゆくわいでございました。

八月三十一日 木 あしたは學校へゆくのでうれしくてたまりません。おねえさんとおばあさ
んとおとうさまとはかひものにゆきました。

指導事項

一夏季休暇前に約束しておいた日誌を児童はめい／＼に指導者に提出する。右の日誌は一女兒の
綴つたものである。指導者はまづ各兒童の日誌をよく見てやらねばならぬ。

二兒童の提出した日誌には、よく見た上適當に批評・獎勵・稱揚等の言葉をつけて渡す。甲乙丙又

は美・良・可等の評點はつけない方がよい。

三各自に日誌を渡す時間を一時間乃至二時間教場に於て取るがよい。そして、優良のものを作者
に讀ませるなり指導者が讀んで聞かせるなりして全兒童に鑑賞せしめる。

四優良の日誌は、其の學校で兒童文集のやうなものを發行してゐるならそれに、若しそれがなけ
れば土地の新聞等に掲載することは、兒童をして綴り方や日誌に對する學習動機を盛んならし
める一つの方法である。右の参考文例は、大正十一年九月七日國民新聞に掲載されたものであ
る。今、参考のために右の前書を記しておく。

康子さんの日記

—可愛らしい南京風—

東京高等師範學校附屬小學校の尋常二年生森岡康子さんの暑中休暇中の日誌を紹介いたします。康子さんのお
父様は文部省にお勤めになつてゐる方で、お家は小石川の小日向臺町です。受持の丸山調導は「南京風を
買つて来て、それを可愛がつてゐる氣持が本當によく出てゐます。」と云つてこの日誌を書いてある帳面を
貸して下さいました。(原文のまま紹介します)

参考文例

海

大きななみが

どぶんとやつてきた

子どもが

「わつ……」とにげだした

舟は

大きななみをへいきでのつて

沖へすすむ

舟がすすむ

指導事項

休暇中の自由作を児童は指導者の前に提出して價值判断を乞はうとする。それには綴り方もあれば右の如き自由詩又は童話といったやうなものもある。それらは凡て前述の目録の指導に準據して指導して行く。

参考文例

おんせん行

ぼくは八月三日のばん、お父さまとお母さまと上野から汽車にのりました。よく日 富山のをちさまをばさまの家へつきました。五日の十一時三十分五人して又汽車にのり、かがの山中おんせんへむかひました。とちゆうであさ野用てつきやうが雨のためにおちたので汽車が不通となつてこまりました。が、自どう車と電車でやつと金澤驛について五時四十一分のれつ車にのりましたが大へんこんざついたしました。金澤から野々市、まつたふ、みかは、こまいこ寺井小松、あはづ、いぶり橋を通つて大しやうじにつき、それから電車にのり山中に八時二十分につきました。みんなでおゆにはいつてやすみました。

お家であそんだりおさらひをしたこと
おなかの川へ入つたこと
いかほ行
小田原

こゝは山の中ですからあまりあつことはありませんでした。毎日おゆにはいつたり山を上り下りしたり川へさかなをとりにいつたりしました。川にはあゆがたくさんゐたけれどもなか／＼とれませんでした。又こほろぎ橋や黒谷や東山公をん、やくしどうも見ました。

はこね山

指導事項

一夏休は全兒共通の経験であるから、その経験を課題で綴らせることは指導上の便宜である。課題の出し方は決して窮屈であつてはならぬ。右の文は、「夏休み中何一つとり出して書いてごらんさい。そして題は自分でつけなさい。」と命じた時の成績である。これらは課題といふよりも、むしろ取材の範囲を限定したといふに過ぎないが、「夏休み中に……：：：：かつたこと」といふ課題と全く同じものである。……の中には「おもしろ」「かなし」「くるし」をかかし」といふやうに當て嵌めることが出来る。右の文でも題を若しさうして出せば當然「夏休み中にたのしかつたこと」といふ具合になるであらう。かかる意味で課題といふに過ぎない。
二右の文で驚くことはその時の経験から大分時間が経過してゐるのに、よく汽車の時間や、驛の名などを記憶してゐることである。かうしてみると、彼等は感興の深い経験についてはいつまでもはつきりした印象を把持してゐることを知り得る。しかし、作者がぼんやりと其の経験を過ごしたならば決してかゝる文は生れない。其の邊に生活に眞剣であるべきことが暗示されてゐる。

参考文例

夏の一番好きな人

大すきなをば

僕はおばあ様が一番好きである。おばあ様は今年七十でいらつしやるが、至つてお達者で僕を大へんにかはいがつてくれる。僕がけがをしたり病氣にかゝつたりすると、大へんに心配していろ／＼と手當をしてくださる。又僕があやまちをすると、叱らずに僕に分る様に教へてくれる。學校がお休になつた時には三越や植物園へ連れて行つてくれた。おばあ様が僕を三越へ連れて行つて下さる時には必ず何か僕の好きな物を買つて下さる。それだから僕は**おばあ様が一番好きだ。**

その一番好きなおばあ様が此の間から安食へお泊りにいらつしやつたので、僕は**おばあ様は今頃は何をしていらつしやるだらう。おこしがいたみはしないかと雨の朝風の夕に思はない時はない。**

指導事項

一此の文の作者は國語の力に於ては二年生の一般よりぐつと上にある兒童である。右の文の語句や漢字の使用ぶりでも分る。又、想に於ても二年生としては優秀の部に屬しよう。課外讀物の獎勵が國語力の進歩に太なる効果あることは度々述べたところであるが、この文の作者の如きは讀物から受けた影響が可なり大である。

二但し、こゝで大いに注意すべきは、指導者の文章觀の如何である。比較的高級な課外讀物に接して、その中の語句を直ちにとつて自己の綴り方の中に入れようとするのは兒童の自然であるが、それをどの程度まで許すかどうかといふ問題である。右の文の例でいへば、「雨の朝、風の夕」といふ句の如きがそれである。かゝる句を全然排斥しようとする文章觀を有してある

さん
私の好きな
ちさん
ぼくの好きな
〇〇君
かあいみよ
子
かあいうち
のあかんぼう

人の前では、この兒童は枯死して了はざるを得まい。吾人は、それが餘りに妥當を缺いてゐない限りは許してやつていゝと思ふ。角をためて牛を殺したくないと思ふからである。

參考文例

おさる

今日は又さるまはしが原へ来たやうでしたから行つて見ると、こんどはちがふさるでした。はじめから来たさるは十八でしたが今日のさるは八つださうです。はじめに来たさるは、赤ん坊をおぶつたり、くわつどうのまねをやつたり、ひかうきのちゆうがへりをやつたり、つなわたりをやつたりするので、みんなからお金をたくさんもらひました。

けれども私は今日来たさるの方が好きです。なぜかといふと、今日来たさるまはしはさるをかはいがるからです。

指導事項

一そろ／＼手法についても指導して行く。右の文の如きはその書き出しが面白い「今日は又さるまはしが原へ来たやうでしたから……」といつてゐる。「今日は又……」でこの前からよく来たことが自然に分るやうな書振りである。文は一つは書出しである。書出しに成功すれば、次は自然と樂に出来るものであることも無理のない程度で話してやる。

二右の文の後段にある「なぜかといふと……かはいがるからです。」の呼應などもこの頃から使用し出す。たゞ、一應の理由はいつてゐるものの未だ何といつても幼稚な兒童であるので、右の

どうぶつえん
カンガル
やぎ
大きなかば
カナリヤ

文で見る如く、今日の猿の方が好きだといふ理由文のべて、前の猿廻しがどうであつたからき
らひだといふ様なことに言及しない。又、作者は本當は、猿のすききらひでなくて猿廻しのす
ききらひであるのだ。猿そのものについていへば前からの猿が好きであるらしい。それらは思
つてゐることがその通りに表現出來ない一つの缺陷に遭遇してゐるのだが、それを平氣であ
る。指導者はかゝる場合、本當に内容に即した形式指導といふところに努力しなくてはなら
ぬ。

参考文例

體操の時かん

きのふの體操はじやんけんいくさであつた。一ど目は赤が勝つた。ぼくは四人まかして二どま
けました。二ど目はぼくが大しやうで、一ど目はしほさは、さんにあたり、二ど目は八木さん
あたり、三ど目はあき田さんにあつて、これらの人とあつてみんなまけたので、はたをお
いてあづまやの方へと行きました。赤はどんどんとちんへ近よります。すると、白のうのさん
がはたをもつてあづまやの方へ來ます。ぼくは、このしようぶはあひこかしらと思つてゐると、
うのさんはすぐに赤の人にまけて、はたをとられてしまひました。それで、また赤の勝となりま
した。

ぼくは、「白はほんとによはい。」と思つた。「これからは白などのまけないやうになれ。」と心から
いのつてゐます。いつか白は勝つてせう。そしてつとせいを出して赤をうんとまかしてやら
う。そして、うんどう會の時まかして白のいふしやうきになつたいと思ひます。おととひの時か

じやんけん
いくさ
デッドボール
センターポ
ル
白と赤
たま入きやう
そう

んにも白がまけた。どうして白はよはいのだらう。

指導事項

一 單に事件の記述に止まらず、追々自己の主観とか感想とかが事件の中に織込まれるやうにな
る。かうなれば指導者はいよく生活の指導に向つて突進して行ける。體操の時間にやる競技
とか遊戯とかに對しては、兒童はその時間が終つても敵愾心を去らないやうなことがある。それ
は自然の現象ではあるが、競争の時は競争、終つてからはそれをケロリと忘れるといつた様な
大國民の態度に導く必要がある。それらは綴り方を通して指導出來る。(但し、この文にそれ
があるといふのではない)

二 手法のまづさから妙な言葉づかひをする。右の文例でいへば「これからは白などのまけないや
うになれ。」は、自分が白の大將として白の負けたことに氣をくさらしてゐるのであるが、「何と
訂正したらよいか。」と作者に推敲せしめるがよい。「これからは赤などに負けないやうになれ。」
とか直すべきである。

参考文例

植物園へ行つた事

昨日僕は祖母と兄とで植物園へ行つた。先づさるを見た。其の時だれかどさるの眞赤な尻へ石
をぶつけた。すると、さるはおこつて全あみに飛附いてくひつくかと思ふ程がちや／＼させた。
さるは實にこつけないで、おやが食物をもらふと子供がそれを取つて食べてしまふ。

次に傳書鳩を見た。鳩は、白、茶などあるが、どれも皆かはい。それから祖母に「温室を見

花月園へ行つ
た事
中野の傳書鳩
を見に行つた
事

「せう。」と言ふと、祖母は「やめると」おつしやつたので、温室は見なかつた。
 おなかですいたので、べんたうを食べた。それから祖母が「面白い木がある。」とおつしやつた
 ので見ると、なるほどかさぶたのやうな物が着いてゐた。池の所で兄が蓮の葉があると云ふので
 僕の棒でとつた。
 それから鳥に水草をやつてかへつた。

指導事項

一この頃は散歩によい季節であるので、右の如き内容を有する文が多く出て来る。散歩、遠足、
 旅行等の文の綴り方について指導して行くがよい。それはあまりこまかいつまらないことを書
 かずに、大體面白かつたことや、珍らしかつたこと、つらかつたこと、いつたやうな印象のあ
 さやかなところを中心にして書くやうに導くべきである。

二右の文は、文そのものよりも、形式的方面の参考としてあげたものである。まづ漢字の使ひこ
 なしの程度、句讀點、カギの使用法など、二年生としては程度が高い程である。併し、右の作
 者のやうに國語の力があると、文そのものよりも文字や語句をなるべく高尚なものを使はうと
 して、文の量が少くなる傾向がある。これは、かゝる作者について注意すべき點で、そんなむ
 づかしい字を使はなくてもよい、假名でいゝからもつと一時間の中に澤山書くやうにするがよ
 い——と説いて筆を伸ばさせなくてはならぬ。

參考文例

僕の齒

僕のあたま

何時であつたか、つと前の火曜日、學校から歸る時、舌が上の齒肉にさはると、ちよつと舌の先
 にふれる物がある。はて、不思議だと思つて、舌の先でよくよく見て見ると、齒が生えかけた
 のである。「あゝ、うれしい、齒が生えた。」と家まで走つて歸つて、「お母様、齒が生えました。見て
 下さい。」といつた。母は御覽になつて、およろこびになつた。僕の齒は、去年の夏までは小さな
 きれいなのが、ぞろりと揃つてゐた。下の前齒が二本ぬけて、後から前よりもきれいなのが二本
 生えた。すると、上の前齒がゆるぎ出した。僕はこれもぬけかはるのだと思つて喜んで齒醫者へ
 行つた。齒醫者は、「すぐに大きいのが出ます。」と言つて二本一度にぬいてしまつた。僕は明けて
 も暮れても其の齒の生える事ばかりかんがへてゐた。

二齒は明日になつても明後日になつても生えない。一月たつても二月たつても生えない。半年た
 つても出て来ない。僕は心配でくたまらないので、母にうかゞふと、「やがて出ます。」とおつし
 やるが、父にうかゞふと、「これはとても出ない。」などとおつしやつて「齒のかけく。」とお笑
 ひになるので、僕は中々悲しかつた。齒醫者に行つて頼むと、「子供の入齒は出来ません。」と意地
 悪くことはられてしまふ。僕は心配で毎日毎日齒肉ばかりいちぢつてゐた。
 其れが今度生え出して、一日々々と大きくなるので、僕はうれしくつて堪らない。僕は今度生
 えた齒を大切にしていくらゆるいでもぬかないでゐようと思ふ。

指導事項

一二年生としては形式・内容を通じて、これらの文を以て最優等の文としなくてはなるまい。兒童
 の發達程度に応じて綴り方の指導をして行くといふ我が校の方針は、單に學級といふ團體をの

僕の足
 私の目
 けが
 ゆびのとげが
 ぬけた

みさしていふのでなく、學級の中の個々の兒童についても同様である。かゝる文を書くやうになつた優良兒には相當の高い指導を要する。そは、この作者の如きは既に文の仕組まで考へてゐるからである。はじめに齒の生えたよろこびを述べ、次にその齒の抜けた時の悲しみを叙して結尾として生えた齒のことに及ぶ——所謂冒頭より中段に及び而して結尾を以て相呼應するといふ完全を期してゐるのである。それは恐らく作者が文のプランについて意識してなしたことではなからう。作者の力が自然にさうしたものであらうと思はれる。プランは必ずしもかうであらねばならぬと一定の型を授けることには賛し兼ねるが、かゝるプランもあること、及び文を書く時にはプランを考へるべきものであることをかゝる兒童には指導し得るのである。

二かゝる文の表はれた時には、全級の兒童に鑑賞せしめることも有効である。そは、單に鑑賞といふ丈ではなく、他の優越の力を感じて自らの奮起心をもそゝるからである。又、一面、取材の暗示も受ける。「僕の齒」といふやうなところに材を取ることが既に餘程進んでゐる。

參考文例

注射の話 (其の一)

この間から東京全市に亘つてコレラが流行してゐる。市民は皆おそれて飲食などに氣をつけてゐるが、コレラのいきほひは中々くぢけない。市役所から注意されて市民は皆注射を行つた。家でも此の間の晩、大學から鹽の谷先生をおよびして豫防注射をしていただいた。先生はさし

コレラのはやつたことは
やはりかぜ

きへお通りになつて、さぶとんの上におすはりになるとすぐ折かばんの中からワクチンのビンと注射かんをお出しになつて、別にボール紙の中からしんくうピンをお出しになつた。僕は珍らしいので、いろいろなことをおききすると先生は、「耳は二つありますが口は一つしかありませんから一度にさう何人にもおはなしすることは出来ません。」とおつしやつたので、一さの人はどつと笑つた。先生もしん空ビンの口をやすりでできりながらふき出しておしまひになつた。

其の時、父がワクチンを取り上げて珍らしさうにながめてゐたが、「ハハア、これがワクチンですか、な―るほど。一體、ワンチンはどうしてこしらへるのですか。」とお尋ねになると、先生は次の様にお答へになつた。(つゞく)

注射の話 (其の二)

「コレラきんを寒天の上に置いて三十七度のねつをくはへて置くとい晝夜で其のばいきんは寒天一ぱいにふえます。それを一ミリの百分の一に五萬だけにうすめて、今度は一日に二時間づゝ三日ねつをあたへてばいきんをころして、ばいきんが全部全く死んだのをたしかめて、更に石炭さんでうすめたものがワクチンです。」

父はこんなことをききはじめる、くはしくお尋ねになるのがくせだ。父の話のとぎれたのを見て、「死んだばいきんを注射するのですか。」と兄がきいた。

先生は又説明なさつた。「人間のからだにちがつた物があるとい白血球はこれを追ひ出さうとして攻げきする。それをとかす物を人の體は送るとかされたものには細胞を呼ぶ力があつて、細胞が出て來ると食つてしまふ。かうなると、この人の體の血はコレラきんをとかすことが出来るや

僕のびやうき
いもうとのか
せ
お母さまの
びやうき

うな血になります。」とおつしやつて、「さあ、用意が出来ました。どなたが先ですか。」とおつしやつて。「僕がまつ先にする事になった。人から注射はすぬぶんいたいと聞いてゐた僕は萬事休矣と観念の眼を閉じた。」

指導事項

一二年になつて來るとちよい／＼續き物が出る。この續き物の如きは文字や語句といひ仕組といひ立派なものである。普通の二年生には書くことはおろか、この文を讀むことすら中々困難である。かゝる優等兒の指導については前述してあるから省くことにするが、二年生としてこれ丈の文を書き得ることを指導者は承知してゐねばならぬ。

二右の文の如く、殆ど術學的にむづかしい語句や漢字を使はうとするところから、未だ精神的にさう發達してゐないため、往々、説明などに不明瞭な箇所を生じて來る。それは作者に十分反省せしめる。文は、よく人に分るやうにしないではいけない。自分丈わかたんで不可であることをよつて説いてやるべきである。又、最後の文「人から注射はすぬぶんいたいと聞いてゐた僕は萬事休矣と観念の眼を閉じた。」の文の如き、その高級の語句の内容を果してよく了解した上で使用してゐるのか否かを作者にたゞしてみる必要がある。しかし、それは決して抑制的態度に出てはいけない。

三續き物の取扱ひについては一年のところて述べたと同様の精神でよい。

參考文例

子供ゆうべん大會

がくげい會

十一月十二日の日えう日に、お茶の水女子高等師範の大かうどうで萬朝はうの子供ゆうべん大會がありました。ぼくはおひる前から父と妹と一しよにききに行きました。入口はもう一ばいで子供などはおしつぶされさうでした。妹はつぶされそこなつて泣出しました。さら／＼したんだんを上つてやうやくはいりました。

一番はじめ開會のことばがありました。そのうち、じゆんじゆんにお話がすすんで來て、青山のボーイスカウトのボーイのお話も、エーゴのお話も、ゆうぎも、しやうかもありました。一番年の小さいのがありま小學校二年生長島と言ふ人でロイドジョージの少年時代のお話をしました。みんなお話の上手なにかんしんしました。

家へかへつてから夕かんを見ますと、ちやんとゆうべん大會のしやしんが二まい出してありました。すぬぶん早く出來るものだとおどろきました。ぼくもあのやうにお話が上手になりたいと思ひました。

指導事項

一この學年としての標準的成績と見ることが出来る綴り方としてあげて置く。かゝる文は最優等兒にも可なりの劣等兒にも共通に味ふことが出来るものであるから、鑑賞文の材料ともなり、又所々批評すべき箇所もあるから批正文の材料ともなる。

二いくら文に型を排斥しても、文の性質が叙事的のものである以上、時、場所、事件等の重要な要素をのぞいて文が出来るものでない。右の文は、時と、場所と、事件とがちやんと備つてゐればこそ、明瞭に讀者に分るのである。「いつ、誰がどこで、どうした。」それを文のどこかで斷

つゞり方會
しやうか會
おとぎばなし
大會
子供會

らねば叙事文は成立しない。唯、一定の排列順序などを型として指導するのはいけないが、かゝる要素を落してはならぬことを説くことは必要である。それには右の文などを一般に示して具體的に話してやることも一つの方法である。

参考文例

なんきんねずみ

「うちのなんきんねずみが、このあひだ子をうみました。うまれたばかりは、まつかで毛が一本もありませんでした。たゞおやおやおちを一しやうけんめいのんでみました。おやおちをたべにいくときには、ごしや大じにおやおのおちにつかまつて、ひきづられながらおちをのんでゐます。このごろは、みんな毛がはえて、目もあきました。ところが、まだ目があかなかつたとき、このごろのさむさでこえしんでしまつたのが一びきありました。しんでしまふと、おやおはじやまものにして、すみのところへころがしときました。私は「なんきんねずみ」と木のはしに書いておはかをつくつて、まい朝、水をかけてやりました。このごろ私はけいとのきれつばしやなんかを、いれてやりました。

それから、きのふ學校からかへつてからお母様に十せんさつをいけて、さか下へえさをかひに行きました。ねずみの子は、しんだのを入れると八びきです。

なんきんねずみは、くさいければ、私は大すきです。

指導事項

一横に全級の児童の文の傾向や發達を見て行くと同時に、縦にある一人一人の児童の傾向や發達

ぼちのいたづら
うちの子ねこ
うちの白うさぎ
うちのインコ
山から

を絶えず注意して行くことが生活指導の上にも表現法指導の上にも大切なことである。右の文は、第二學期のはじめに掲げた夏休日記と同一児童の文である。南京鼠を飼つてゐたことは夏休日記に見えてゐる通りであるが、それから時々南京鼠のありさまを綴つてゐる。その愛に富んだ作者の生活を指導者は益々伸ばせてやるやうにすべきである。

二愛に富んだ作者の生活は、対象たる南京鼠の動作を微細に亘つて觀察してゐる。従つてその描寫は中々微を穿つたものである。表現はげに生活の反映に相違ない。「文は人なり」とはかゝる場合に最もあてはまる。全級の児童にもかゝる文によつてそれを會得せしめるやうにするがよい。

三鑑賞文の材料ともなるし、又一部分批評の材料ともなる。傍線の部分は、死んだ鼠に對してやつたことのやうに愛取られるが、作者の生活はさうでないのが、かゝる點を作者なり全級の児童なりに發見せしめて推蔽せしめるやうにする。

参考文例

自由詩 三題

あき
このはは
みんな

このは
のぎく
お月さま

ちつちやつた

こんどは

ふゆがもう

くるぞ

あきよ

あきよ

さやうなら

ほし

ひかれ

ひかれ

金のほし

ほくと七せい

びいか

あられ

ゆき

くるぞ

金のほし

ひかれ

ひかれ

びか

くりすますの

夜に

びかびかひかれ

くこたこ

「オ、二。」

「オ、二。」

へいたいさん

足なみ

そろひて

「オ、二。」

「オ一、二」

指導事項

一自由詩を児童が随意に試みることは、別に差支ないことである。唯、「今日はうたを作つて貰ひませう。」など、全級の児童に命ずるやうことはしない方がよい。又、児童が自分の天分を意識して常に綴り方の時間に自由詩のみを作つてゐるやうな場合はどうするかといふに、それは時々注意して「綴り方も時々書くがよい。さうしないと綴り方が下手になります。」位にいつて指導して行かぬと、綴り方がさつぱり書けなくなる場合がある。空想的の詩ばかり並べてゐると、小まかい経験事項の記述が全く出来なくなる場合を吾人は常に見てゐる。

二自由詩を作るなら、綴り方の時間のはじめから、それに打込ませるがよい。一つの綴り方を書き終つてまだ時間が餘つたからとて、「うたでも作つてごらん」などといふことは、詩に對する尊い努力といふことを感ぜしめず、餘興的の氣分にしてしまふおそれがある。

參考文例

なつとふゆ

私はこのあひだのなつ休みにどんなにふゆがいゝかとおもひました。
なぜかといふと、ふゆなら、たくさん着物をきれば、あつたかいけれども、なつは、はだかになつたつて、あつてくゝしかたがないからです。

お母さまのお
るす
もしお父さま
がなかつたら

月 二 十

(時 五 凡)

ですけれど、ふゆになつてみたら、朝おきるときだつてさむくてくゝ六時に目がさめたつて七時ごろまでおとこの中でむづ／＼してゐて、やつとおきるのです。

こんどは、なつがよくつてくゝしやうがたくなりました。
こんどのなつがくると、きつと又ふゆがよくなりませう。

指導事項

一全部感想だけで出来てゐる文である。所謂経験事項の記述(何々をした、どうであつた式の文)とは大いに趣きを異にしてゐる。この頃からかゝる傾向の文が現はれて来る。かゝる文の現はれた時、それを捉へて所謂生活に對する内省の指導をするがよい。

二夏には冬をあこがれ冬には夏をしたふ。現在の境遇に不満を招くは人情の常であるが、この作者の如きは、最早それを内省してゐる。「こんどのなつがくると、又ふゆがよくなるでせう。」とは千古の名言である。児童の哲學といつてもよい。こゝらあたりから、幼稚ながらも人生觀にいつて行くのである。尊い芽である。経験に對する内省——綴り方の指導はそこに重大な任務があるのである。

參考文例

僕が昨日の朝おきて見たら雨がふつて居た。そして、こんどかほをあらふころになつたら雪と雨がまじつてふつて来た。それから學校へ来た時にはまるで雪ばかりになつた。その前の日から雨がふつてゐたので、いくら雪がふつても水たまりがあつて、たくさんつもらなかつたのでつま

今朝の雪
今日の雪
あられ

せつやくしま
せう
かはいさうな
こじき
ちよきん

らなかつた。もし雨がふらなかつたら、雪がたくさんつもるにちがひないと思つた。それで水たまりの上へ雪がおちてはとけ、おちてはとけて居た。空を見たらはひをまいた様に白かつた。昨日學校に居た中はすねぶん大つぶがふつて居た。今朝はもうやんだかと思つたらまだふつて居たけれども、やつぱりすこししかつもつて居なかつた。今朝の雪は小さな雪だつた。それで僕が學校へ行く中はだいぶふつて居た。今もまだすこしふつて居る。今からふつてもたくさんつもらないと思つて居るが、どうだかわからない。なんだか今はさかんにふつて居る様だ。西の風がふいて來たので雪は東へとんで行く。

雪

きのふの朝から又雪がふり出しました。うちの者は雪などはふるとはゆめにもしらすにねました。朝おきて戸をあけると雨がふつたやうでゐて雪がどん／＼ふつて來ます。大方雪のふる前に雨がふつたのでせう。又この雪も夜が明けてからふり出したのでせう。

僕が學校へ來るとちゆうは人の通らない所はもうまつ白になつてゐますが、道はどぶどぶです。

雪のふつてくるのはまつたく空から櫻かうめの花がひらひらちつて來るやうです。うらの野原はくつのと、犬の足あとぐらゐで外はまるで銀せかいのやうでした。

指導事項

一この頃の季節に現はれる文として、同一の日に同一の雪を材にして、綴つた二つの文をあげて置く。雪の日なら、「今朝の雪」「今日の雪」「雪」といつたやうな課題で綴らせても指導上便宜な

さむい北風
雪がつせん
スキー
雪すべり
雪だるま

ことがある。蓋し凡ての兒童が共通の經驗を有つてゐるからである。隨意に綴らせても雪の日には「雪」の文が多いのである。

二文話の際に、右の如き相當の出來榮えの文を二つ又は三つ位全級の兒童に示して文の評価を試みさせるのも文章眼を開く一方法である。右の二文共、本校の兒童としては標準的の出來榮えであるが、前の文の方が量に於て質に於てやゝすぐれてゐる。兒童は、唯、「どの文の方がいい」位にいつてしまふ。何故よいか、どこがよいかと反問してそれを發見せしめ、足らざるを説明してやるがよい。前の方の文は觀察が緻密であり従つて描寫が細密であるに反し、後の方の文は、いゝところもあるが、やゝ觀察が大まかである。かくて綴り方は同じ雪を見ても甲はこんなに緻密に叙し乙はこれ位にしか出來ない、綴り方の上達はその生活態度にあることを指導して行くがよい。

參考文例

羽つき

もうじきお正月なので、學校でもだいぶはねつきがはやつてまゐりました。私も今日のはこいねが持つて來ました。そして一時間のおあそびの時間に、私のはねでついでましたら、私のはねがかかつてしまいましたので、小穴さんと中川さんのはねでついでました。さうすると野村さんが來たので、そのことをはなすと、野村さんは、どこからか長いさを持つて來て、私のはねをとつて來て下さいました。

もう一つ羽がかかつてゐたので、それを野村さんが、おとさうとしたが、おちないのであべさん

すぐお正月が
來る
お正月には
はこいたを買
つてもらつた
たことをつつ
たこと

が「ぼくがおとすからかしてごらん。」といつておとさうとしたがとう／＼おちませんでした。其の中に、あべさんはおもくなつたのでせう、其の長いさをバチヤンと右のところへおとしてしまひました。

又、野村さんがやつたらはねがやうやくおちました。それは竹村さんのはねでした。それから、又はねをついてみましたら、金子さんが「もうじきおかねだよ。」といつたので、あわててらうかへ来ました。それでもねえさんたちは、はねをついてゐたので見に行きました。私はけふの一時間のおあそび時間ほど、おもしろかつたことはありませんでした。

指導事項

- 一 女兒の優等兒の文である。量に於て質に於て蓋し二年生としては優良の文であらう。そのこまかい描寫振りは全級の兒童をして鑑賞せしむるに足る。鑑賞文の材料としてかかげて置く。
 - 二 玉にきずとも思はれる點は、「はねがかかつてしまひました。」といふ「かかつて」といふ言葉である。これは獨り合點の句で讀者にはその事柄がはつきりしない。最も大切な句がこれでは困る。羽根がたるきか軒のどこかに、ひつかかつたのであらう。そこを描寫しなくてはならぬ。
- 兒童の文で鑑賞文の材料となるやうなものでも、多少は批正すべき箇所があるのが當然である。かゝる場合には作者になり全級の兒童になり發見せしめるがよい。そしてよく發見し得ない場合、指導者の方で指示してやる。

お正月のおし
たく

第三學期

指導豫定時數 凡十八時間

參考文例及び指導事項

參考文題

參考文例

お正月

一月元旦の朝、父が大きなおさうに七つたべたので大笑ひ。
式をすまして、うちへかへつてくると、あんさいさんからねんがじやうが来てゐた。
ちつとも、はねつきの音がしないので、お正月のやうでなかつた。ゆふがたになつてから、前のれうりやの人と、たばこ屋のおかみさんがはねをわうらいでついで、私のうちの中へはいつたので、れうりやの女の子がうちの門をだまつてあけて取りに来たので、母が「だれか」といつたら、その女の子はだまつてはねをもつて出て行きました。私はそれを見てゐて「ばか」といつてやりたかつたくらゐでした。又、私の家へはねがはいつた時、外からはごいたで出してしまひました。

うちの母は、おとそをのむと、おさうにがたべられないといつてのまなかつたら、父が「おとそはまんびやうのくすりだから一ぱいのみなさい」といつたので母はやうやう一ぱいのんだ。いろいろの人がねんしに来た。

指導事項

一 お正月の休みが終つてから第一時間目の綴り方には隨意に綴らせても「お正月」のことを書く

- お年玉
- はねつき
- たこあげ
- おさうに
- おとそ
- かど松
- へんたまんざい
- すごろく
- よつばらひ

(時 六 凡) 月 一

子供が多い。かゝる場合には課題で指導するが便宜である。但し、一學年の時も課題で「お正月」としたのであるから、今度は「お正月のことを何でもいゝから書いて、題は自由に何とでもつけなさい。はねつき、お年玉、おねんし、おさうじ、おとそ、ねんがじやう等何でもいゝ。」といふ具合にして唯取材の範圍を示してやる。

二右の如き文が現はれたとして、如何に指導するかといふに、右の文は比較的優等の女兒の文であるので一寸見ると可なりの出来栄えのやうに見える。しかし、指導者はよく見てやらねばならぬ。右の文の推敲すべき箇所をあげると、(イ)文體の混合、(ロ)記述の順序が自然でないこと、の二點である。大體口語の常體で進んでゐながら所々敬體を使用してゐる。うっかりしてゐるのであるから自省せしめる。記述の順序は何といつても經驗の順序を追はせるのが自然である。此の文は、はじめに「さうじ」のこと、「式」のことを述べ、それより夕方までを自然の順序で述べてゐながら、最後に逆もどりして朝のおとそをいつてゐる。これはむしろ文の冒頭に來なければならぬ。後から思ひ出して附加したものであらう。

故に文は、書出す前に、どれとどれをどの順序に書かうかを考へてから筆を取るやうにいつてきかすべきである。

參考文例

よこはま

僕は一月三日に萩原君と父と妹と僕と四人でよこはまのみなとへ行きました。つくくと、ちやうど軍かんのやうな大きなきせんが二そうついでゐました。一そうはしづ岡丸、一そうは賀茂丸で

三越にいつたこと
あさくさへ行

した。しづ岡丸は中を見てもよいことになつてゐたので中を見物しました。

先づ一等しづからじゆんじゆんに見物しました。食堂やれうりしづも見ました。僕はすぐこの舟で外國へ行きたいと思ひました。中でもをかしかつたのは、れうりしづの前を僕らが通つた時、「あらこんなに西洋れうりくさいわ、くさいわ。」と妹が言ひました。なるほどぶんぶん西洋れうりのにほひがしてゐました。

一舟から出ようとした時に僕もこんなやうな大きなきせんにつて外國へ行きたいと思ひました。この汽船はシャトルを出てバイクトリアへ行くのだからです。

指導事項

一旅行・遠足・見物其他紀行的の文の指導の参考としてあげておく。とかく低學年の兒童は紀行的の文を書く時、それを自然に放任しておく、中心を失つて徒らにくだ／＼と長く書きたがるものである。朝起きて、顔をあらつて、朝飯をたべて、電車につて……。といふ具合にやり出す。中心點を見出して、それに心を集中せしめ、他を省くといふことはこの學年でも相當に理解せしめられる。

二右の文の如きは、汽船といふ中心點に向つて心を集中してゐて、他は一切省いてゐる。そして最も強い感想「こんな大きな汽船につて、外國へ行きたい。」を二度も繰り返してゐるが、それが又この作者としては少しも無理でない。

參考文例

ストロブの火

こたつはねむ

今朝學校へ来て見ると、ストーブの火がかんかんおこつてゐる。僕はすぐつつみをおろしてストーブにあつたが、あつくてあつくてたまらなかつたので外へ出た。

すると、又さむくなつたから、きやうしつへ入つてストーブの火を見ておどろいたのは、さつきまでかんかんおこつてゐたストーブの火がもう白くなつてはいになつてゐた。僕はさむかつたが、もし僕がへいたいになつたら、こんなさむさで「さむい」といふと、大將にしかれると心の中と思つたので、一しやうけんめいで手をこすつた。すると、かねがなつたのできやうしつにはいると、丸山先生がストーブの火をおこしてくださつたので、ぼくはあたたかにべんきやうした。

指導事項

一教室内にストーブがあれば直ぐ兒童の生活とストーブとは交渉がはじまる。そこには綴り方としての内容が存する。斯くの如く取材の範圍が擴大して行くことは指導者として愉快である。清少納言の枕草紙「冬はつとめて」の文と似通つたやうな匂ひのする文である。かゝる取材については大いに作者の眼のつけどころを稱してやるべきだ。

二文は常に表現と生活とに即して指導すべきであるが、この作者で例にとつていへば、さむさをこらへて、「兵隊さんになつたら」と思つて「一しやけんめいで手をこすつてゐた」ことなどを捉へてほめてやるがよい。他に適當の似通つた例などを話してその生活の眞剣さを稱揚することによつて作者の感激を増し、綴り方が單に文字をいぢくる仕事でないことを意識せしめるに足るのである。

参考文例

い
火ばち
あんか
電気ごたつ
ガスストーブ

今朝の雪

今朝僕がおきてみると、には一めん雪がふつてゐました。家のまへの森の雪はもうとけてしまつたのか見えません。もう雪がふりやんだので、弟がぐやしがつて

ゆきよ ふれふれ
もつと ふれ
ふらぬと 竹のぼうで
ぶんなぐる

といつて、さむいので又とこの中へはいつて、まださういつてうたつてゐました。僕も又とこの中へもぐりこみました。さうすると、母が戸をあけて、「忠夫おおき」といつたので、僕はげんきよくはねおきて着物を着かへました。ごはんをたべて學校へ行く時、仲町の坂で雪にすべつてころびました。

指導事項

一文の中に自然に童謡を入れたものである。かゝるかはつた趣向の文が現はれた時は、全級の兒童に参考のために示すがよい。そして、かゝる手法もあることをさとらせることによつて、文に清新味を加味せしめることが出来る。

二但し、注意すべきは、單に他の兒童の模倣にをはらせないことである。右の如き文を示すことによつて、直ちに童謡を中に挿んだ文などが現はれた時は、ことに注意して見なくてはならぬ。いろ／＼變つた手法のあることをさとらせればよいので、この文のまゝが最もよいのだと

大きな雪だる
ま
ぼん／＼あら
れ
梅の木の雪
森の上の雪
すべりつこ

いふ風に取らせないことが肝心である。

参考文例

弟

僕の弟はもう二つになりました。朝はだれよりも早く目をさまします。もうこのころは「おぎやあ」と泣かないで、「わあわあ」と泣きます。それでお母さんがおちちをやると、又すやすやとねむります。八時か九時になると又目をさまして泣くので、向ふのさしきへつれて行つてやると、こつちでは僕がごはんをたべてゐます。僕を見ると、「あああ」とよんでつれられて來ます。それでごはんをたべて居る方へ來て、いたづらをするのです。おはしをひつたり、おはを持つて口の中へ入れたり、ないたり、わらつたり大へんです。

僕は學校へ行く時でも、ちつとも弟のことはわすれませんが、今日思ひ出してつゞり方を作りました。

指導事項

一二月の参考文例には主に家庭に關する綴り方をあげて行くことにする。その表現を通して彼等の家庭生活を指導して行くことと、表現法の指導をして行くこととの参考にするためである。これは必ずしも二月のみに限つたことではないが、便宜上ここに集めてみる。

二兒童の生活は大部分家庭でなされる。そしてその生活の大部分は家族との交渉である。中には生れたばかりの弟や妹があれば、家族はそれを中心にしてわらひさゞめく。二學年生位の兄や

うちの妹

僕の兄さん

私のねえさん

ねえさんのお
こりんぼう

姉は、この珍らしい弟や妹を中心にして生活の大部分を取るであらう。従つてそこには多くの經驗事項と緻密な觀察とがあるわけだ。家庭生活、ことに小さな弟や妹に關する綴り方が二學年に大部多くの量を占め又表現も相當の出來榮えであるのは彼等の生活が豊かであるからである。こゝを捉へて生活の指導表現法の指導をするには最も適當した學年である。

参考文例

僕の弟

僕の弟は三つです。弟の名前はひさしといひます。いつでも僕が學校からかへると、「ちやあ」といひます。だから僕も「ちやあい」といふとよろこんで「うん」といひます。

何か持つてゐるものを「ちやうだい」といふと、「うふだ」とへんな口をします。又、ごはんがおいしくなると、來る人來る人を「ちやあい」といつてぶちます。だから、「いけませんよ」といふとおこりがほをしてにげていつてしまひます。

それから、「ねこが來たぞ」といふと、こはがつて、「えんえん」といひながら、人のそばへ來てつかまります。きちが鳴いてもさうです。

僕が本を出して、べんきやうをしようとすると、その本を取つて、うしろへかくして、「ないない」といつて自分でさがします。だから「そこにある」といふと、「こんどはうしろへほうつて「ないない」といひます。

僕は弟が大すきです。ほんたうにかはいゝんです。

参考文例

妹のびやうき

お母さまのお
るす

お父さまのお
かへり

一高の兄さま

僕の弟

僕の弟は今年四つです。僕と「だんご山」とよばれてゐます。僕の弟は、でぶ／＼とふとつてゐて、皆に「だんご山／＼」とよばれてゐます。僕の弟は皆にかはいがられてゐます。弟はほんたうは英三といふ名前ですけれども、僕の妹までも「だんご山、ちよつとおいで」などと申します。なぜ英三といふ名前かといふと、お父さまが外國の國のイギリスにいらつしやつた時に生れたからです。それで、上のは英國の英で、家の子供の男の中では、三番目に生れたので、三番の三といふ字が書いてあつて、あはせて英三といふ名前になつたのです。

僕の弟のあたまもすずぶん大きくて、姉に「あたまでつかち」などとよばれます。でも、僕の弟はかほがつる／＼でかはいゝです。僕は弟が大すきです。

参考文例

電氣のきえたこと

去年のことでありました。私がゆふごはんをたべてすこしたつと、電氣がすうつときえてしまいました。

私はすこしこはくなつたものですから、お母様のそでにかちりついてゐますと、だれかとだなのあけるやうな音がします。と、まもなく、ぼりぼりと何かをたべるやうな音がします。その時、又すうつと電氣がつかきました。それでよくとだなの方を見ますと、大きな兄さんが、

イギリスのお父様
みなかのをばさま
をちさんの見おくり
いもうとのはね子
兄さんのくひしんぼう
おちいさま
僕をかはいがるおばあさま

とだなをあけておくわしをたべていらつしやるので、私たちが、「黒いあたまのねすみ、黒いあたまのねすみ」といつてひやかしましたら、兄さんが、がちやうのやうなこゑを立てゝわらひましたので、皆が大わらひをしました。

(注意) 題は「電氣のきえたこと」であるが、それを中心に家庭生活の一場面を可なり的手法であらはしてゐるのを見るべきである。

参考文例

ひなまつり

もう二つねればおせつです。家ではもうおひな様をかざりました。このあひだから、今日か明日かとゆびをりかぞへてまつてゐたひなまつりも、もうすぐです。

おひなだんの上には、赤いけつとをひきわたし、かあいらしいひな人形が、すらりとならんでゐます。一番上には、だいらさま、つぎのだんには、わん女、その下には五人ばやしがならんでゐます。かあいらしい京人形が三人、長いふりそでを着てぎやうぎよくすわつてゐます。かあいらしい口もと、みじかくきられたかみの毛、どれを見てもだきたいほどかあいらしうございます。

おとうとたちは、ほかの人形の手をぬいたり、かみの毛をはさみでちよんぎつたり、それはそれはいたづらをします。私はあとで、兄さんと一しよになほしますけれども、また二人のおとうとたちがすぐあとからいたづらをします。おとうとが一人なら、まだましかれど二人でいたづらをされるのでとてもかなひません。

おせつく
ひな人形
三月三日
しろざけ
五人ばやし

指導事項

一この文は鑑賞文の材料となる、よくととのつた文で、個性もよく出てゐる。文の價值判斷をさせるために、讀本の「ヒナマツリ」の文と比較せしめる。ととのつたといふ點からいへば、大人の作つた讀本の文の方がととのつてゐよう。併し、いき／＼してゐて内容がどつてゐるのはどうしても兒童の實感を書いたものゝ方にある。二文をよく比較せしめて、兒童をして努力すれば讀本の文などよりぐつとよい文が出来るといふことを自覺せしめるがよい。

二特にこの文に限らず、兒童の綴り方がその内容に於て、讀本の文の内容に似通つた點を取つてゐる場合には、二者を比較せしめて、自己の力を意識せしめることは有効な方法である。

參考文例

本

僕は本を読むのが大好きです。學級文庫からかりる外には、お父様にためになるよい本をたくさん買つていただいて、それをふだん読んでゐます。

本にはよいことやめづらしいことがたくさん書いてあります。僕はわからないことばや字をみんなお父様やお母様にききます。けれどもたいていのは自分でよくかんがへてみてからききます。お父様やお母様にやさしいつまらない本をたくさん買つていただくよりも、ためになる本一さつ買つていただいた方がどんなによいかわかりません。本をたくさんよまなければえらい人になりません。僕はお父様に三年の一がくきのくわ外讀本と、りくわの本とを買つていただきました。

おとぎばなしの本
ぼくの文庫
一番面白い本
小學男生
少女の友

僕は本よりもためになる物はないと思ひます。

參考文例

學級文庫

僕は丸山先生が、親知らず子知らず、金澤、京都、奈良などを御りよ行中、學級文庫からいろいろの面白い本を澤山かりて讀んだ。

中でも一番面白く且身にしみて感服したのは、尋常三學年と言ふ本の新井白石の話であつた。白石が毎日三千字づゝ字を習つた事、眠くなれば水を浴びてど力した事、河村瑞軒が自分の娘のむこにして金をあたへようとした時、白石は支那の故事をあげてことばをつた。其の心が太へん奥ゆかしく感じた。實に學生のもはんと云ふべきである。

指導事項

「本」と「學級文庫」の二文は内容が類似してゐるので並び掲げた。「本」の方は二年生としての標準程度、「學級文庫」の方は最優等兒の文である。但し、學級文庫の作者は文を綴ることにすぐれてゐるといふよりも、國語の學力がまさつてゐるといふ方が適當であらう。而して、ここに右の二文をあげたわけは、綴り方の指導は單に表現法のみではいけない。いくら表現法を指導しても生活内容が貧弱であつては綴り方としてすぐれたものが出来ない、又人間としても貧弱な生活内容ではいけないことは分り切つてゐる。綴り方が自己生長を目的とする以上、生活内容を豊かにしてやることは當然の指導であらねばならぬ。吾人は其の一方法として盛んに課外讀物を獎勵してゐる。學級文庫の設けもその一つである。「無い袖は振られない」男馬は子

をうまぬ」表現法の指導だけではいけないのだ。内容を充實させてやらねば綴り方が伸びることはない。學級文庫、課外讀物の奨励、それは綴り方指導の一つの仕事でもあるのだ。児童は最早餘程讀書力も進んで來てゐる。二年の後半期あたりからは可なり程度の高い課外讀物をも讀みこなす。而して、讀書力の高い児童の綴り方がいかにすぐれてゐるかは、本細目にかゝげて來た參考文例についても一目瞭然である。

參考文例

子ねこ

せんの本えう日の夜のあけ方でありました。にはの方ではかにねこのなきごゑがしたので、私はねまきのまゝ、おにはに出て、そこいらを見まはすと、櫻の木のもとに小さなねこがさむさうにしないでゐました。

そのうちに、お父さんがおきて來て、そのねこにはんをたべさせました。ねこはまだ小さいので、あんまりごはんをたべませんでした。その中に、朝ごはんになつたので、私はねこのことを気にしながら、ごはんをたべて又來てみますと、もうねこはどこへいつたのか、かげもかたちも見えませんでした。

それでうちの者はどつかに行つたものとばかり思つてゐました。ゆふがたになつてから、私がおにはをはいてゐますと、えんの下からそのねこが出て來ました。

あまりないてうるさいので、ばんになつてから、お父さんがどこかへつれて行つておいて來ました。

指導事項

- 一 優等女兒の作である。蓋し二學年としての標準的成績であらう。かゝる文を以て鑑賞文の材料とする。そして、夜の明け方からの出づる事をよく描寫してゐる點を見出して鑑賞せしめるがよい。
- 二 右は標準的の成績には相違ないが、二年生としては、どの位の文まで作り得るかを示すために、左に右の文と内容の似通つた一文をあげておく。それは本校二部二年生宮内尙の文である。

參考文例

猫(その一)

「さつきから大へんに、どこかの猫が鳴いてゐるが、玄關へしめこめられたのではなからうか。」と言ふ祖母の聲が目がさめた。

「はい」と答へた母はえんがはから玄關の方へ行かれたらしい。

僕ははねおきて、玄關へ行くと、母はまだねまきのまゝであつた。見ると、玄關の庭へ向いた出格子のえんがはに、小さな猫が一匹ガラスごしに見えた。母がその半障子をあげると、猫はとび出しもせず「にやあ」と一こを鳴いて、うれしげに母の顔を見上げるのであつた。そして、「可愛い猫」と言ひながらだき上げる母のむねにすなほに首をすりよせた。「お母様僕に下さい。其の猫、僕にちやうだい。」と僕は母の後にすがりながら祖母の枕元へ來た。

そのさわざで、わきにねてゐた姉も目をさまして、猫を見に來た。母が「飼猫と見えて、ちつとも人におぢけない。」と、猫の頭をなでると、猫は母のひさの上に丸くなつてゐる。僕が、「僕にだかしてちやうだい。」と言ふそばから、姉が「あら可愛い猫、どこの猫だらう。」と今にもだき

さうにするので「僕のよ。」と猫の前ですわやきやうだいげんくわがはじまらうとした。母に、「二人とも風をひきますよ。早くお床の中へおはいりなさい。」と言はれて、床の中へもぐりこみながら「僕の猫ですね、お母様、僕の猫ですね。」を連發したのは、姉にとられない爲の防禦であつた。母は、「それでは坊ちゃんにだいてねておもらへ。」と言つて、僕の床の中へ入れて下さつた。猫はやられるまゝに、すなほに僕の床の中へはいつて、其のやはらかい毛を僕の體にすりよせてねた。僕は猫をおどろかさないうやうに、息を殺してだいてねた。

僕がそつと夜着のえりからのぞいて見ると、猫はもううと／＼とねむつて、あごをふとんにおしつけて、のどをごろ／＼鳴らしてゐる。僕がしづかなこゑで「にやあ」と言ふと、小さな耳をびくりとうごかしたが、目はやはりつぶつたまゝである。僕はそうつと床をぬけ出て、ねまきをぬいで、まつばだかになつて猫をだいてねた。猫はよろこんで、きぬの様な體をあたたかにさせながら、よくね入つてしまつた。(つづく)

猫(その二)

いつの間にか夜が明けたと見えて、母が顔を洗つて僕の枕元にいらつしやつて、僕がはだかであつたのを見て、「風をひきますよ。もうお起きなさい。」と言はれたので僕は猫をだいたまゝ起きた。僕は着物を着る時でも、顔をあらふ時でも、猫をそばからはなさなかつた。御飯を食べる時でもそばからはなさなかつたが、猫はじつとして待つてゐて、食べたがりもしない。

母が、「この猫は、よつほどよく行儀をしつけられた猫と見える。」とおほめになつた。僕は可愛くて可愛くて、食事もそこ／＼に猫をだいた。猫は僕のひさの上でも母のひさの上でもよろこん

で上る。そこへ兄達が二かいから下りて来て、「やあ猫だ、猫だ」と言ふので、僕は猫がいぢめられはしないかと心配でならなかつた。猫は本當にりかうで、今日はじめて來たのに、誰のひさの上にもものる。

その日は丁度日曜日なので、僕は猫と一所にあそんだが、猫はふとんと日なたが一番好きだ。猫の目は晝頃は針のやうに細くなる。それから猫をじやらかしてあそんだ。はじめはいやだと思つたと見えて、じやれなかつたが、だん／＼じやれ出して、しまにひは兩手を出して、後足で立上つておつかける。ことにピンポンのボールをねらつてゐる。そして落ちるとすぐにかけていつて、かぶりついてどうしてもはなさない。又、じやれてゐる時、不意にちよろ／＼と顔でうごくものがあると、すぐ又それにとびつく。又、どうしたことか、女中の針箱の中へはいつて針をくはいてこまる。兄が毛糸の玉をころがした時には、おつかけて、すゐぶんくたびれたやうであつた。又熱心になると、あふのけさまになつて、手足をうごかしてじやれる。毛糸の玉をつかまへた時には大敵をつかまへたとでも思ふのだらう、大えばりで大じにつかまへてゐる。本當に面白い可愛い猫である。

指項彙事

「右の文は教場に於て、二時間に亘つて綴り了へたものである。文字語句は勿論、句讀點に至るまで全く原文のまゝである。恐らく二年生としての標準からぐつと懸けはなれた綴り方であらう。が、かゝる文をも二年生として綴り得るものであることを指導者は心得てゐなくてはならぬ。そして、かゝる特別な兒童に對しては餘程注意して特別に指導してやらぬと惜しい天才を

殺して了ふことがある。

二第二學年の綴り方指導もこゝに終了を告げるわけである。今學年の發達程度に對して概評を試み、更に意氣を新たに於て第三學年の綴り方學習に對せしめるやうに仕向けるがよい。

（以下は非常に薄い文字で印刷された、ほとんど読めないような文章が複数行にわたって続いている。これはおそらく教科書の本文または補遺部分である。）

尋常小學校第三學年

指導要項

一 取二材

- 1 經驗事項には、出来るだけ反省を加へて取材する態度を養ふ。
- 2 物事にひそむ面白味、さういふものを見出すやうな指導をする。單なる實利的な態度で物象に對することなく、非實利的方面からも物を観る態度を養ふ。
- 3 題材が個人によりかたよらぬやう注意させる。
- 4 日記文を十一月に七日間ぶり、書簡文を各學期に一篇を配した。

二 腹 案

- 1 經驗の順序通り記述を豫想させる場合。
- 2 自然の順序によらない時は目次を立て、記述させる。
- 3 長い文をかくときは事件の要點々々を切りとつて記述を考へさせること。
- 4 文の起首と結びにつき、まとまりを考へさせること。
- 5 最も大事な中心が逸せられぬやうに。背景を詳述するため、中心を書く時には、疲れて其の力を失ふことなどがないやうに。
- 6 常體と敬體との異別を明瞭にさせる。

7 筋の混亂せぬやう、明瞭なるやう注意させること。

三 記述

1 自然にかかせる。思ふ通り自由につゞらせて、奔放な想の暢達をはばまないやうにする。

2 たゞ文字などについては、出来るだけいいねいにかく習慣を養ふ。

四 推敲

1 自己訂正の態度を養ふ。

A 一學期の最初は左の形式的事項に關することを主とした。

誤字脱字、句讀點。假名混用。發音表記の誤り。意味の不明。

B 二學期には一學期の項目に更に語の重複を加へた。

一學期の七月分、參考文例「電車に犬がひかれたこと」の指導事項中に、語の重複を新しく加へたけれども、之は參考文例から餘儀なくされたので、主として力をそゞぐのは、二學期からにしたい。

C 三學期には、二學期までの態度を深めて進む。

五 文話

1 參考文によつて鑑賞及批評をさせる。

2 批評の材料を與へて自己訂正の練習をさせる。

3 「どんな文がよいか」といふ文章觀の一内容を得させるにつとめる。

A 自分の生活をわかりよく書いたもの。

B 文に味のあるもの。

教授細目

第一學期

指導豫定時數 凡二十四時間

參考文例及び指導事項

參考文題

參考文例

僕のよろこび

僕のよろこびといふのは、僕のつくつた「僕のまり」といふつゞり方が、兒童の綴方といふほんにでたことです。僕はうれしくてうれしくてたまりません。おとうさまにいたり、おかあさまにいたり、僕はうち中かけまはつてよろこびました。今まで、こんなうれしいことはありませんでした。

指導事項

- 一 經驗 嬉しいとか悲しいとか、見たこと聞いたことなどを、そのまま記述する態度を、どんどん進めて行きたい。たゞその中でも、感覺的な經驗より、出来るだけ、内部的な經驗——喜怒哀樂——を多く題材にするやうしたい。
- 二 文話にて、外面的な經驗と内部的な經驗との別をさとらせ、兩種の文を読みきかせて、一層さうした判別の力を明かにしておきたい。

三自己訂正の態度を養ふため、左の各項を目あてに、記述後各自に十分の吟味を行はせる。
 一誤字脱字。句讀點。假名の混用。發音表記の誤り。意味の不明。
 之からは、記述後の大事な仕事として、毎回、自己訂正を行はせる。
 四作品は、必ず大事に保存しておくことをこゝから堅く約束しておきたい。

参考文例

はくらんくわいの行きかへり

朝おきて、それからごはんをたべました。たべるとすぐに、おかあさんが、かみゆひさんに、かみをゆつてもらつてから、おとうさんもおかあさんもいくしたくをしました。ぼくもしたくができました。

それからいつしよに、高田の馬ばのてい車ばまで行つて、おちやの水までのきつぶをかひました。きつぶを買つてゐるさい中に、でん車がきました。それには、のれませんでした。そのつぎのでん車がまゐりました。

そのでん車は、すいぶんこんでゐて、のれませんでした。それからすこしまつと、今度は汽車がきましたので、またまちますと、今度のはあまりこんでゐませんでした。それにのり新宿のてい車ばでありて、今度はこちらぶせんにのりました。

おちやのみづにつきました。それから少しあるいて、しやしんをとつて、はくらんくわいの方へ行きました。いよ／＼はくらんくわいの中にはいりました。はいるとそこには、水上ひかうきがはしつてゐました。ぼくはのりたくなりました。

てんらんくわい
 行
 ひかうき見物の往復
 お使ひのかへり
 町のおまつりへ

おとうさんたちは、「あんなものはだめだ水上ひかうきなんかだめだ。」といつて、のる方へ行きませんでした。いろんなところへはいつては、そとへ出てしまひました。おひるになりました。おひるにおやこどんぶりをたべました。それからまた見ました。ゆふがたまでかゝつて、もうみんなみてしまひました。
 その中にへいわばしといふ長いはしがありました。それからかへりました。
 三かへる時に、ていこくほてるがやけてゐました。

指導事項

- 一 はくらんくわいへ行かうとして家族が準備したことを行く途中のこと。はくらんくわいを見物したこと。その間に感じた重なること。かへりのこと。かういふやうに順序の立つてゐることがよい文としての一要件。
- 二 その順序が、意味を明瞭にし、筋を整然たらしめることをも知らせる。
- 三 これ程長い文をかい、しかも少しも混雑させないではつきりかいたのは、たしかな経験をもつたためと、この経験をよく整理（腹案といふこと）したためである。

参考文例

いちぢ

うちに木いちぢがあります。
 木いちぢは毎年／＼おほきくなります。今年もめが十本ほどになりました。
 花がもう十一ほど咲きました。つぼみを三十ほどもつてゐます。今年はまだみがりません。

びは
 たけのこ
 くさいぢご
 の手入

去年は十二ほどになりました。去年よりつぼみや咲いた花が多いから、たいがい今年はたくさんな
るかと思ひます。いちごのみはだい／＼色です。私は、毎年／＼みをとべます。
おとなりにもくさいちごがなります。くさいちごの方は、みがあかい色をしてゐます。くさい
ちごはやほやにうつてゐるけれども、木いちごの方はうつてゐません。
學校へ行く道にもあります。そのいちごはやはり木いちごです。そのいちごはほんとうの木
み
たいです。それでも葉をみるとすぐわかります。

指導事項

- 一 此の文にも前に示した「はくらんくわいの行きかへり」と同じやうに、よく順序がたつてゐることを知らしてほしい。
- 二 しかし此の文の順序は、前の文の時間的な順序ではない。従つてこゝに多分の説明的成分がはいつてゐることがわかる。とにかく、こゝでは、記述をするに當つて、思ひ起すことを、順序よく頭の中にまとめてかくものなことを指導する。
- 三文話は、左のことを中心にしたいものだ。
- 記述を順序立てて文をわかるやうにかくためには、
 - 1 時間の順序に従ふか。
 - 2 空間を秩序的にかくか。
 - 3 頭の中で抽象的に筋道を立てるか。
 - 4 感じの強弱によつてするか。

鉢の葉さくら
庭のぐみの木

参考文例

此の間のちしん

この月は、之等の中、特に(1)と(3)とに該當するものを、参考文例として示してあるから、経験を奔放に成長させるかたはら、記述に際して、きうした願慮を拂はせるやうな仕向けたい。

水曜の三時間目の遊び時間に、僕と松本君とではんけちに砂をいつぱい入れて、小川君のはんけちの中に入れてかへらうとすると、小川君が「ぢしんだ」といつたので、僕たちは「えつ」といふ間に、教室が「がた／＼」とうごいた。またそのうちに地がうごき出した。

僕はいよ／＼びつくりして教室の方へ行かうと思つて、一足行くと、ぢしんはやんでしまつた。家へかへつて、おとう様やおかあ様にはなしますと、おとう様が「こはかつたらう。」といひました。

まもなく僕がはばかりへ行きますと、かべのすなが、たくさんおちてゐました。僕はそれを知らずにふんだので「あゝきもちがわるい。」といつたら、おとうさんが来て「どうした。」といひました。僕は「なんだかしらずにふんだの。」といつたら、おとうさんは、「あゝそれはすながぢしんでおつこつたのだ。」とおつしやいました。僕は「そう」といつて、はばかりから出ました。おとうさんは、「ぢしんなどにおどろいてはいけませんよ。」とおつしやいましたから、「それはどうしてですか。」ときゝますと、「わづかのことびつくりするやうでは、えらい人になれない。」

五軒目の火事
去年の大水
かみなりの思ひ間
昨日の大風
ゆうべの大
雨
へウのふつた
日
大あらし

とのことでした。「そんならちしんるとき、あぶくないやうにするにはどうすればいいの。」とききますと、「うちの中ならまんなかにゐるのです。あはて、こそけがをします。」とき、してくれました。

指導事項

一 ちしんの経験から、ちしんのとときの心がけといふやうなものに發展した文であることに気づかせたい。こゝに、漸次経験を反省するといふ内面活動の萌芽があるから。

二 お互ひの會話を引用して、「……かう示したことも、記述の一約束として、今後守らして行きたい。」

三 はばかりへ行つて、かべがおつこつたのをふみつけて、びつくりしたことをかいてあるのは何のためか、はつきりしないが、記述を自然に自由にして、なるべく筆をのばすといふことを尊重する上から、余り詮索したくはない。

參考文例

僕の切手帳

僕の切手は五十二枚あります。その中で一番すきな切手を出してゐる國は日本です。日本の切手は九枚ある。

僕の兄さんは千五百五十枚もつて居ます。僕に、同じものは上げるといひました。ほんたうだと思つたらうそだつたので、僕はいつしようけんめいねだつたら、僕をぶつた。それで僕はえん／＼と泣いてやつた。

僕のはがき
アルバム

僕の雑誌
私のおもちや

そしたら兄さんは、「切手をやらう。」といつた。僕はうれしさのあまり泣きやんだ。兄さんは、またいやになつたので、「やれるものか。」といつたから、僕は又えん／＼と泣いた。

二 それで、兄さんは、「益男机の中から切手箱をもつてこい。」といつた。僕はかけていつてもつてきた。

切手箱のふたをあけると、もく／＼とけむりのでるやうに切手が出た。僕は、うれしいやら、どつさりあるやらできやつといつた。

兄さんは、その中からいろ／＼のをえらんで、いつばいくれたので、僕の切手は二百三十五枚たまりました。僕は色々じまんしたかつたけれども、じまんすると、とりかへされるとおもつてやめてゐた。

それから、だん／＼あつめて二百枚ふやしたから、今ではあはせて四百三十五枚です。僕はうれしくて／＼たまりません。そのうち、まだづん／＼たまるでせう。それから、兄さんもいつしようけんめいあつめてをります。

指導事項

一 此の文には、常體と敬體との混合がある。で、之をしほに、その混合をさけるやうに氣をつけさせたい。

二 同時に、文を記述するに先だつて、敬體にするか常體にするかを、決定してとりかゝる習慣を養ひたい。

三 此の文を材料に、敬體のところを常體に訂正させる練習をする。

私の人形さん
たち
僕の箱庭

參考文例

うちから學校まで

僕が學校まで行く道のじゆんじよを書きませう。家を出て三分ばかりで中野の停車場へつき電車にのります。時間が早ければそんなにこみません。

東中野、大久保、新宿、新宿、代々木、千駄ヶ谷、信濃町から長いトンネルを通り、四ツ谷、市ヶ谷、牛込でをります。

牛込のおほりには、大ぜいの人がポートにのつてゐます。雨の降らない時には、市内電車にのらないで歩いて行きます。いひだ町から江戸川のわきを通り、大曲へ出て行きます。大曲の角には大きな花屋があります。橋の所には交番があります。じゆんさが、よく犬をつれて居ます。さかを上つてでんづういんに出て、電車通りを歩いて、車庫前まで行きます。町には色々な店があります。右へはいるところとうしはんの門が見えます。門の中へはいり橋を渡ると學校です。うちから學校まで一時間と二十分かゝります。道のある時は、きをつけて左がはを歩いて行きます。

指導事項

一此の文は鑑賞材料としてあげた。

二鑑賞させる要點は、

1 順序がよく立つて、筋道が大まかはつきりしてゐること。

2 道順をかくのに、ところ／＼風景のいゝところを點じたり、目新しい店にきをつけたり、

うちから東京驛まで

うちから二重橋まで

學校から落合まで

學校から戸山が原まで

上野から品川まで

じゆんさが犬をつれてるところをとらへたりして單純な筋に味をつけた點。

3 作者の生活といふものに對する批判にまで導きたい。それは、家から學校までの通學時間をちゃんと測定してゐる心掛、左側通行を嚴守しようとする態度などを見ぬかせることである。そして、作者の生活が、ぞんざいに行はれてないことを稱しておきたい。

參考文例

今井さんに上げてがみ

このあいだは繪葉書をありがたうございました。だん／＼あつくなりましたが、おかはりありませんか。うちでは今いろ／＼のことがあつて、いそがしうございます。

僕は毎日學校へ来て、讀方やさんじゆつなどをならつてゐます。又、大ぜいのともだちとあそぶのはなによりもたのしみです。學校からかへると、自轉車をやつてあそびます。今度遊びにまゐりますから、しげ雄さんも遊びにいらつしやい。

自轉車もおめにかけますし、學校でやつて來た書方やつり方もお目にかけます。さようなら。

五月廿六日

廣井秀夫

今井しげ雄君へ

指導事項

一てがみは、はつきりした相手を考へてかくことが、他のつり方とちがふことを、先づ第一に注意させておく。

木村君へ

病氣をしてゐるお友だちへ

寫眞を送つていたゞいた御禮

轉校した友へ

本所の村田君へ

- 二従つて、用語が大事になつて來、相手と自分との關係から考へても、失禮なことなどのないやうに氣をくばる必要が起つて來る。
- 三此の頃の手紙としては、經驗した事項を材料とした通信でよからう。
- 四日づけ。宛名、自分の名などをかくについての形式をおぼえさせ、封書は封皮、葉書はその裏面についての書き方をあやまらぬやうみちびく。

參考文例

僕のおとうと

おとうとは、もう少しづゝ何かを話すやうになりました。話すことは、「うま〜」か「あんあん」です。おとうとはやせてゐて弱いです。

僕がそとへ行くと、おとうともいくんだつて、えんがはへきて腰をかけて、「げたをはかしてちやうだい」といつて、人さしゆびでさします。

だから、僕はげたをはかしてやると、よろこんでいつしよに行きます。もうかけたりします。

おくわしをもらふと、僕のいもうとといつしよにえんがはへ腰かけてたべます。僕のねえさんや、いつとう大きいねえさんが「にいちゃんは」といふと、僕をさがしてゆびでさします。

いもうとのことを「ねえちゃん」つていふとやつぱりさがしてゆびでさします。僕はおとうといもうとが一番すきです。

指導事項

六 月 凡 七 (時)

僕の家の人たち
 私の兄弟
 僕の親友
 僕のいとこ
 私のおねえ様
 中學の兄さん
 お父様のくせ

參考文例

すすめ

一人物を紹介したり、風手を描寫したりするには、理解といふことが一番大事である。

二此の文が、弟の一寸した點だけしかつたへてゐない割に、よく兄の抱いてる愛の光がみなぎつてゐるのは、畢竟弟に対する理解のしからしむるところだ。

三人物をつたへる手法としては、行動を叙述するか、容姿を描寫するか、大體二つの道がある。

此の文は前者から生れたものなことは勿論だが、それが如何にも自然にかけてるところがよい。

さきおとゝひ、うちの中にすゞめがまひ込んで來た。ちやうど、てふをとるあみがあつたので、これはいゝものだと思つて、いそいでふすまをしめて、あみをもつて來た。さうして、すずめにかぶせようとおもつたら、こんどはむかうの方にとんでいつてしまつた。

それから、すゐぶんおひまはしてゐたら、ちやうどおるがんとかべの間にはさまつてしまつた。それから、あみをすきまのところへ入れて、おひ出さうとしたら、じぶんでとび出してしまつた。

とび出した時に、僕はそのあみでとつてしまつた。それから、かごにいれたがすぐ死んでしまつた。手をやつてみたらつめたくなつてゐた。きつとつたときに、どつかきうしよにあつたのだらうと思ふ。そして、すこしたつてから、おはかをとてやつた。

指導事項

つばめ
 家にはとり
 猫
 となりの犬
 ねづみ

一 鑑賞文としたい。

二 經驗——行爲——にある深い意味を感知してるところがある。すゝめをとらうとして、さんくおひまくつてとつたが、不幸にも死んでしまった。そして、何となく自分のやつたことに、悔ひがあるやうな心が湧き出して來てゐる。——手をふれてすゝめがつめたくなつたことを知つたのや、おはかをたててやつたのがそれだ。——

三 常體で始終してゐる態度に氣をつけてほしい。

參考文例

だりや

私のうちの畠に、三尺ぐらゐのだりやの木があります。だりやは四つ位つぼみをもつてゐます。一つはもう花がさきました。葉は五寸ぐらゐでございませう。大きいものになると、六寸ぐらゐもあつた。この間畠の方にいつて見ますと、しぼりの花がさいてゐました。昨日の朝行つて見ましたら、おとゝひ見た時よりも、すつとひらいてゐました。

今日はもつと大きくひらいたであります。だりやはさきかけたところが一番きれいです。葉の青々してゐるところへ、しぼりの花がさくので、美しうございませう。

指導事項

一 批正材料としたい。

二 明晰でよくまとまつた文だが、味が足りない。作者の心が、だりやに對して特に觸起したところがない。さういふ點が、この文を平凡にし、淺いものにし、味のない完全なものとしてしまつて

朝がほ
庭のばら
私の花だん
學校えん
今咲く花
植物園

る。

三 それは、説明的態度が多すぎたためだらう。だりやと自分との交渉をかくことをしないで、だりやだけをかかうとしたからだ。

四 しかしそれなら説明としては、これでいゝ文かといふと、決してさうではない。説明文となれば、もつと緻密な詳しい觀察がほしい。

五 要は之によつて、何となく物足らぬ感ある文なことに感知させ、それは味のないためで、味のないといふことは、作者の心が、はり切つてないところから來るものなことに氣づかせればよい。

參考文例

進さん

今年一年にはいつた弟は、名を進といつてそれはそれはやさしい子です。兄弟中で一番やさしい弟です。

「お姉さんく」といつて、私とよくあそびます。三月のごせつくの時のことでもあります。進さんは「おひなさま」といつて、たくさんもないちよきんの中から、私におくわしを買つてくれました。

私は父や母から、度々お金をいたたいて、たくさんたまつてゐますが、人にやることは中々出來ません。それに進さんは、「おひな様に」といつて、お菓子を買つてくれたので、はづかしくなつてしまひました。

參考文例「私のおとうと」の當欄参照

その時、私は五月のごせつくの時には、おのほりをおもひました。いよ／＼五月になつた時、おのほりにしようかきばの武士にしようかと思つてゐる中に、背よりきれになりましたので、私は進さんにほんとうにすまないと思ひました。

それでも進さんは別に氣にもとめないで、「お姉さんお姉さん」と、くつついてきます。兄がすこし氣がむかないで、ごむりをおつしやることがあつても、けつしてさからうことはありません。ちゃんといふことをきいて「はい／＼」といつて居ます。

進さんの下の弟の尙さんは、進さんところをよくいぢめますが、進さんはいふ通りになつて、めんどろを見ます。それですから、お母様は、進さんのところをたいそうかはいがつて、進さんのいく所へはいつでも一所についていらつしやいます。父もかはいがります。

いつもかはいやさしいことを本をよむので、おとなりのをば様が、「小さいおちよう様がよくごべんきやうをなさいますね」とおつしやいました。

この間、上の前齒をぬいたので、はつかけになりました。で、皆におちいさんといつて、わらはれます。すると自分でもおかしくなつてわらひます。そして何かいひますが、こゑがもれてきこえません。私は、進さんを朝學校へつれて来て、それから荷物をしまはせて、一所にあそびます。それでおかねがなると、すぐれつにならばせま

す。兄がライオンならば、尙さんはとらです。進さんは、かはい／＼白うさぎです。

指導事項

- 一文の材料となつた事柄が、如何にも作者の心にとけ合つてゐる。
- 二進といふ弟をかはいがる事實の外に、この事實から興へられる自分の心といふものをよく語り得てゐる。
- 三所謂文の味を十分發揮したものといつてよい。

参考文例

うちの犬

うちの犬は此の間いただいたのです。まだおやからはなれたばかりですから、よるないてこま

ります。いまは、まいばん僕のまくらのそばにねかしておきますので、もうちつともなかつた。たゞ、時々おかあ様のかみの毛をひつばつてゐるので、おかあ様が「しつし」とおおひになりますと、こんどはわたくしのところへきて、ほつべたをちいさいはでかみますから、それがかあいくてたまりません。

きのふは、きもちの悪いやうなかつことをしてゐましたから、さぶとんにねかしました。きやうはもう元氣になつてゐます。ごはんをやる時、目がよく見えないので、ごぼしてしかたありませんから、手でおさへてたべさせます。

この間、をぢさまがいらつしやいまして、「じよんや」とおつしやいますと、わん／＼といひま

私のじよん
あひる
か／＼りや
今年生れた子
馬
子猫

したので、をちさまもびつくりなさいました。
 たび／＼おきやくさまがいらつしやいまして、じよんをおよびになりますと、すぐほえます。
 ぶつてやるとち／＼かんでそのかつこが、かはいいくてしかたがありません。
 今では、よるふとんの中に、私といつしよにねなくてもなきません。おとう様が、あさおおき
 になつて、とをおあけになりますと、「わん」といひますから、私もびつくりしておきます。

指導事項

一此の文で、目次を立て、文をかくことを指導しておきたい。

二此の文なら、

- 1 犬をもらつたこと。
- 2 僕といつしよにねること。
- 3 きのふのこと。
- 4 ごはんをたべるときのこと。
- 5 をちさんのおいでになつたときのこと。
- 6 おきやくさまのおいでになつたとき。
- 7 じよんの今のこと。

三此の目次には、なほ整理の餘地はあるが、それを厳密に強ひる必要はない。たゞ、重だつた事柄を中心として、材料を整理する仕方を導くまでのものであるから、餘り嚴格を強ひて筆の暢達をさまたげてはならぬ。

参考文例

電車に犬がひかれたこと

この間犬が電車にひかれた。みると、大ぶひどくひかれたのだとみえて、かほとどうとはなれてゐた。

よく見ると、ひかれたところに血がいつばいついてゐた。あまりきびが悪いので、しばらくは見ようとはしなかつた。すると、いもうとが、

「あすこのそばへ見に行かない。」

といつた。私はいくのはいやで／＼たまらなかつたが、しかたなしに、

「行きませう。」

といつて、そばへ行つて見た。

行つて見ると、向ふで見てゐたよりも、ひどくひかれて居るやうに見えたから、なほ／＼きびが悪く目に見えた。私はたまらなくなつて、もとのところへもどつた。

ていしやばの人は、土手の所に穴をほつて、犬をうづめた。うちへかへつて、このことをお母様に話しますと、

「それはかはいさうなものを見たね」

とおつしやつた。

「ばんのごはんをたべた時には、ちつともおいしくなかつた。」

指導事項

坂下町でたふれ・男
 足をけがした家のマリー
 汗だらけの牛
 いたちにさらはれたにはと
 狂犬病にかゝつた犬

- 一 文は必ず材料の發端から結末まで、一貫するものとは限らない。
- 二 事件の中途から筆をおこしてもよい。たゞ、さういふ場合は、事件の全部が文の材料でなくて作者の心で切り取つたために、途中で起筆することにならねばならぬ。
- 三 此の文などは、突如筆を起して、結末までかいたものである。そのために、犬の死が存外新鮮な感じをもつて讀む人にせまる。
- 四 自己訂正の項目を今一つ新しく加へたい。それは語の重複についてである。例へば、今の參考文例中「……ひどくひかれて居るやうに見えたから、なほ……きびが悪く目に見えた。」などについて、

參考文例

けんびきやう

此の間おとうさんのけんびきやうで、はいの羽とてふくの羽のほこりを見た。
 一番はじめは、はいをいたでたきおとして、羽をむしり取つてきて、がらすの間にはさんで見た。
 かたちはうすい紙を長まるに切つたやうだつた。そこにしかのつものやうなものは、ええてゐた。こんどはおとうさんが、きかいをまはすと、色が出た。その色は、すむぶんきれいであつた。
 僕は庭に行つて、てふくをとつて来て、羽を少しむしりとつた。
 羽のほこりは、まるでさくらの花びらみたいで、大きさも、やはりさくらの花びらぐらゐに

けんびきやう
 うえんきや
 きききき
 きききき
 寫しんとり
 水めがね
 くわく大きや
 う
 プリヂム

みえた。さきつぼが二つにわたるところも花びらのやうであつた。あまりめづらしいので、それをそつくりそのまゝにして、兄さんのかへつてくるのを待つてゐた。

兄さんがそれを見て、「さくらの花びらだらう」といつたので、大わらひをした。

指導事項

- 一 この文では、少し大げさなひ方だが、科學的興趣のある生活をしてる作者を考へさせてやるこゝとが大事だ。生活と文とは、かういふ交渉をもつて來ることを、具體的に示して、子供等の日常生活に何等かの暗示を興へてやることだ。
- 二 題材の範圍も、そろ／＼廣くなりかけてきたのであるから、かうした方面にも、取材黨を向けさしてほしい。

參考文例

おばあ様のうちへ手紙を出したこと

このあひだ、僕が學校からかへつて來ましたらおかあさんが、「大阪のおばあさんのところへはがきを出さない。」といひました。
 ぼくは、おかあさんにおかねをいたゞいて、いうぶんきよくにはがきをかひに行きました。行つて見るとこんでゐました。
 それで、僕はとほくのいうぶんきよくへ行きました。そこにはだれも居ませんでした。それでぼくは「はがきを一枚ください」と言ひましたら、へんな所から出して來ました。それからおか

おねえ様から
 のおたより
 まんしゆうの
 父上から來た
 お手紙
 北海道のお友
 達から
 旅行中の兄さ

ねをわたしてこちらへかへつて来ました。
はかきには、

「だん／＼あつくなりましたが、おばあさんはたつしやでいらつしやいますか、うちの人もみんなたつしやです。おとうさんは、二十四日に大阪へ行くさうです」と書きました。それからおあさんに見せましたら、おあさんは、「もつと書きなさい」とおつしやいました。ぼくは「もうかくことはありません。」といへました。おあさんは、ぼくのかいたところに、いろんなことをかいていらつしやいました。ぼくはそれをもつて、またいうびんきよくへ入れに行きました。

指導事項

- 一 此の文は外形の上からみても、内容の上からみても、中心點が稀薄である。何故かなら、「この「あひだ」の書き出しから、「おかねをわたしてうちへかへつて来ました」迄は、葉書を買つたことといふ題を興へることが至當な位、主題に遠ざかり、後半に於て、始めて所期の題意にそふ叙述がなされてる。
- 二 之は、主想從想の關係がほんのりとわからないためであるし、もつとつきつめていへば、腹案の準備が足らぬこととなる。
- 三 文中に引用された手紙は、簡單ながら、よく注意して、手紙といふ上から、かつて前に指導した事項を一層確かに吟味してみるがい。
- 四 文話として、一學期間の指導實施事項をまとめて收得させ、文の進歩について概評をしておく。

んから
をお様への手紙にかいたこと

僕のはじめにかいた手紙

五 今學期分の作品を整理しておいたものを、自分／＼に読み通させ、その進歩なり發達なりについての自評の材料を得させて、發表させてみる。

第一二學期

指導豫定時數 凡二十六時間

參考文例及び指導事項

參考文例

僕の三りん車

僕は三りん車を一だいてもつてゐる。それはどうしたのかといふと、お父さんが子供の時に買ったといふ三りん車である。

その三りん車は、かぢをとるところだけ木で、あとは皆てつである。車にはごむがはまつてゐるが、今はあとの車のごむは兩方ともきれてしまつてゐる。前の車はへつて半分ぐらゐしかない。うしろの車は、大きな人が乗つてがらすのところをふんだからきれたのであるし、前は、しぜんにへつたのである。

僕は三りん車はすきだが、外でやるとあぶないのにへいこうする。しかしかた足だけうしろへおせてはしるのは、たいへんおもしろい。しかし、あぶないことは外でやる以上だ。それで、今は、いつもうちの庭でだけのつて遊んでる。

指導事項

一 目的的に順序正しくかけてあるところに、注意して讀ませたい。

1 一段目は三輪車の由來。

2 二段目はその構造。

參考文題

僕の本

僕の竹箒

僕のもつてるもの

弟の玩具

家のよろひ

九 月 凡 七 時

3 三段目は遊び方。

如何にも整然たる順序である。

二つより方として、一學期に努力してきた要點をさらつておく。

參考文例

私の筆

一 重櫻のさき初める三月の末にめんじょうをいたゞいて三年になり、三年になると、學校のおけいこもむづかしくなつて、習字も筆習字になつた。學校のおけいこの初まる日も過ぎて二三日立つと先生は習字の時間に、皆に同じやうに、筆をわけて下さつた。

私はこの筆を三年中つかふやうにしようと思つた。それから後は、毎日習字のあるときには、筆まきにまいて持つて來た。習字の道具をそろへて、おけいこをはじめたのは、四月十三日だけであらう。

それからは、いつの御清書するときでも、良をとつたことはなかつた。一字にだつて丸のつかなかつたことはなかつた。いつも二つ以上丸がつく。

これもやはり筆のおかけだらう。いまこそ少し黒いが、これでも三學きまではまだくつかへる。近ごろ、又別の筆をいたゞいたが、せんのをつかへるまではつかふつもりだ。

指導事項

一 一學期に課した自己訂正の仕方を復習し、尋一二にてなしたところと合せ練習をさせる。

二 文の中心といふことから考へて、此の文の始め二三行は少しよそ行きのかきぶり、從而、そこ

二に技巧がほの見える。結果は中心を稀薄にしてしまつただけだ。
 三かり物、見たものなどにたよる軽率な態度もいましめる必要がある。それは、経験の豊かなす
 るどいものを先にかく文の行き方とは、ますく遠ざかるものだから。

参考文例

がちやく

大磯にゐる時。僕が千葉君の家に行つて。がちやくをもらつて来ました。さうして、きうりを
 やつて、だいにしてやりました。その中に晩になりましたので、もうなくかもうなくかと思
 びましたけれども、中々なかないで、せみのなきごゑばかりきこえてゐます。僕はつまらないの
 で、お母様とさんぼに行きました。かへつてみるとうるさいほどないてゐました。僕ががちやく
 がちやくのところへ行くとなかなくなつて、きうりのつゆをすつてゐます。
 その中に七時になつたので、ねどこへはいました。すこしたつと、なき出しました。すると
 お母様はうるさいので、水をかけると、だまつてしまひました。そのうちにお母様もねどこへは
 いました。

朝起きて見ると、五時なので、きうりをがちやくにやり、かごの中をさうちしました。さう
 して、くぎのところにかけてやると、二匹ともうれしさうにかごの中をかけづりまはつて、がち
 やくがちやくと一こゑなきました。

毎日さうしてかつてゐる中に、かへる日も来たので、がちやくのかごごとかみにつ
 み、僕と一しよにつれていくことにしました。さうして汽車に乗り大船のきんじよにくると、がち

鈴虫

松虫

ほたるがり

虫のてんらん

くわい

せみ

とんぼ

やくにきうりをやるのをわすれてしまつたので、東京へつくといそいで車にのつて、家へかへ
 つて、すぐきうりをいれてやりました。夜家の人ががちやくの鳴くのをきいて、朝僕が起きて
 見ると、「すぬぶん大きなこゑでいゝこゑでなきましたよ」といつて、がちやくをほめてくれま
 したので、僕もうれしうございました。
 三 お母様も、もうがちやくのこゑになれてしまつて、「ちつともうるさくない」とおつしやつて
 ります。今にもまたきうりをとりかへてやりませう。

指導事項

一 一学期の終からやつたことではあるが、語の重複といふことについては、出来るだけ自省さ
 せ、自分の手で批正が行はれるやうにさせたい。

二 此の文は、かなりよく中心を得てゐる。始から終り迄、題意に即した思想の叙述につきてる。
 この點をよくわからせたい。

三 がちやくに對する作者の心持と、お母様の心持とに觸れさせて見ることもよい。「……うるさ
 いので水をかけた……」といふお母様の態度は、大體子供にも推察のつく心持である。

参考文例

うちのうさぎがあくなつたこと

私のうちでは、この間ちよつとうらのところへひっこしました。こんどのところはうさぎをお
 くところがないので、しばらくもとのうちにあげておいてもらふことにしました。
 けれども、そのうちの方がいやがつて、とうとう私のうちへもつていらつしやいました。しか

にげたやまが
 ら、
 つるみえんを
 にげたへう

たがないので、しばらくゆどのにおいてありましたが、おふろへはいることも出来ないで、とうとううちにで入してゐるうき屋にやることになりました。私はいやで、たまりませんでした。が、しかたがないのでやることにしました。

それで、ふろしぎのわるいについでもって行きました。みち／＼かはいらしい目で、そこいらをきよと／＼みてゐるのを見ると、私はいさうでかはいさうでたまりませんでした。しかたがありませんので、うき屋さんのうちへ行つて、うさぎをわたしてうちへかへりました。時々見に行つてやりますが、べつにかはつたことはなく、ちゃんとしてをります。又、明日見に行つてやります。長い耳をたて、まるい目をむいたかはい、うさぎがまつてゐませう。何かおみやげをもつていつてやります。

指導事項

- 一 作者は、うさぎを植木屋にやつてから後の心持を、かなりよくはつきりとにぎつてゐる。淋しいとしい心といふやうなものをにぎりしめてゐる。こゝにこの文の非常にいとこがある。
- 二 うさぎをやつたといふことよりも、うさぎをとられた人の心持をよくかたつてゐる。
- 三 物事を味ふといふことはこゝだ。事實には即してゐるが、讀む人への感銘は、事實から來るのでなくて、事實によつてもかされた作者の心から來るのである。
- 四 以上のところを中心に鑑賞させたい。

参考文例

うさぎを植木屋にやつてから後の心持を、かなりよくはつきりとにぎつてゐる。淋しいとしい心といふやうなものをにぎりしめてゐる。こゝにこの文の非常にいとこがある。

くれてやつた
こねこ
ちんの生んだ
子と別れた時

秋の虫

夏の末から、秋のなかば頃まで、面白いやさしいこゑで、いろ／＼と鳴いてゐるのは何といふさやけさでせう。取りわけすゞ虫などは、口にもいへぬほどです。

ぎすはよいこゑで鳴きますが、かまれるとすゐ分いたいです。鳴くのはをすばかりで、めすはちつとも鳴きません。をすが鳴くとめすはそのこゑに聞きとれて、そばへよつて來るのなさうです。

虫は草のつゆなどをなめていきでゐます。このやうな虫の類はたくさんあつて、くつわむしもその一つです、ちかくで聞くと、うるさいほどですが、とほくからきくといふこゑです。

僕はまつ虫や馬追など、見たことはありますが、まだこゑは聞いたことがありません。かねたときやくさひばりは、形はすゐ分小さいですが、鳴くこゑはそれは／＼大きいさうです。

指導事項

- 一 説明文の初歩といつた程度で、此の文を吟味させてやりたい。勿論、ほんの初歩であるから、そこに叙事的分子のあることは否めないが、
- 1 事實を忠實に説き明すこと。
- 2 順序を立て、説明にかゝること。
- こんな程度で、文を記述する時の要領を示すがよからう。
- 二 さて態度から此の文をみると、
- 1 秋の虫のこゑのいとこ、すゞ虫や、ぎす――

秋の木のみ
山のえもの
鈴虫とり
とんぼつり
虫のがくたい

2をすのなくのをめすがしたふこと。虫のたべもの虫の種類。
 3虫のたべもの虫の種類。
 4まつ虫、馬追、かねたき、くさひばりなどにつき。
 5先づかういふ要點でかいたとすることが出来る。

が此の要點が此の文の記述の形式上には、混亂してゐる。例へば、一段目にぎすのことをか
 けよかつたのに、二段目にくつつけたり、虫の種類をかくかとおもふと、そこでは、くつわ
 一虫のなきごゑだけかいて、段を改めて、いろ／＼の虫をかいたりしてゐる。
 三かういふ點は、批評の材料として、よく指示し、説明的態度の秩序が、どこへいつてもくづれ
 ないやうに氣をつけさせる。

参考文例 運動會 運動會は、五月五日の朝、学校の運動場で行はれた。...

あまうれしい。今日は運動會だ。天氣はいつよりもよかつた。まへの日にてる／＼ぼうづをこ
 しらへて竹につけておいた。きつとそとのてる／＼ぼうづが、天氣にしてくれたのだらう。
 このごろは、コレラがあるから、おべんとうは僕のすきなのみきだけであつた。學校へ行く
 時、一部のみき本君にあつた。みき本君も「うれしいぜ、ね」といつてゐた。學校のはしからみ
 ると、それは青々としてゐて、運動場にかざつたはたは、「はやくおいでなさい」といふやうにひら
 ひらとしてゐた。
 僕がいそいでいつて見ると、もう富田君は來てゐた。まもなく體操がはじまつた。皆のこゑは

遠足
 父兄會
 學げい會
 級會
 まらそん
 前の時間のお
 にごつこ

せんしゆんゑんの方までひいた。
 せんせいのおうちになつたピストルの音は、運動場のはしからはしまでひいた。さあ僕たち
 のわぬけきやうそうだ。皆は「さあまぬけきやうそうだ」といつてゐた。さんねんなことには、
 僕等の白組は負になつた。赤の人はじまんさうに僕にメダルをみせびらかして、「おきのどくさ
 ま」なんていつた。三年までまじつたせん手きやうそうは、一人赤の人がころんだので、白が勝
 つた。

おひるになると、皆きやうしつにはいつて休んだ。僕はおなかすいたので、べんとうばこを
 あらつたやうにたべてしまつた。べんとうがすんで、だん／＼やつてゐる中に、僕たちのときや
 そうのばんになつた。せんせいが手をおうちになるまでは、むねがどき／＼して、しんばいであ
 つた。あいづをせんせいがなざると、僕は一しようけんめいになつて、目をつぶつたり口をあ
 たりして走り出した。僕はやうやく五等になつた。メダルをいたゞくときは、うれしくて／＼た
 まらなかつた。春の時とおなじやうに、又富田君が一等になつた。來年こそは僕も一等になるつ
 もりだ。

指導事項

- 一 中心を得た文である。
- 二 1 天氣に對する心づかひ。
- 二 2 わぬけ競争。
- 三 3 と競争。

この三つが此の分の中心といつてよからう。それがほどよく配られて、しかもほどよい味さへもつてゐる。

二筋が通つてゐる上にかうした味をもつたことは、文の内容として、すでにいふものをもつた證據であるが、同時に、作者の手法にも關係の深いことである。

三此の種の材料は、ともすると、書き出しを精叙して疲れるため、折角の中心がほつそりになり、所謂龍頭蛇尾になるのが常であるのに、此の作者は、それも十分に避け得てゐる。そこが手法の妙境といつてもよいところ。

四味はせべき文だ。

參考文例

私のおにんぎやう

このあひだ私が朝早くおきてみると、まくらもとにかはいらしいせいようになんぎやうが一つおいてありました。

それからおとう様のところへ行つて、「このおにんぎやうはどうしたの」ときいてみると、「きのふのばんにかつて來たのだよ」とおつしやいました。

私はすぐそのせいようになんぎやうをだいてねどこにはいりました。それからおきてみると、ちいさいもうとが、どつかにもつていつて、私のところにはありません。私はおきてそこいらを見ますと、小さいもうとがじぶんのところへもつて行つてねてゐました。私はちよつといもうとかとおもひましたが、よくみると、やはりおにんぎやうでした。

僕の五月人形

私のおひなさま

僕のコマ

私のキービー

私のおにんぎやうは、ほんとにいもうとによくにてゐるのです。

指導事項

一生活といふことを知らせるによい文。つまりじぶん／＼の経験が、如何なることでも、その見る立場により文になることを知らせる。

二しかし、作者の生活は、つまり経験は、やゝ浅いものゝやうにおもはれる。それは、單なるうれしさか喜ばしさに驅られて筆をとつたためではないかしら。

三もつと、作者はその人形について心をつかはねばならぬ。かはいゝといつても、どういふ表情がかはいゝか、いもうとに似てるといつても、容顔のどこが似てるかといふやうに、感覺や心が、新しくするどく働かねばならぬ。その點がない。

四此の頃から、自己訂正の仕事や、多方的にやらせる。尋一二でやつて來た形式上の仕事は無論、意味が通るやうに、語が重複しないやうにと注意をさせる。

參考文例

おいもほりに行かれなかつたこと

私はおとつのおいもほりに行かれませんでした。それは、私があさおきて、すぐおかあ様に、「お天気はようございますか」ときゝますと、お母様は、「曇つてゐますから、今日はしないでせう。だからいつもの通りに學校へ行つてごらんさい」とおつしやいましたから、私はすぐに、ふくととりかへて、ごはんをいたゞきました。

すると、時計がチン／＼／＼と七時をうちました。それからかみをゆつて學校へ行きます

遠足のけつせき

修學旅行にいけないかつたこと

さびしい日

と、小使さんが「みなさんは池ぶくろへいらつしやい」といつたので、すぐにかへつてお母様に申し上げると、「今日もしかすると、雨ですからおよしなさい、そのかはりに、おばさんの家へ行かせて上げますから」とおつしやるので、私は「いや」といひかけたが、よしてすぐをばさまの家にゆきました。何だかいつもほりばかりのことが氣になつて、お友達ともよく遊ばせません。私はわすれようわすれようと思つて、いろ／＼ほかの遊ばせました。それを忘れることは出来ませんでした。今でも、その時の心もちは、ちゃんとわかります。

指導事項

- 一 けば／＼しくはないが、おちついたのび／＼した文で、作者の心はしつとりと出てゐる。
- 二 いもほりを期待してゐたこと。お母様のはんたいから行きそこねたこと。お母様にをばさまへやるといはれてもす／＼まなかつたこと。をば様へ行つておもしろく遊ばなかつたこと。
- 三 之等の心が、少しのかさりもなくありしまゝに出てゐる。作者が、行きたい心をおさへてそこに生じるさまさまな心をとらへたところがよい。

参考文例

私のキュービイ

私のキュービイは、むねからスカートをしてゐます。さうしても色のようふくをきてゐます。私はそのお人形さんをどこへでも、もつて行きます。お月夜に、お父様とおさんぽにいく時にもだつこをしていきます。

十月分の参考文例「私のお人ぎやう」の項にかゝげしものによする

病氣

お姉さまのは、水色のおようふくをきてゐて、水色のおぼうしをかぶつてゐます。私のはもも色のおぼうしをかぶつてゐます。私は白い毛糸のオーバシーをつくつてやりました。名はメーリーといひます。

指導事項

- 一 短くとも、大そうとも、のつた生々した文である。キュービイの服装やそれをつれての散歩のところが殊によい。「白い毛糸の云々」といつて、かはいらしい親切をみせたところにも、作者の人柄がしのばれる。
- 二 しかも、かういふ美點は、作者の人柄から生れて來てることによつて、文に少しも不自然を感じさせない。
- 三 如何にもふつくらした、きれいなはれ／＼しい氣持の文である。

参考文例

私の日記

十一月二十四日 月曜 曇

朝目をさましておきようと思つてゐると、雨の音がきこえるので、又雨かとおもふといやになつた。おきてからいろ／＼のしたくをして學校へ行つた。と中で、かみをゆつてこなかつたのに氣がついた。かへりも道がわるくて、あるきにくかつた。家にかへつて、きのふ買ったたく上ピアノで、いろ／＼な唱歌をひいた。

題目をかへても日記は日記だが、強ひてあげると、生活の變化を語るやうな意味で、夏休みの日記

十一月二十五日 火曜 曇

朝おきてみると、風がふいてゐて寒かった。晩になつてべんきやうした。初はずん／＼やつてゐたが、だん／＼ねむくなつてきた。さつさとすましてねた。

十一月二十六日 水曜 晴

學校をかへつて見ると、だいくさんが来てゐたり、たゞみさんがたゞみをかへてゐたりして、家の中は大へんであつた。

着物を着かへて羽をついて遊んだ。

十一月二十七日 木曜 晴

三晩にお父様とふざけつこをして、面白かつた。しばらくの間してゐたが、よしてねた。

十一月二十八日 金曜 曇

十一月二十九日 土曜 晴

私が學校からかへつて、お母様に「たゞいま」といつてから、「お話の本を買つて」だの、「着物があはせて寒いからわたいれにとりかへて」だのと、ねだつたので、お母様にしかられてしまつた。

ごはんをいたゞいて、あとかたづけをしながら、おさらをこはしてしまつた。

それから、きんじよのお友達と、お家のおにはでおにごつこをしたり石けりをしたり、いろいろなことをして遊んだ。

十一月三十日 日曜 雨

お正月の日記
病氣の時の日記

朝ごはんの後、お母様が「きぶんがわるい」とおつしやつたので、私はおちやわんをあらつたり、おだいどころをかたづけたりした。
ごほうびに雑誌を買つていたゞいた。

指導事項

- 一 此の頃の學年では、こんな程度の形式でよからう。
- 二 日記はともすると、同じ型にはいつて、毎日記事が重なるやうではおもしろくない。
- 三 その日／＼の新鮮な心持を出してほしい。こゝに擧げた作例などは、さういふ意味からいつても申分がない。
- 四 一般のつゞり方と日記とは、大そう意味がちがふ。日記は、生活の要所々々をポツリ／＼書く。又さうでなければ、とてもやり切れぬ。
- 五 従而、日記をかくには、一日の生活を反省して、早く確かに、その要所をつかまへねばならぬ。
- 六 それとて、結局は過去をかくのだから、印象されてる心にとふのは勿論だ。心に生きてること
- 七 日記をかくことは、いゝ習慣だが、繼續させるにはかなり骨が折れよう。
- 八 で、最初はかき方の指導、その要領を得たのちは、繼續させる工夫をせねばならぬ。
- 九 で、此の月は、この作例を示したら、子供にも、實際日記をかゝせ、毎週一回は、もちよらして互ひに批評しあふがよからう。

十 二 月 凡 七 時

参考文例

僕のさいの時のこと

僕は、大正二年の五月二十七日に生れたさうです。生れたところは、東京の小石川にある中島病院です。

その時僕の目方は、九百七十六匁であつたさうです。僕がお母様のおなかからとび出して、「おぎやあ〜」とないた時の顔は、「まるで平家がにのやうでしたよ」とおかあ様がおつしやいました。僕はその時はすこししゃくにさはりました。僕が生れると、でんぼうをほう〜にうつたさうです。そのでんぼうがおちいさまの所につくと、おちい様は大そうおよろこびになつて、氣がぼけておしまひになつて、その日は一日中ほかの人が何をいつても、「はあ〜」とばかりいつていらしたさうです。

生れてから四十日位たつと、お母様につれられて、日立鑛山にかへつたさうです。僕は、大へんおぎやうぎがよくて、大そう皆にすかれて、あつちの人やこつちの人にだかれたさうです。又、あまり泣いたこともありませんでしたさうです。

赤んぼの時の僕

二つの時のこと

小さくて大病をした時のこと

三つの時温泉へ行つたこと

始めて船にのつた時のこと

二その頃、僕の家によねといふ女中が居たさうです。或時、その女中がかみをばら〜にして、僕がねだいの上で遊んでゐるところを、「おぼつちやま、ばあ」といつたので、僕はびつくりぎやうてんして、大きい聲で泣いたので、その時はお父様もお母様もびつくりなすつたさうです。僕はそとがすきで、いつもばあやがおんぶして、學校の運動場であそびしたさうです。そして、しやしんをたくさんとつてもらつたさうです。そのしやしんを今見ると、かみをわけてうつしたのがあつたので、僕はおかしくなりました。

指導事項

一いゝ思ひつきの材料であることを知らしたい。取材の方面を暗示するに、最も適當な材料であるから。

二文としても、よくねれてゐることを味はせたい。心持がはつきりと出てゐるばかりでなく、小さい時のことを面白くしのぶ態度にも氣をつけさせたい。

三鑑賞材料として取扱ふがよい。

参考文例

北海道

北海道はもう雪だらう。ぼくは、七つの時まで北海道の小たるにゐた。

一さむいこと

すぬぶんさむい。十二月になると、こほりがはる。さうなると、手ぬぐひまでも、びんとなる。でも家の中はこつちよりも、あつたかい。それは、家の中でストーブをたくからである。

僕の生れたところ

私の前にゐた町

海をとほるきせんには、氷をくだくものがついてゐる。

二こはいこと

冬になると、熊が町へ出て来る。そんなことがよく新聞へ出てゐる。かういふことをおぼえてゐる。「くまが町はづれの家へ行つて、まどのところへ立つたから、その家の人がまきをぶつけた。その時は、熊も山へかへつて行つた。あくる日又この家へきて人をみんなくつたといふことだ。」

三ふべんのこと

小たるにはでんしやがない。今ではもうでんしやがあるだらう。

二でも、さつぼろにはでんしやがある。そのでんしやへのつたが、すゐぶんけんのんだ。まつすぐのところをそくりよくを出してはしり、まがるところではきうにまがるから、すゐぶんけんだ。

きつと、今に行つて見ると、あんなでんしやが出てゐるだらう。

四きれいなこと

ゆきが山につもつた時、天氣がいとまぶしくてたまらない。そして、山は、きいやむらさきや白に光る。それは又、すゐぶんきれいです。

指導事項

- 一 氣の利いた文の仕組である。
- 二 廣い大きい北海道を、この四つに代表させたところは、申々いゝおもひつきである。

お父様の生れたお家

お母様の生れたお家

お先祖の田舎

三 非常に舞臺が大きくて、長い／＼文にならうといふのを、ごく濃厚な部分／＼を切つて、かういふ組立にするのは、まことにいゝことだ。

四 しかも、「寒いこと」、「恐しいこと」「不便なこと」「綺麗なこと」の四つで、北海道の印象は最も力強く語られてる。

五 文のところ／＼に、語の重複があつたのは、氣づかせて、考へさせたい。

參考文例

武田君にあげる手紙

こちらはまだ雪がふりませんが、ちかごろ大ぶ寒くなりました。それでも、お正月が近いので、僕は毎日よるこんで、學校へ行つてゐます。

町も、もう賣出しでにぎあつてます。がくたいをやつて人をあつめてる店もあるし、福引でおきやくさんをよんでる店もあります。僕も、この前の日曜にお父様と丸善へ行つて、クリスマスMASの買物をしました。その時けいひんに、一つのふくろをいたゞいたので、うちへ來るとすぐあけてみたら、サンタークロースのおぢいさんがもつてくるやうなくつしたがはいつてゐました。

僕の家では、この頃お母様がおかせひきで、一日おやすみになつたきり、みなじようぶです。君のお家でも、みんなこじやうぶですか。「おばあ様がおかせをひかぬやうに」とお母様がおつしやいました。お正月にはおはがきを送ります。

十二月二十日

武田 義一君

佐川 文夫

缺席してゐるお友達へ
別れた友だちへ
こちらの様子を友達へ知らせる手紙

指導事項

- 一 手紙の形式は一學期に示した程度でよい。従つて、此の手紙の通りでよい。
- 二 此の位の文としては、封皮を要するから、ついでにそのかき方もさらつてみたらいい。
- 三 何の目的でかいた手紙かを吟味したい。所謂時候見舞といふところのものだらうが、「筆者が親類のお友達をおもひ起してなつかしみながらかいたもの」位にしておいたらいい。
- 四 筆者は東京・宛名の友は京都。
- 五 手紙の文中、おしまひにお互ひの家の安否を云々するところがある。じぶんの方が先になつてゐて、對者があとになつてゐるが、一應注意したらよからう。しかし、それを餘り無禮よばはりの材料としない。
- 六 二學期の作品を見通した結果を各自に自評させる。一學期のと比較させることもよい。
- 七 二學期は、之ですむ。この學期中に計劃した事柄、及び子供の文の成長につき文話する。

参考文例

正文
 一 去年聞きそなたにくらしいじよやのかね、こんどこそ聞かなければならない。
 二 私に三十一日のばん、さう思ひながら、こたつにあつた。夜はだん／＼ふけて来る。十時十時
 一時となる。「あゝ早くなればいゝ。待ちどほしい／＼。」
 私とお姉様は、かねのなるのを待つた。おみかんやお菓子を食べ、一しよけんめいねむいのをがまんした。大きいお姉様やお母様は、
 「じよやのかねのなるまでおきてゐられるものですか、ちえちゃんや諒ちゃんが」などとおつしやる。私だちも早く鳴ればいゝに、じよやのかねが「かう思はないではゐられない。お母様はさあもうお休み」とおつしやる。私だちは、お母様のおつしやることをそむくわけにはいかない。お姉様と二人でとこをとつた。とこをとるながらも、私は、お姉様に「しかたがないから、ここにはいつてから聞きませう」といつて、とこの中へはいつた。その時、ちやうどとけいがちんちんと十二時をうつた。
 うちの時計は二十五分進んでゐる。だからもうあと二十五分で鳴るのである。私はお姉様に、「あ

第三學期

指導豫定時數 凡十八時間

参考文例及び指導事項

参考文題

参考文例

にくらしいじよやのかね

「去年聞きそなたにくらしいじよやのかね、こんどこそ聞かなければならない。」
 「私は三十一日のばん、さう思ひながら、こたつにあつた。夜はだん／＼ふけて来る。十時十時一時となる。「あゝ早くなればいゝ。待ちどほしい／＼。」
 私とお姉様は、かねのなるのを待つた。おみかんやお菓子を食べ、一しよけんめいねむいのをがまんした。大きいお姉様やお母様は、
 「じよやのかねのなるまでおきてゐられるものですか、ちえちゃんや諒ちゃんが」などとおつしやる。私だちも早く鳴ればいゝに、じよやのかねが「かう思はないではゐられない。お母様はさあもうお休み」とおつしやる。私だちは、お母様のおつしやることをそむくわけにはいかない。お姉様と二人でとこをとつた。とこをとるながらも、私は、お姉様に「しかたがないから、ここにはいつてから聞きませう」といつて、とこの中へはいつた。その時、ちやうどとけいがちんちんと十二時をうつた。
 うちの時計は二十五分進んでゐる。だからもうあと二十五分で鳴るのである。私はお姉様に、「あ

- じよやのかね
- 新年のかね
- はんしよ
- 年こしのばん
- 去年と今年のさかひ

(時 六 凡) 月

と二十五分で鳴るのよ。しつかり聞きませうね」といつた。しばらくの間二人でお話をしてゐた。そのうちにお姉様がふとんの中へもぐりこんでおしまひになつた。私は「もうお休みになつたのかしら。かねが鳴る時におこしてあげませう」と思ひながら、一しようけんめいにねむいのをがまんした。夜はなほもふけて来る。その中にどなたかでん氣をおけしになつた。
 なか／＼かねが鳴らない。いつもは二十五分すぐたつてしまふのに、この時にかぎつて、二十五分が一時間ぐらゐに思はれた。もう鳴りさうなものだと思つたが、まだ鳴らない。その中に私はぬむつてしまつた。
 ねて居る間に鳴つたのだらう。夜中に目がさめたがもうおそい。「ねてゐる間に鳴つてしまつたのよ。」私はお姉様にくやしさうにいつた。あと、二十五分だといふのに聞きそこなつたにくらしいじよやのかね。今年こそ聞かう。

指導事項

- 一 長い文だ。けれども少しもだれてゐない。ひきしまつてゐる。叙述が具體的で、且、はり合つてゐる心がうまくかけてゐるからだ。
- 二 叙述を具體的にした所以は、人物の言葉のそのまま引用したのが豊富なことによる。
- 三 はり合つてゐる心は、子供の好奇心の表れであらう。それを満足させたいために、がまんにく／＼を重ねたところから来る。
- 四 ことに文の起しと結びがいゝ。突如と出て来て、文全體を流れてゐる作者の心を、縮約して結んだところが何ともいへぬ。

四鑑賞的に取扱つて、作者の心持を十分味はしてほしい。

参考文例

お書初

お書初は二日にするのがあたりまへである。ところが、わすれんぼうの私は、二日も遊んでしまつて、お書初の事をすつかりわすれてゐた。夜になつて、氣がついたがもうおそい。
 しかたがないから。三日にすることにした。三日のおひる頃、お書初をした。はじめにしたがいことをした。私の書いたのは、字とゑで、字は忠孝と書いて、ゑは田家の早梅をかいだ。
 お母様をよんで来て、忠孝と書いていたゞいて、それをお手本にして書いた。大正十二年といふ新しい年をむかへたので、筆も新しい筆をおろした。初にかいたのはしつばいしてしまつたが、二度目にかいたのは、うまくかけた。

これでやつと字の方は書けたから、こんどはゑの方をかいだ。どんなのがよいかと色々考へてみたが、中々よいのがなかつた。すると、お姉様が、「良友にかいてあるのが、よいかも知れない」とおつしやつて良友をかして下さつた。私は、すぐそれを見てかいた。それは二けん家があらるので、かきにくいから、その一けんだけをかいた。それに私はいろ／＼なものをつけくはへた。後の方へ井戸のつるべをつけた。かきねをつけくはへた。そこはゐなだから、わらぶきの屋ねにした。かいてみると、わらぶきの屋ねが、中々六かしかつた。はじめにすみでかいたので、後でけすわけにもいかなかつたので、めちやくちやになつてしまつた。
 少しばかりかけたので、ゑのぐをといひて色をつけた。ところがわらぶきのやねの色が、中々六

初に
 買そめ
 初ゆめ
 弟のかきそめ
 ちよくだい

かしい。しかたがないので、思ひ切つて、茶色にぬつてしまつた。空のいろは土にいくにしたがつて、うすくぬつた。こんどは地の色をぬつたが、中々平にぬれない。どうしてもむらが出来てしまつた。梅の色をぬるの中々六つかしい。そこへお兄様がいらつしやつて、「こんなむらな空があるかな。このやねはいまにもおちさうだ」などとおつしやつたので、くやしうつてたまらなかつた。

指導事項

- 一 かういふ國民的な一つの習慣も、いゝ材料である。一般の年中行事、學校のそれ、之等に類するものを集めると澤山あらう。取材の指導上からも此の文を見のがせない。
- 二 だん／＼推敲の仕事にも、重きを加へて行きたい。此の文にも、語の重複はかなりあつたから、その點に自己訂正を加へさせ、部分／＼の文意にも、如何にもはつきりした意味をもたせるやうに注意させたい。文の形式的方面には、もう此の頃から、全然自分の手でのみ反省をさせたい。
- 三 常體がそろ／＼かきやすくなつて來る時期でもあるから、敬體との混合をいませしめる。

参考文例

初雪

朝めがさめて、ふと庭の方を見た。まあ、どうしたのであらう。雪が庭一面にふり積つてゐるのではないか。

いそいで床からおき出すなり、ねまきのまゝでえんがはへ出た。一番目だつたのは、八ツ手の

今朝の雪
家の近所の雪
景色
雪見

葉であつた。上をむいてゐた葉も、皆たれ下つて、手のひらにわたをのせたやうである。庭のすみにある植木ばかりをかくすの上には、雪が五分位平につもつてゐた。
れんげん寺の高い屋根の上にはわたをち切つてのせたやうに、あちらこちらにつもつてゐる。そのあたりの美しい景色を見て、急に學校のこと、思ひ出した。「今ごろは百尺山はどんなになつてゐるだらう。せんじゆんえんのお池はどうしたらう。中學校の人たちは、あのはしのわぎで、スキーをやつてゐるかしら。」と思ふと、急に學校に行きたくなつた。

指導事項

- 一 こゝにも常體の文例を出した。自然に進んでくる子供の用語も、此の頃は、常體が多くなつて來る。従而、敬體と混合しないやうに、數回繼續して、兩者の區別を明かにさせたい。
- 二 三學期は、此の學年に於ける指導事項の總演習を行ふ意味で、一二學期の計劃を出来るだけ事實化した力にまで、進めてやらねばならぬ。即ち

1 取材の方面では

經驗を反省した向のもの、對象と作者との初歩なる心的交渉等を主なる題材とするやう傾向づける。

2 脚案については

經驗を順序立てること。目次をきめること。文の起首を考へること。中心についての心得。常體敬體の異別、明かな筋等各方面にふれて總括的に練習させる。

3 記述は

大雪

雪だるま

スキー

どこ迄も自由にいいねいにかくことを主とする。
1 推敲は

誤脱字、句讀點、假名の混用。發音表記の誤り。意味の通ぜぬもの、語の重複などにつき、之等の全部を體して、文にのぞませる。

三 從而、此の學期は、文話の機會をも多くつくらねばならない。しかし、それを記述の時間から割いては、實地に子供の練習機會を少くするから、結局は、小さい時間を見つけては、そこを文話にあて、少い分量でも、生きた事柄を用ひて、効果を大ならしめるやうにせねばならぬ。

二 參考文例

鳴きつら

僕のおとくいは、鳴いておどす鳴きつらである。お父様やお母様に少しでもしかられると、すぐ目になみだが出て来る。

今年のお正月も元日にはなみだが出ないでよかつたが、二日の朝とこの中で本を見ながら、あつちを向いたりこつちを向いたりして、父の寒がつてゐるのもかまはずうごいてゐた。しまひは父もおこつて、僕をしかつた。

僕はいつもの鳴きつらだが、はじまつて来た。すると父は、急におき上つて、かぢみをもつて来た。父は僕に「顔を見な」といひながら、かぢみを出し。かぢみを見たら、目のまはりが黒くなつてゐた。

僕のくせ

私のすきなこ

弟のがんこ

姉の笑ひこゑ

その時、あまりおかしかつたので、目になみだがあるのに、かぢみを見ながら一人で笑つてゐた。今でも、外を通ると、そのことを思ひ出しては、一人でくすくす笑ひながら歩く。

笑ふたびに、よその人は何だと思つて僕の顔を見る。そのたびににはづかしいやうな氣持がする。

指導事項

一 自分の惡癖を反省した心から生れた文だ。心そのものに價值があるばかりでなく、自分にかうした反省を加へたものを文の材料としたといふ上からいつても、取材慾を示唆する格好の例にもなる。

二 文の起しは大そうよい。反省といふことは、ある意味に於て、道德的な概念をもつが、こゝでいふ反省はさういふ意味を餘り重しとしない。かうしたことから考へると、さりげなく、むしろ一種のユーモアを含めた意味で文を起したはよい。が、文の結びが、極めて露骨な道德的反省に墮して、ユーモアといふやうな餘裕を見せてゐない。そこに、頭が張つて、尾がそれにつかない憾がある。

三 文中「僕はいつもの鳴きづらだが、はじまつた。」といふ照應のうまくないところもあるが、見逃してもよからう。然し、子供の方から發見したら、むろん訂正の必要はある。

參考文例

書方

僕は書方が初めはすぶふんへたであつたが、この頃だん／＼上手になつた。

初の頃はたてのせんをひいて、すうとぬくことが出来なくて、ぬいたあとがのこぎりののはのや

僕のすきな學

科

今日の算術

うになつたり、又びよろしくになつたりしたが、だん／＼なほつてきて、今ではそんなことはめつたにない。

はじめは美などはどつたことはなかつたけれども、こんどの手本になつてから、美を五六度とつた。そのくらいだから、僕は上手ではない。まだぜんまるを二度しかとらないけれども、五つまるは何度もとつた。

三これから清書の際には、わき見もせず、話もせずかゝらうと思ふ。又次の字を書く時には、その字の手本をよく見てかゝらう。これからは、一しようけんめいになつて、書方が上手にならう。

指導事項

一學業に限つたことはないが、例へば自分の仕事について、この程度の緻密な省察のあることはいふことだ。生活をなほざりにしないことだ。

二さういふ點で交話の材料となる。

1 經驗をよく考へてみる。進んでるか、いつも同じかなど。

2 その態度をあらゆる自分の生活上に盛ること。

三經驗に緻密な省察があるといふのは、文字かき方を事もこまかに観て居る態度をさしたのだ。

もとより、之等は、指導者の暗示によつて生れた態度かも知れない。が、その暗示がもうかうなつて働き出せば、それは全然子供のものといつてよい。

參考文例

あつむさん

僕のしん友

讀方でおもしろかつたところ

二時間目のい

うぎ

一年の體そ

このあつむさんといふのは、私の大好きな友だちである。度々家に來て色々な話をして下さつた。それは今あつむさんが學校に通つて、どんなことをしてゐるか、それについてどんな出来事があつたかなどいふことや、りよかうに行つて色々しくじつたことなどをはなして下さつた、心のやさしいなさけふかい人である。

私をはじめ妹たちは、このあつむさんとしたしんで、家に來るとまはりならずりとならんで、そのお話を聞いて居た。このやうにあつむさんは私や妹をかはいがつてくれた人である。

おしいことに、この十二日頃に病氣で此の世を去つてしまつた。はじめ電報が來て、その電報に「あつむ昨十時死す」と書いてあつたのを讀んだ時、むねがつかへたやうな氣がして、しばらくの間は言葉も出なかつた。

やつと「まあ、あつむさんが死んでしまつたの」と言つた時に目からはあつ／＼涙がわき出てきた。その時やつと、あつむさんはこの世を去つて、あの暗い／＼闇の世界に行つてしまつたことに氣が附いた。そのためにこれからはいつまで待つても、一度も會ふことが出來ないのだといふことをしんじた。

今もそのことを思ふと、にはかにあつむさんがこひしくなつた。あのようふくを着て、白いカバンをさげたすがたが、目の前にうかんできた。あゝあつむさんもう一度私にあつて、よく顔を見せて下さい。

指導事項

一したしみあつた人の死をきいて、一層思慕する心のまして行くのを味はせたい。

となりの徳ち

やん

死んだ千代子

さん

おねえさま

私となかのい

い人

二作者と生前のあつむさんとの、したい友情をも十分汲ましてやりたい。その友情が死に會つて、にはかに大きい思慕となつて行くのだから。

三その思慕も、作者が此の文をなして行く途中から、一刻一刻高まりつゝあることも察せられる。作者が、とう／＼たまらなくなつて、あつむさんに呼びかけてる。なき人を現實にかへして語つてる。「あつむさんもう一度私にあつて、よく顔を見せて下さい」何といふ切情だらう。

参考文例

家の近所

家の近所には、さい玉縣人ばかりゐるき宿しやがある。其のき宿しやにゐる人たちは、皆二十以上の人ですが、其の下を通ると、二かいのまどにこしかけて、僕たちの悪口を言つたりする。それだけでも、僕たちだつて、負けてはゐない。皆でちや目とかでこぼうとか色々あだ名をつけておいて、其の人たちが出て來ると、「ちやめ」とか「でこぼう」とかいつてにげて行く。

それから家の右かには、小さい家がならんでゐて、左かには大きい家がすつとならんでゐる。それで、夜になると、家の近所は、しんと静まりかへつて、何の音もしないが、たゞ風の音と風の吹く度に木がゆれる音しか聞えない。時々、さい玉學校の人がはな歌を歌ひながら歩いて行く。家のすぢ向ひには、「きようそんしや」といふらうどうしやなどが住んでゐる家がある。此のころは、くわけきはの事について、その家があやしいので、たんでいやじゆんさなどが、色々なことをしてさぐつてゐる。

僕の家
私の家のまへ
どなり
私のうちとそばのたばこ屋
私の家の近く
のやうす

いつか、じゆんさがだまつては入つて行つたら、中の人がけんくわをふつかけた。家の近くには、僕の學校の人の家は二けんしかない。

指導事項

- 一 説明文に近いから、その用意のもとに、説明的態度について指導したい。此の文では、「家の近所」、「家の右がは、左がは」家のすぢ向ひ」などいふ言葉で、位置を説明しようとしてゐるが、自分の家そのものを、説明して置いておかぬば、その他は、どんなところにあるのやら想像がつかない。
- 二 文題としては「家の近所」でよいが、文中に具體的な家を指すときも、やはり「……近所」では、之又、明かでない。こゝにも説明的態度のくもりがある。
- 三文に照應しない所もあるから、子供の中に發見したものがあつたら、吟味するがよからう。
- 四 「ちやめ」とか「でこぼう」とかいつて、二階の人をからかふことは、ほんのふさげとしても、知らぬ他人へ對しては悪ふさげだ。ことに都會の子供にこんな生活の醜さがあるから、一寸注意したらいい。

参考文例

へんな言葉

姉さんの家の恒さんは今六つです。
その恒さんは、去年の頃、へんな言葉をつかつてゐました。かなだらひのことをかだだらひ、

弟のくせ
となりの新ちんやのこつけ

ふくすけのことをおそくせ、だからふくすけたびのことをおそくせたび、お湯にはいつてのぼせると、あああ、のそぼれちやつた、りんごのことをぎんご、あまつたと言ふのをあつまつた。それから、僕の一番下の四つの妹は、みかんのことをおんかん、ようかんのことをおんかん、僕のことをどうしてだか、ひやちやんといつてみました。いつだつたか、妹が「おんかんをちようだい」といつたので、ようかんのからはこを出したら、それではないといつたので、みかんをだしてやつたら、にこ／＼してそれだといひました。

指導事項

- 一此の文も指導上取材方面に一番價值があらう。
- 二觀察の行き届いた點もよい。然し、餘り、かうした觀察、かうした取材にのみふけると、とんだ悪ふさけのみ喜ぶやうになるから注意が肝要。

參考文例

お父様に上げる手紙

お父様、こちらはまだ寒うございますが、九州の方は、ずい分おあつたかです。お父様はいつごろ御用がお済みですか。おすみになつたらすぐおかへり下さい。三月の二十六日は、證書じゆよ式があります。お父様がその頃おかへりになれば、僕は通知表と證書をお目にかけます。美が多かつたらおみやげをたくさん下さい。

弟も、學校に上がるので、毎日大あがりです。もう洋服もくつもらんども出来て来ました。弟は、夜になるとそれを持ち出してゐばつてゐます。早くおかへり下さい。さやうなら。

い
妹のおあいき
やう

旅行中のお母
様へ
をち様へ進級
を知らせる手
紙

をば様へお祭
のおつかひ

三月十四日

誠

お父様

兄さまへ家の
やうすを知ら
せる

指導事項

- 一四年になれる喜び、しかも成績がよいといふ自信のよろこび、それを他郷にゐる父へ知らせたい心の手紙である。で、作者のその喜びを味はしめねばならぬ。
- 二同時にこの喜びは、こちらでの消息の中、お父様にとつて一番心にかけてゐられるものなことも知らしめたい。そこに、作者のこの喜びが、手紙として通信される材料となる。弟の學校へ上がることも、それにつく消息であるべきは勿論だ。
- 三こゝでもやはり實際手つゞきとして、封皮に書かせ、郵送する迄の手順に運ばせる。
- 四此の學年では一學期に一篇づゝ手紙の文をあげ、
- 1一學期には、親類でもありお友達でもある割合近くの方へあげる手紙で、子供同志のおつき合ひを主としたもの。
- 2二學期は、やはり親類でありお友達でもあつたが、さう會ふことの出来ない遠い京都の方へ。中味は多少一家の御あいさつを代表した意味での安否伺ひといつたやうなもの。
- 3さうして三學期は今かゝげたもので、すべて子供の経験をもり込んだもので、たゞ手紙といふ一種の約束にのつとり、対象をはつきり意識してかくといふことを指導したに過ぎない。
- 五以上の意味で、手紙に對する一應の文話としておきたい。

參考文例

六年生との悲しい別れ

月日のたつのは早いもので、いつの間にか三月になつて、そつぎやう生との御別れの歌を習つた。去年は何ともなかつたが、今年の六年生には、知つた人がたくさん居るせいか、御別れするのが悲しくて仕方がない。

ほんとは、そつぎやう生が中學生になるのだから、喜んで上げなければならぬのだが。

ぎせんの時の分たい長であるもろ君や、口の大きいわたなべ君、せいの高い佐久間君など、僕は皆すきだ。

此の間「おれたちはもうぢき此の學校を去らなければならぬから、もう小松たちとぎせんは出來ないねえ」ともろ君が言つた時には、泣きたい程になつた。

よく僕たちは、もろ君の事をぼろ君、わたなべ君のことをがま口などからかつたことを思ひ出すと、すまない氣がする。いよゝゝ卒業式の日、あの歌を歌ふ時にはどんな氣持がするだらう。

指導事項

- 一 如何にも實感にあふれた文だ。親切をうけた様々の思ひ出が、しみじみ胸にせまつて來る。
- 二 卒業生のもろ君がいつた言葉には、上級生としての品位と慈愛とがみちてゐる。作者の愛慕と並んで双璧をなす觀がある。
- 三 文にも少しもすきがない。簡潔であるが、充實した筆致である。
- 四 全部自分の心を語つたこともよい。「味ふ力」といふやうなものゝ發現であらう。經驗の事實を

兄さんたちの卒業

お別の唱歌

卒業式のれんしふ

嬉しいことかなしいこと

のみ多く取扱ひがちであつた此の學年が、等しく之も經驗にはちがひないが、心の交通をかうも深く體してゐることは、從來の經驗と選を異にする。

五 涙ぐましい程眞情の流露した文だ。

六 此の學期の成績を中心に、子供の文の成長について文話をしたい。同時に一年間の成績についても、子供自身の反省なり氣付きなりをいはして、各自に感想を述べさせたい。

七 此の感想は、一學期の初頭から、一々整理しておいた自分の作品について、見通した結果の文であることはいふまでもない。

尋常小學第四學年

指導要項

尋常科第四學年頃の子供は、前學年から引き續いて、文章がぐんぐ伸びる時代である。故に、指導の大方針としては餘りむづかしい要求や干渉を避けて、出来るだけ自由に、子供の思ひ存分を書き擴げさせなければならぬ。だが、其の間に次の様な方面の指導をして行きたいと思ふ。

一 取材

1 經驗の反省を稍深くすること。

初歩の綴り方に於いては、經驗を只其の儘平面的に記述すると云ふので、満足しなければならぬと思ふが、本學年に於いては、事實的の經過のみならず、其の時に於ける心持を出来るだけ深く書く様にならなければならぬ。それは當然次の項目に關聯して來る。

2 物事を味つて見る初歩の指導をすること。換言すれば經驗を深くすることである。即ちあらゆる事象物象を、平面的事實としてのみ見ずして、其の中に流れてゐる意味を見出すことである。かうした物事の見方で文の材料を取らせること。

3 題材がなるべくかたよらないやうにすること。
強ひて各種の文章を作らせると云ふのではないが、餘りに、一局面のみを見て、それを材料とする様では、よくないから、出来るだけ、各方面から題材を取らせる。

二 腹案

4 日記文や書簡文を加へること。
1 経験の順序に従つて、文を行ふ様にすれば自然であるから容易であるが、文を行ふ手法としては、必ずしもさうとは限らない。故に、其の手法の初歩を本學年では知らさなければならぬ。即ち、目次を定めること、文の起しと結び、文の中心、筋と味、全體と部分、其の他全體と敬體との適用などに就いて、考へさせ、これを指導する。

三 記述

1 なるべく自然に自由に綴らせること。
2 特に落ちついて文字を丁寧に書くやうにすること。
3 文の目次に従つて、段落を切つて書かせること。

四 推敲

1 次第に自己訂正の習慣を作ること。
此の頃の子供は、記述することは好むが、一旦記述し終つたものに對しては、極めて冷淡である。これは文をよくする上から極めてよくないことであるから、自分の作品に對して、自ら出來得る限り訂正する習慣を養はなければならぬ。
それがためには、一と通り出來たら必ず讀み返させること、そして、語の重複の有無を調べて、訂正すること。文全體に就いて、補正すること、これ等の習慣をつける。

五 文話に就いて

1 参考文を示して、鑑賞し批評せしめること。
2 批評の材料を與へて練習すること。
3 次第に文章觀を與へること。
この學年では、自分の生活をはつきり書いたもの、文に味のあるもの、この二つの條件が具つてゐるものが、よい文章であることを知らせる。
4 初歩の生活鑑賞によつて、綴らんとする心を養ふこと。生活鑑賞は、文を綴らんとする動機を旺盛にし、題材を豊富にするもので、これが出來たら、綴り方教授は過半成功してゐるのであるが、此の學年では其の初歩を養ふのである。

教授細目

第一學期		指導豫定時數 凡二十四時間
參考文例	及	指導事項
四 參考文例		參考文題
三つのすみれ		上野公園の散歩
お日様はきら／＼とかどやいて、春の暖い風が、そよ／＼と吹いてゐる日でした。私は文ちや		
尋常第四學年第一學期		
		一六一

月 凡 五 (時)

んと、土手につみ草にまゐりました。つみ草を初めると文ちやんは急に、「すみれ〜」と言って、かけ出しました。私も其のあとをつけて行くと、もう文ちやんは、おしけもなく、わづか三つしかないすみれを取つてしまひました。私は、すみれがほしくて〜たまりません。すぐ、すみれを見つければじめましたが、どうしてありません。少し過ぎて、ちよつと前を見ると、下の方にすみれがたくさん咲いてゐます。私にはよろこんで、すみれの方へ近寄ると、やはりすみれではありません。名も知らない花です。つかうや色は、よくはぎの花ににてゐます。しかたなしに、私は其の花を取つてゐますと、としかやんが、つくしんほと私が取つた花を、たくさん取つて來ました。すると文ちやんは、向ふの方で、「みどりさんすみれを上げませう」と呼びました。その時はすいぶんうれしうございました。文ちやんは私に、しほれたすみれを一つくれました。私はおし花にしようと思つて家へ歸りました。

飛鳥山の花
見よつばらひ
花月園の一日
潮干狩

指導事項

一此の文例は、取材の方面を指導するに適當である。即ち、此の頃の季節の關係から自然かう云ふ種類の經驗が子供には豊富である。その經驗を其の儘文にすれば面白いのが出來ると云ふことを知らせる。

二だが、此の文のねらつた方面は、極めて表面であつて、これだけの事實の中には、味はひ方に

よつては、人情の機微な所がひそんでゐる。それを氣つかないでゐる所を指摘したい。
三文の起しは上手に出來てゐる。けれども遊びをした場所の描寫を四年生としては、今少し心得させねばならぬ。

参考文例

へんな人

土曜日の學校の歸に、へんな男に出あつた。黒いマントを着て、烏打帽子をかぶつてゐた。年はまだ三十ぐらゐかと思ふ人で、ひげをちよつとはやして、顔が赤黒くて、眼がきろ〜光つてゐた。

僕を見ると、ニヤ〜笑ひながら、「坊つちやん、どこへ行くのです。遊びにですか、お使にですか」と云つた。僕は、氣味か悪かつたから、其所に居た犬をかぢかつて、ちつとも其の人の方へは向かなかつた。其の人も向へ歩いて行つたやうであつたが、また、もどつて來て、「ほつちやん、芝居に行きませう。帝けきに」。いやだ〜と僕は云つた。其の男はへんな顔をしながら、「がくやを見せて上げませう」と云ふから、僕は、「いやだ〜」と云つて逃げ出した。
不良青年と云つたら、こんなのだなと思つた。少し行くと、巡査が、「君はどこ學校かね」と言つた。今度は巡査だから、安心して、「大塚の附ぞく」と答へた。すると、「ほ〜う、大分遠いな、通ふのにも大へんだね」と言つた。僕は心の中で、遠くつたて、近くつたつて、巡査のお世話になんかなるもんか、大きなお世話だと思つた。其の日は、へんな人ばかりに會つた。

學校の歸り
途
不良少年にあつたこと
巡査
兵隊さん
西洋人
支那人

指導事項

- 一此の文は、取材も新しく、記述の順序、部分描寫も巧に出来てゐる。四年生として、これだけ出来たら、先づ上出来である。
- 二形式方面は、別段申し分はないが、その内容の實質に、あまり感心しない處がある。逡巡の話を大きなお世話などと考へるなどは、あまりにつむじが曲り過ぎてゐる。こんな方面に對しては注意しなければならない。
- 三わけのわからぬ件の男を不良青年として警戒したのは、上出来である。

參考文例

山下先生をお送りしたとき

山下先生は僕等の教生の先生であつた。今度御卒業になつて、長崎縣の師範學校にお勤めてなるので、とう／＼お別れをしなければならなくなつた。先生が東京をお立ちになるのは、二十六日であつた。長くごやつかいになつたことは何とお禮を申してよいか、わからない。

二十六日の夜、その時は風がビュウ／＼と、うなつてゐた。内でおくつて行つたのは、僕とおとうさんと書生とであつた。電車にのつて、神田で乗り替へした。すると都合よく山下先生が乗つてゐた。見ると山下先生は電車の中でねてゐらつしやる。僕はかけだして行つて起した。東京驛に着くと山下先生をお送りする人がたくさんゐた。

先生とお別れ
今度の先生
前の先生に
紙を知らす手
別れた友だ
ち

小鳥の死んだこと

きつぷを切つて、プラットホームには入つて先生の場所をとつておいた。先生が、汽車に乗ると、急に何だかなくなつた。大せいの見送りの人達は、何やかと、しやべつてゐた。中には面白い事を云つて、一同どつと笑ふこともあつた。それでも、やつぱり僕はかなしかつた。これでお別れだと思つて先生のお顔をよく見てゐた。

さうしてゐる中に、發車のベルがなつた。先生は僕と、僕のお父さんに「さやうなら、ごきげんよう」とおつしやつた。大せいの人は萬歳を唱へた。僕も一しよに帽子を振つた。その中に汽車は走つてしまつた。僕は見えなくなるまで帽子を振つた。

それから歸つて来て、お手紙を書いて出した。それはかうである。

先生、おさわりなくおつきになりましたか。僕は、先生をお送りに行つた時は、ほんたうに悲しい心持がしました。先生のご恩は長くわすれません。僕はこれから、一しやうけんめいに勉強しますから御安心して下さい。時々、そちらの御様子をしらせて下さい。父からも母からもよろしく申しました。さやうなら。

指導事項

- 一三月から四月にかけては、先生とお別れすることは多い。その中の心持ちや、様子などを題材に取らせることは面白い。文例は、其の一例である。
- 二この文は、記述の順序も、場面の描寫も、心持の表出も出来てゐる。
- 三最後に附けてある書翰文は、かゝる場合にかゝる手紙を出すべきだと云ふことを知らせるのに

三よい材料である。四年生としては、この位に出来たらよい。
四凡て書翰文は、機会ある毎にそれを指導して、作らせることにしたい。餘り條件を多くしないで、(手紙の作法などは)普通文を書く心持ちで、たと對者だけを充分頭に於いて、書く様に導かなければならぬ。

五 参考文例

待ちどほしい潮干狩

今日は五月三日である。一日々々と近くなつて来るたのしい潮干狩は、もうあと三日となりました。

私は、もう待ちどほしくてくしかたがありません。だつて、一年の時一度しか行つたことがないんですもの。

昨日は、砂をかく熊手を買つて来ました。そして、庭の砂地をほりかへしたりして見ました。貝を入れるあみも出来てゐます。もうこれで、すつかり準備は出来てゐるのです。

もし、その日になつて雨が降つたら、どうしませう。こんなことはいらぬ心配ですが、やつぱり氣にかゝります。兄様は、わざと、「雨が降ればいな、雨降れく」などと云ひます。私はしやくにさわります。もしほんたうに雨が降つたら、兄様におこつてやらうと思ひます。

一日々々近くなる

私の今ほし
のと思ふも

妹があつた
らよいのに

今度の運動
會には

潮干狩の前
の日

遠足の朝

五 月 凡 七 (時)

たのしいく遠足よ、

私たちはうれしいな。

あさつてあした、今日となれ

たのしいく遠足よ。

指導事項

一實際経験のみが題材でなく、心の生活に於ける深い憧憬も、題材として面白いことを知らせる。

二自分の心の中を描写することは、すいぶん困難な事で、自分ばかりは、強い内容を持つた言葉だと思つて、その言葉のみによつて、説明しようとするから、出来るだけ客觀的に、その心持ちを表はすに足る事實を書く様に導きたい。この文では、兄のからかひ言などが見處である。

三綴り方で、普通文を書いた後へ、其の時の高揚した感情を表はした意蘊を書かせるのも面白い。

参考文例

私のお庭の花だん

私のお庭には、緑のものばかりで、ちつとも赤い花がないので、此の間おかあ様と叔父様が、お庭に花だんをつくつて、赤い花や紫の花をかつて植えました。なんだか小さなお庭が大きくなつたやうに見えます。私は、さつそくじよろを買つていきました。

庭のつどじ

葉櫻

藤だな

私は、其のじよろで、毎朝花に水をかけてやります。今頃は、買ひたてなもんだから、あきないでかはくとすぐかけてやつてゐます。昨日はおもちやのふんすいを買つて来て、花だんの上のじよろにかけて、下にばけつを置いてやつてゐます。お母様は、「ばけつではぐあいが悪いでせう。金魚鉢を買つて、金魚を入れて、それにかけてらよいでせう」とおつしやいました。

私は早く金魚鉢と金魚とを買つて下さればよいと思ひます。だから、此の頃は、道を歩いてゐても、金魚屋の前や金魚を賣る聲がすると、ほしくてくたまりません。

指導事項

- 一 自分の内の家屋、庭園、などからも、よい題材の得られることを知らせたい。
- 二 此の文例は、批正材料として扱つてもよい。中頃まではうちの花だんのことを書いてゐるが、終りの方は、金魚鉢や噴水のことと及んでしまつてゐる。つまり、不用の部分のあることを諷す材料として取り扱ひたい。

参考文例

ふさ子ちゃん

おとなりにふさ子ちゃんと云ふかはいゝ赤ちやんがゐます。それはく私をすきです。ふさ子ちゃんのおかあさんよりも、私の方をすきなぐらゐです。けれども、お母さんがお乳をだせば、やつぱりおかあさんの方へ行きます。

なぜ、私がそんなにすきだと言ひますと、私が、ふさ子ちゃんをだけば、すぐ私の内へつれて

内の妹内の姉さん
私の従弟
私のいとこ

来て遊ぶからです。私の家は、ふさ子ちゃんの家よりも廣くて、あぶなくないからです。それからふさ子ちゃんのスきなのは茶だんです。ひき出しをあげたりしめたりして遊びます。病氣の時でも、私の家の茶の間にはいれば、すぐなほるくらゐです。

私がふさ子ちゃんの家遊びに行きますとけんかんへ出て来て、手をあけて、「ぶーぶー」と言ひます。其の時、だつこしてうちへつれて行かうとすると、おかあさんが、「又行くの」と氣の毒さうに言ひます。さうするとふさ子ちゃんは、あたまをふつて、いや／＼をします。そして、「はいちや、はいちや」と頭をさけます。

指導事項

- 一 尋常四年生としては、普通の出来だと思ふ。自分の兄弟、姉妹、近所の子供などを題材として書く時の、手法を知らせたいと思ふ。人物を描寫するには、其の人の特徴を最も具體的事實によつて表はすのが、よいことを知らせる。
- 二 表面的な寫生に終らず、其の人柄心情を表はすことの大切なことを知らせる。

参考文例

うちの子猫

私のうちに、この間お父様が、お姉様の所から、小さい／＼かはいらしい子猫をいたゞいていらつやいました。そして私が、手をかけますと、猫は私の手をひつかきました。その時、私は、「あゝ、元の猫がやつぱりいゝ。なぜ死んだのだらう」と思ふと、元のねこが、かはいさうでく

内の祖母さん
内のお父さん

たまりません。でもやつぱりしかたはありません。

そこで今度の猫をじやらしてあげますとよくじやれます。日がたつにつれて、なほよくじやれて来ます。そのねこには、玉と云ふ名をつけました。今では、ほんたうにかはいくになりました。

うちでは大やねこが、よくかへませんからこの猫をかはいがつてやりませう。

玉公の毛の色は茶と黒と白とです。そして女です。私は、この猫が大好きです。けれどもやつぱり元の猫がかはいさうでたまりません。もうこれからは、この猫を元の猫と思つて、かはいがつて、やりませう。

かはいよ

玉公よ。

こんどはあたしと

ごいつしよに

ながくいきといで

指導事項

一自分の内の家畜に對する出来事、愛着、などが非常に可愛い題材になることを知らせる。それも今までは、其の形態や所作などを表面的に記述させたのであつたが、この頃からは、それに対する自己の心的生活を記述する様に導きたい。

六 参考文例

僕のしつぱい

二此の文に於いては、右の意味から、元の猫と比較して、それが可愛いとが、今はやむを得ないから、今の猫を、元のそれと思つて、愛護してゐる心持をよく味はせたいと思ふ。つまり内部的交渉を題材として、それをよく表はすことを知らせたい。

學校から歸つて来ると弟が、にこ／＼しながら、「にいさん、すまふをしやう」と云つた。僕は弟に負けてたまらないと思つて、「よし、やつてつかはす」といつて、服をぬいで、さるまたをはいた。

そこへ兄さんが来て、「おれがぎやうじだ」といつて、小さい新聞紙でぐんばいうちわをつくつて、「はつけい、のこつた。」と、どなつた。二人は立上つて、取くんだ。僕は、おびをつかんでき上げた。けれども弟は、きうに僕のかたの上をとびこして土俵のまんなかへとおびおりました。

僕はおどろいて、うしろむくと、弟は僕のうでをつかんで、土俵の外へ出さうとしたのであらう。土俵ぎはへ来ると、きうに帯をつかんであしかけをし、僕はうしろへひつくりかへつた。

一回目はかうして僕が負けた。が、二回目は弟をたゝいてさん／＼におした。けれどもなか／＼外へ出ない。僕はいきなりおすと、手はすれて土俵の外へころがつた。

二回目も負けた。

先生に叱られたこと
父に叱られたこと
電車から落ちたこと
徒競争で負けた時
くやしかつたこと

三回目は負けないと思つて、またを開いてゐた弟が、立上つたので、僕は弟をまたの下へおしつけたら、弟はまたのしたで、きれいに手をついた。僕は、ばんざいとどなつた。兄さんが兩方ともたどんが一つさづかつたと云つた。
弟は、くやしさに僕の顔を見つめた。四回目には弟に、こてなけをせられたので、僕は弟の足につまづいてころがつた。

それで、とうとう僕は、弟に負けてしまつたのである。あゝ、しつばい。

指導事項

一 題材の面白いこと、記述の精緻なこと、言葉遣の巧なこと、總べて、この學年としては上出来である。鑑賞材料として、取扱つたらよからう。

二 文の起しと結び、部分の精叙、などをよく味はせたい。

参考文例

雨の頃

この頃は、さみだが、しとくとふつてばかりゐます。今日も、朝からふつてゐます。ほんたうにいやな雨です。今朝お日様と、起つくらをしやうと思つたのに、いやな雨がふつてゐて、せつかく起きたのに、何にもなりません。いつまでたつたらお天氣になるのでせう。

朝からはんまでふり通し、お天氣になるとすくすいじやうきになつて空へ上つて行つてしまひます。さうして、だんく空へ上つて行く中に夜になると空気がひえますから、水のかさが大き

此の頃の雨
雨の朝
雨あがり
雨の日の學校

くなつて下へ落ちて來るのです。

私は、雨は大きらひです。なぜかといふと雨がふると學校からかへる時でも、びしよぬれになるからです。

この間の雨の時かさをさして來ても、びしよぬれになりました。お内へかへつてから洋服をぬいで見ますと、下着からなにから、びしよぬれになつてゐました。

又お日様があたつてゐる雨がふつてゐる時、きつねのおよめ入りだと云ひます。

指導事項

一 批正材料として示した。右の様な文に對しては、文を書く態度に就いて説明しなければならぬ。

二 この文は、文を書く態度が、一定してゐないことは、云ふまでもない。この頃の雨の辭陶しさを書くかと思へば、雨の降る理由に説き及び、日照り雨のことを書いてゐる。

従つて、一貫した感じが浮ばない。又従つて、文に無駄が多い。この點をよく指摘したい。

参考文例

おたまじやくし

この間、植物園の池から取つて來たおたまじやくしが、大分大きくなりました。中にはもうかへるになりさうなものもあります。

三日に一度は水をとるかへてやります。とりかへてやると、うれしさうにして、水の中を、お

雨がへるの
こゑ
蛙つり

雨はいやだ

よぎまはります。

昨日から、かへるになりはじめました。今朝かぞへて見ますと、はじめ三十一匹だったのが、もう十八匹しかありませんでした。もう足のはえてゐないのは、一匹もありません。

私はあんまり少くなつてゐたので、きつとだれかど、いたづらをして殺してしまつたのだらうと思つて、弟や妹を呼んで聞いて見ますと、弟は「そんなことしらないや。僕昨日水をとりかへたばかりなんだもの」と云ひました。こんどは妹に「うたちやんは」と聞きますと「しらないことよ、そんなこと」といひました。私は不思議で「たまりませんので、お部屋へはいつて、お支度をしてからご飯をいたゞきに行かうとしますと、まあ、どうでせう。おどろくではありませんか。かへるがたくさんびよん／＼とんでゐました。」

私は、何匹ゐるかと思つてかぞへて見ますと、やはり十三匹でした。私はしばらくの間何も云はずに、ほんやりとそのかへるを見てゐました。

今日かへつたら何匹かへるになつてゐるか見ませう。

指導事項

一 題材の取り方が面白いことを稱へなければならぬ。日に／＼變り行くおたまじやくしの成長を題材にしたのは面白い。この方面から、朝顔の成長、菊の成長、蠶の成長などを書く様に導いたら面白からう。

二 この文例は、観察の精密なことを稱へて文を書くには、よく観察しなければならぬことを知ら

ひきがへる

金魚

朝顔

菊

かひこの成長

せたい。

参考文例

僕の未来

僕は工學士になるつもりであつたが、兄さんが、「法學士になれ」とすゝめたので、やむを得ず法學士にならうと決心した。

しかし、僕が法學士になると、僕の考へがむだになつてしまふ。ふと思ひついたのは、川井君が工學博士になると言つた事だ。僕はやつと安心した。

僕は法學士になり、あはれな人を助けようと思つてゐる。其のわけは、今泉と言ふ人が「辯護士になつて、裁判に出て、悪人をこらしめて善人にしろ」と言はれたからだ。

指導事項

一 かう云ふ方面にも題材がある。尋常四年生位で、自分の將來の理想を語らせるなどは少し過ぎてゐると云ふ人があるが、やはりこれ位なことは、子供が空想的に考へてゐるのであるから、それを發表せしめて、其の考への正否を見ることは必要である。

二 この文例は、工學士にならうと云ふ決心をした理由が、不明瞭なために、文全體が不明瞭である。かう云ふ點を指摘して、導かなければならぬ。

参考文例

僕が大人になつたら

僕は軍人がすきだ

夏やすみ

夏休もあと二十日となりました。

去年のことを思ひ出すと、早く海にあひたいと思ひます。

白波の中で遊んだり、かひを取つたり、砂遊びをしたことは、ありぐと私の頭に残つてゐます。

去年日立に行つた時は、行ちやんと言ふ女の赤ちやんが、産れました。今年いつたらどんなに大きくなつてゐるでせう。

又日立には、なつかしいお友達が私の來るのを待つてゐるでせう。

この間、おかあさんが、たんすの一番下にある海水浴着をとり出して、にこ／＼笑ひながら、「みいちやん。もうこれをきるじせつがちかよりましたよ」とおつしやいました。

私は、それを聞くと、急に海に行きたくなつて、早く夏休みが來ればよいと思ひました。

指導事項

一前に待ちどほしい潮干狩を書いた心持で書かせたらよい。しかし、夏休は、時期が長いだけ、期待することが多いであらうから、それをよく書くやうに導きたい。

二この文例で、去年の夏休のこと―赤ちやんのこと、お友達のこと母の話などは、よいねらひどころである。

参考文例

去年の夏み

はこの夏休に

は夏休のけい

かく

直枝さん上げる手紙

直枝さん、しばらくごぶさたいたしました。直枝さんは、おかはりございせんか。私も丈夫です。うちの亮ちやんも、てつちやんがゐないと、さびしがつてゐます。

此の間はめづらしいお菓子をいたゞいて、まことにありがたうございます。亮ちやんはさつそくたべてしまひました。

こんどの日曜には、きつと本郷へ、おあそびに参ります。直枝さんの方は、昨日學けい會があつたさうですね。私は池田さんにきゝました。お話には、大そう面白かつたさうですね。今日それで、お休みなのでせう。女子しはんの生徒が面白さうに朝早くから遊んでゐました。直枝さんも、どこかへおあそびに行くのでせう。

それから此の間寫眞をうつして送つてあげると申しましたが、あれはまだうつしませんか。それからあのベルはまだ直枝さんの所に居りますか。何とかはいゞ犬でせう。私は、あのベルのことを思ひ出すと、いたゞきたくて／＼たまりません。まだ生きてゐるでせう。

内のわうむも、來たばかりの時には、色がわるくて、死にさうでしたが、今ではほんたうにかはいくなりました。

こんど本郷へ行つたら、きつとあのベルを見せてちやうだいね。

てつちやんにも、かづ枝さんにも、さつちやんにも、よろしくいつて下さい。それではさやうなら。

病氣見舞の

文 寫眞を送る

文 學藝會の有様を知らす

指導事項

一此の頃の書翰文は、格別に題を出さなくて、子供の自然の生活から、必然的に出て来る様にした。そして、彼等の日常生活から起つて来る社交によつて、書かせることにしたらよい。

参考文例

學藝會

木曜の日。先生が、來週の金曜日は、學藝會がありますと、おつしやいました。私と妙子さんと學校がへりに、「何にしませう」と相談をしました。

私「此の間學校の講堂でライスカレーと云つて、ライスカレーをこしらへるまねをしたわね。だから、私と妙子さんとオムレツにしませうか。それで、妙子さん、こしらへ方よく知つてゐるの。私はよくは知らないけれども、少し知つてゐるわ。はじめフライパンに油かバターをぬつて、そこで卵を充分焼いて、こまかく切つた肉を玉ねぎとじやがいを入れるのよ」妙子さん「それでもだめよ。道具がないわ。だからよしませうよ」

私「それじや妙子さん、何にしませう。先生が出なくつてもいゝとおつしやつたわね。それだけれども、出なければ勇氣がないわ」

妙子さん「それでは何に出るの。朗讀？」

私「朗讀、いや。」

そこで別れてしまひました。

口がらかひ

けんくわ

夏休の相談

山と海とど
ちらがよい
か

今朝妙子さんと學校へ來ながら又

妙子さん「それでは、活動寫眞をしない？あのね、繪を書いて、それをたゞ手で動かすの」

私「これでもやつぱりだめだね」

妙子さん「それではおしほい？」

私「いやだ、そんなもの」

と云つてゐる所へ、松山さんが來て、「活動ならいゝこと教へて上げませうか。あのね、教だんの前に幕をはつて、暗くして、其の幕のうしろに電氣をつけて、電氣の下で、おどればそのまゝうつるでせう」と云ひました。

私「それじや、かけろ見たいなのね」

と云つて、中々きまりませんでした。しまひに對話と唱歌をすることにりました。

指導事項

一對話の書き表はし方を知らせなければならぬ。これに就いては、對話と地の文との關係、を知らせることが大切である。

二取材の方面も經驗事項ではあるが、計畫の經過なども面白い題材となることを知らせる。

三此の文例は、記憶の再現のみであつて、題材に就ての作者の主観的表現は少い。この點は、文に内容あらしめる様に導かなければならぬ。

第一一學期

指導豫定時數 凡二十六時間

參考文例及び指導事項

參考文題

參考文例

八月十八日の事

八月十八日の事朝飯を食べて馬車で、まの御陵へ行き、長い間馬車に乗つて、やつと、まの宮へ着いた。

夏休み中で一番面白かつたこと

しばらく休んで十町ある御陵へ向つた。やがて、七町ばかり来ると名だきの梅があつた。私は見とれてゐたが、又てくく歩き出した。やつと御陵へ着いたが、中へ入れない。外で拜んだ。

夏休中の出来事

御陵の中は、晝でもまつ暗で、實にさびしい。御陵をはなれた。又前の道を通つてまの宮の前へ出た。しばらくして馬車の所まで行つた。まの宮をはなれ、宿屋で御飯を食べてから、明ぜん寺へ行つて、熊若丸が、親のかたきをとる時、かくれてゐたかくれ松があつた。本堂の正面に熊若丸の父の墓があつた。その墓はかくれ松の横にある大きな墓である。

夏休中の旅行

かくれ松は、かこひがしてある。本堂を出てくらの中へは入つて、大きな太鼓をたゝいた。いきなりたゝいたので「どん」と大きな音がした。おどろいてしまつたが、面白半分にとゝいた。その太鼓は古い大きなやぶれ太鼓である。

くらの出で、一の谷明正寺へ行つた。しんとした森をくゞつて、やつと廣い所へ出た。そこで、

九月(凡七時)

水を飲んで寺へ着いた。

まづおどろくのは、本堂の大きいことである。寺の中に一本大きな柱があつた。その時チンチンチンチンと四時を打つたので、すぐ歸り道についた。

指導事項

一第二學期の初め、即ち九月の初めには、夏休中の生活の回想が潑刺としてゐることと思ふから、その方面から、題材を豊富に選ばせる様に導きたい。

二改めて綴り方の時間に綴らせなくても、日記として書いて來てゐる中から鑑賞材料として、取り出して、取扱つてもよい。

三日記文の心得を、夏休の日記を材料として、知らせることがよい。

參考文例

雨の日

今日も又雨です。お母様は今朝「ほんたうにこまつちまふはねえ。せんたくものが、かわかないで」と一人ごとの様におつしやいました。一たい、いつになつたらお天気になるのでせう。金曜日と土曜日は、よいお天気だったので、私は、今度こそはお天気がつくとお思つて、ほくほく喜んでゐましたら、又雨、ほんたうになきたくなつてしまいました。せつかくの日曜日も、どこへも行かれず家でいんきな、つまらない日を過したのであります。

弟は、昨日一日ぶつ／＼おこつてゐました。それは、どうしてかと云ふと土曜日の晩にお父様

昨夜のあらし

昨日の大雨

洪水

こはい風

が「あしたは、ボートレースだよ。もしもあしたよいお天気なら、恒芳だけはつれて行つてあげよう」とおつしやつたからです。

やつと雨が小ぶりになつたので、庭けたをはいてお庭へ出ました。すると朝顔の葉の上を、かたつむりが、のたり／＼と、のんきさうに、はつてゐました。

お庭を通つて、ものほしげのあるところまで、行つたら、ものほしげほの下の方につゆがこぼれたまつてゐたから、一寸ふつて見たら一度にほた／＼と音を立て、地におちました。又雨がふつてきました。私も、もう内へは入りませう。

指導事項

- 一 二百十日頃から二十日頃にかけては、大風大雨が多い。これ等から題材を取ることを指導する。そして、これ等から喚起される気分、情緒を表はす様に導く。
- 二 この文例は、雨から起る情緒をよく表はしてゐると思ふ。母のくやみ、弟の愚痴、自分の感じ、を材としたところが面白い。具體的の材料を集める手法を知らせたい。

参考文例

お父様のお話

お夕はんの時、お父様が「御飯がすんだらお母様と一しよに、お父様のおへやへいらつしやいとおつしやいました。皆は、胸をた／＼いて喜びました。

御飯がすみました。私たちは、にこ／＼顔で、お母様の後について、お父様のおへやへ行きました。

秋の夕方

秋の夜

夕焼

虫の樂隊

した。其の時お父様は煙草をふかしていらつしやいました。私たちが来たので、笑ひながら「おはいり」とおつしやいました。そして、「今日お話するのは、「くぢらにのまれた人」と云ふのだよ。その人は叔父様のお友だちの又その友だちの姉の子供のおじさんの其の又おぢいさんなんだとさ」とおつしやいました。私は「え、叔父様のお友だちの、又其のお友だちの姉さんの、お父さんのおぢいさん」と私は、わからないで、かうおき／＼しました。するとお父様は「いゝえ、姉さんの小供のおぢいさんのおぢいさんだよ」と、よく教へて下さいました。

私は「あゝ、さう。姉さんの子供のおぢいさんのおぢいさん。わかりましたわ、それから」

お父様「其の人かね。或日海で泳いで居たら、知らぬ中に沖へ流されてしまつたのださうだ。さうしたら鯨が、えさだと思つて、のんでしまつたのだ。その人は急に、あたゝかくなつたもので、びつくりして目をあけて見ると、鯨のお腹の中だらう。なほもおどろいて口の方へいつて見ると口はしめてゐるので、でることが出来ない。困つてゐると、鯨が、息をしたので、それと一しよに海の中へ落たのだつて。」と、おつしやつて、又煙草に火をつけて、おいしさうに飲んでいらつしやいました。煙草の煙は、お父様のお口からも、お鼻からも、氣持よくすつすと出ました。

「それから／＼」と弟や妹がせがむので、お父様は又お話をなさいました。

「そうしたら、其の時鯨を取る船がゐたので、その人はたすかつたわけさ。それがめでたし／＼おしまひ。ピリピリ——」と、おつしやいました。